

安曇野市の埋蔵文化財第 25 集

## 明科遺跡群古殿屋敷 3

安曇野市消防団第 6 分団第 1 部詰所建設に伴う  
第 3 次発掘調査報告書

2022. 3

安曇野市教育委員会

安曇野市の埋蔵文化財第 25 集

## 明科遺跡群古殿屋敷 3

安曇野市消防団第 6 分団第 1 部詰所建設に伴う  
第 3 次発掘調査報告書

2022. 3

安曇野市教育委員会

表紙写真 明科遺跡群古殿屋敷第3次発掘調査調査出土灰釉陶器坑

裏表紙写真 明科遺跡群古殿屋敷第3次発掘調査 A 区完掘（南から）



A区完掘状況（上が東）



柱穴列 SA01（北から）



土壙 ST01 遺物出土状況（北から）



土壙 ST01 出土遺物

# 序

安曇野市教育委員会では、かけがえのない市民共有の財産である埋蔵文化財の発掘調査等を行い、地域の歴史資料の蓄積及び調査結果の公開普及に努めてまいりました。

本書では、令和2年度に安曇野市消防団第6分団第1部詰所建設に際して実施した、明科遺跡群古殿屋敷第3次発掘調査の成果をまとめました。この遺跡では、これまでの第1次・第2次の発掘調査で、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物や、平安時代の木棺墓がみつかりました。特に、平安時代の木棺墓は安曇野市では初めて確認したもので、墓に伴う高級品として、漆塗りの箱に入った青銅製の八稜鏡、緑釉陶器や灰釉陶器といった、他地域から搬入した陶器類が出土しました。

本書に掲載した第3次発掘調査の調査区は、この木棺墓がみつかった第1次発掘調査区に接する場所であり、調査前から成果に関して期待がもたれていました。調査の結果、さらに一基の平安時代の墓壙のほか、ほぼ正確に真北を指して並んだ柱穴列、複数の掘立柱建物跡を確認しました。これらの遺構は、調査範囲の外にまで広がっており、全容を解明するには、今後の調査への期待が持たれるところです。

末筆となりますが、本書をまとめるにあたり、多くの皆様、諸機関にご協力とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。

本書掲載の調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野地域の歴史・文化の解明に役立つことを祈念し序といたします。

令和4年(2022)3月

安曇野市教育委員会  
教育長 橋渡 勝也

## 例言

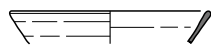
- 1 本書は、<sup>ながの けん あづみの し</sup>長野県安曇野市に所在する、<sup>あかしな いせきぐんふるとの やしき</sup>明科遺跡群古殿屋敷第3次発掘調査の報告書である。
- 2 本書掲載の調査は、安曇野市教育委員会が実施し、安曇野市が費用負担した。
- 3 本書の編集は、安曇野市教育委員会教育部文化課が行った。執筆は土屋和章が担当し、中谷高志が統括した。
- 4 出土資料の自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに業務委託した。
- 5 本書で使用した主な引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。ただし、第7章では節末に掲載した。
- 6 本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 7 調査全般にわたり以下の方々から、ご指導・ご協力をいただきました。(敬称略・五十音順)  
大澤慶哲、原明芳、細尾みよ子、松田洋輔、百瀬新治、山田真一

## 凡例

- 1 発掘調査及び整理作業に際し、調査略号として遺跡名のアルファベット (Furu-Tono-Yashiki) と調査年度 (西暦 2020 年) の組み合わせである次の表記を、遺物注記等に使用した。  
明科遺跡群古殿屋敷第3次発掘調査：FTY20
- 2 調査及び本書での遺構名は、次の略号を使用している。ただし、再掲・引用した第1次調査については、報告書 (安曇野市教委 2013) 記載の遺構略号を使用した。  
SA：柱穴列 (堀・柵・土塁) SB：建物 SK：墓・埋葬施設 (第1次調査のみ)  
ST：墓・埋葬施設 SP：ピット
- 3 本書での「土坑」「土壙」の表記は、以下の基準に拠った。  
土坑：一定の容積を有する穴で、機能を限定しないもの。  
土壙：一定の容積を有する穴で、墓としての機能が想定されるもの。
- 4 本書実測図で遺物は次のように表現した。また、縮尺は各図に示した。



土師器 断面無地



軟質須恵器 断面灰色 (70%)



灰釉陶器 断面灰色 (18%)



緑釉陶器 断面灰色 (50%)

- 5 土器の記載では、基本的に器形について「形土器」の表記を省略した。  
例 甕形土器：甕
- 6 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 7 本書では、平成 17 年 (2005) 10 月 1 日の町村合併より前の旧郡名・旧町村名について「旧」を省略し、「東筑摩郡」、「明科町」のように表記した。
- 8 本書掲載の地形図は個別の記載のない場合、安曇野市都市計画基本図 (1/2,500) を基図とし、調製したものである。
- 9 文献引用等に際し、各機関の名称を以下のように省略した。  
埋蔵文化財センター：埋文セ 教育委員会：教委 編纂委員会：編纂委

# 目次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・挿表目次・写真図版目次

第1章 調査の契機と経過	1
1 調査の概要	1
2 調査の契機と事業計画の概要	2
3 調査の経過	2
4 調査体制	4
5 発掘作業・整理作業の経過	4
6 調査日誌抄	4
第2章 遺跡の位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	7
3 古殿屋敷の概要	9
第3章 調査の方法	11
1 調査区の設定	11
2 発掘作業	11
3 整理作業	11
第4章 層序	14
1 A区	14
2 B3区	14
第5章 遺構	16
1 土壌	16
2 柱穴列	17
3 掘立柱建物跡	18
4 B1～3区	20
第6章 遺物	34
1 A区	34
2 B1・3区	35
3 第1次発掘調査（再実測）	35
第7章 自然科学分析	40
1 放射性炭素年代	40
2 明科遺跡群古殿屋敷（第3次発掘調査）出土の歯牙	43
第8章 調査の総括	46
1 成果と課題	46
2 方形柱穴	48
3 平安時代の墓域	49
写真図版	53
引用・参考文献	61
調査報告書抄録	



## 挿図目次

第1図	調査位置図	1	第19図	SA01 (SP05)	28
第2図	河岸段丘略図	6	第20図	SB01	29
第3図	古殿屋敷付近の遺跡	8	第21図	SB02	30
第4図	古殿屋敷・栄町遺跡 発掘調査区位置図	10	第22図	B1区	31
第5図	グリッド配置図	12	第23図	B2区	32
第6図	調査区全体図	13	第24図	B3区	33
第7図	A区北壁	14	第25図	土師器坏Aの口径・器高分布	35
第8図	基本層序	15	第26図	出土土器(第3次)	36
第9図	A区全体図	21	第27図	八稜鏡(第1次追加実測)	36
第10図	A区遺構配置図	22	第28図	出土土器類・金属製品 (第1次再実測・追加実測)	37
第11図	B1～3区全体図	23	第29図	暦年較正結果	41
第12図	ST01	24	第30図	古殿屋敷出土の歯牙1	45
第13図	ST01 遺物出土状況	25	第31図	古殿屋敷出土の歯牙2	45
第14図	SA01	26	第32図	第1次・第3次調査区合成図	47
第15図	SA01 (SP22・01)	26	第33図	方形柱穴の長・短軸分布図	48
第16図	SA01 (SP14・02)	27	第34図	奈良・平安時代の墓	51
第17図	SA01 (SP10・03)	27			
第18図	SA01 (SP12・04)	28			

## 挿表目次

第1表	事務手続き経過	3	第9表	測定資料及び処理	40
第2表	古殿屋敷付近の遺跡	8	第10表	放射性炭素年代測定 及び暦年較正の結果	41
第3表	古殿屋敷発掘調査記録	9	第11表	方形柱穴の規模	49
第4表	遺物注記	11	第12表	安曇野市のおもな平安時代の墓	50
第5表	SA01のピット間距離	17	第13表	長野県内で乳歯を出土した 奈良・平安時代の遺構	52
第6表	出土土器観察表(第3次)	38			
第7表	出土金属製品観察表(第1次)	38			
第8表	出土土器観察表(第1次)	39			

## 写真図版目次

1	調査状況	53	5	調査状況	57
2	調査状況	54	6	調査状況	58
3	調査状況	55	7	調査状況	59
4	調査状況	56	8	調査状況・出土遺物	60

# 第1章 調査の契機と経過

## 1 調査の概要

あかしな いせきぐんふるとの やしき  
明科遺跡群古殿屋敷第3次発掘調査

所在地	あづみの しあかしなかがわて 安曇野市明科中川手 4232 番 1
調査面積	103㎡
発掘作業	令和2年(2020)6月5日(金)～令和2年(2020)8月4日(火)
整理作業	令和2年(2020)8月5日(水)～令和4年(2022)3月31日(木)
調査契機	その他の建物(消防団詰所)



第1図 調査位置図

## 2 調査の契機と事業計画の概要

明科遺跡群古殿屋敷（以下、「古殿屋敷」とする。）第3次発掘調査の調査原因となった事業は、安曇野市による安曇野市消防団第6分団第1部詰所建設及び付帯工事である。新築建造物は、建築面積82.81㎡の木造平屋建、外構整備での主たる掘削は雨水浸透マス1.8×1.8m×3か所である。雨水浸透マスについては、3か所掘削したうち2か所に浸透マスを設置し、残りの1か所は浸透マスを設置せず埋戻した。

本件工事については、まず令和2年（2020）3月16日付け1財管第2311号にて、安曇野市長から長野県教育委員会教育長あてに建造物本体にかかる「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。

その後、付帯工事として敷地内の舗装（As舗装、Con舗装、碎石敷き、鋤取り約20cm、合計734.24㎡）、ホース塔設置（φ350mm、掘削深度約2.8m）、雨水浸透マス設置（1.8×1.8m、掘削深約2.0m）、上下水道取り出し（上水：最大掘削深1.2m、W0.6m、下水：最大掘削深2.6m、W1.0m）について、令和2年（2020）5月8日付け2財管第192号にて「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。

## 3 調査の経過

古殿屋敷第3次発掘調査は、令和2年度安曇野市消防団第6分団第1部詰所建設に伴う緊急発掘調査である。この遺跡では、これまでの調査で古墳時代の遺構、平安時代の木棺墓を確認している（安曇野市教育委員会2013・2016）。このうち、平成23年（2011）の第1次発掘調査では、駐車場排水溝設置に際して地表下約65cmで平安時代の木棺墓を検出し、ここから緑釉陶器・灰釉陶器に伴って青銅製八稜鏡が出土した。

今回の詰所建設位置は、第1次発掘調査位置を包含し、掘削深度は建物基礎部分で約0.65mである。このため、事業者と埋蔵文化財保護協議を実施したところ、十分な保護層を確保することが不可能であったため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

調査に際しては、調査地が安曇野市役所明科支所の駐車場及びスクールバス車庫前であるため、関係所管と随時協議を実施した。

第1表 事務手続き経過

	年月日	文書番号	内容
1	令和2年3月16日	1財管第2311号	「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」（文化財保護法第94条）が安曇野市から市教委に提出される。（本体工事分）
2	令和2年3月17日	1文第3059号	上記1の通知を、市教委教育長から県教委教育長に進達する。
3	令和2年3月18日	元教文第8-339号	県教委教育長から、記録作成のための発掘調査の指示通知が発出される。
4	令和2年3月23日	—	上記3通知を市教委にて受理する。
5	令和2年5月8日	2財管第192号	「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」（文化財保護法第94条）が安曇野市から市教委に提出される。（付帯工事分）
6	令和2年5月11日	2文第371号	上記5の通知を、市教委教育長から県教委教育長に進達する。
7	令和2年5月14日	2教文第8-43号	県教委教育長から、記録作成のための発掘調査の指示通知が発出される。
8	令和2年5月18日	—	上記7通知を市教委にて受理する。
9	令和2年6月5日～ 令和2年8月4日	—	発掘調査を実施する。
10	令和2年8月5日	2文第1030号	「埋蔵物発見届」を市教委教育長から安曇野警察署長あて、「埋蔵文化財保管証」を市教委教育長から県教委教育長あて提出する。
11	令和2年8月11日	2文第1050号	「発掘調査終了報告書」を市教委教育長から県教委教育長あて提出する。
12	令和2年8月21日	2教文第20-38号	「文化財の認定及び県帰属について（通知）」が県教委教育長から発出される。
13	令和2年8月24日	2文第1151号	上記12の通知を市教委にて受理する。
14	令和3年3月2日	2文第2504号	「出土文化財譲与申請書」を市教委教育長から県教委教育長あて提出する。
15	令和3年3月4日	2教文第24-18号	上記14の譲与申請に対して「出土文化財の譲与について（通知）」が県教委教育長から発出され、譲与が承認される。
16	令和3年3月8日	2文第2581号	上記15の通知を市教委にて受理する。

## 4 調査体制

調査主体 安曇野市教育委員会

	令和2年度	令和3年度
事務局	教育部 文化課	教育部 文化課
文化課長	山下泰永	山下泰永
文化財保護係	中谷高志（文化財保護係長） 土屋和章、横山幸子	中谷高志（文化財保護係長） 土屋和章、斉藤雄太
調査員	白居直之、横山幸子、土屋和章	白居直之、土屋和章
作業参加者	田多井智恵、望月裕子、宮下智美、木村隆一、 斎藤浩明、等々力哲男、中村哲也、三澤俊秀	田多井智恵、望月裕子、宮下智美
調査内容	発掘作業、整理作業、自然科学分析（歯牙同定）	整理作業

## 5 発掘作業・整理作業の経過

古殿屋敷第3次発掘調査における現場での発掘作業は、令和2年(2020)6月5日(金)～令和2年(2020)8月4日(火)に実施した。詳細は、調査日誌抄として後述する。

整理作業は、令和2年(2020)8月5日(水)～令和4年(2022)3月31日(木)に実施し、本書を発行し全事業を終了した。整理作業においては、遺物の洗浄・注記・接合、自然科学分析を令和2年度中に終了し、令和3年度は、図版整理、遺物実測図作成、写真撮影及び報告書作成を行った。

## 6 調査日誌抄

令和2年(2020)

6月5日(金)

地縄張り、グリッド測量、スクールバス打合せ

6月8日(月)

スクールバス打合せ

住民対応のため掘削開始を6/11(木)に延期

現場仮囲い完了、地縄確認

6月9日(火)

測量打合せ、グリッド方位角 N15° 07' 53" E

掘削開始を6/15(月)に延期

6月10日(水)

敷地中央浸透マスが土置場となるため養生

6月11日(木)

機材搬入

6月12日(金)

雨天のため作業なし

6月15日(月)

表土除去開始、土壙・ピットを検出、物置搬入

6月16日(火)

A区西壁・北壁で壁面清掃、基本層序の記録作成

6月17日(水)

作業員参加、遺構検出、A区壁面清掃

グリッド測量完了、A区全体図作成(1/50)

6月18日(木)

遺構検出、検出状況写真撮影、空撮、遺構精査

平行して本町遺跡・龍門淵遺跡試掘

6月19日(金)

雨天のため作業なし

- 6月22日(月)  
A区排水  
遺構精査・実測
- 6月23日(火)  
遺構精査・実測・写真撮影  
SK01 精査、木質片・骨片を検出
- 6月24日(水)  
SK01 精査、その他遺構精査・実測
- 6月25日(木)  
SK01 実測、遺物取り上げ、写真撮影  
方形柱穴列(SK02～06) 写真撮影  
その他遺構精査・実測
- 6月26日(金)  
雨天のため作業なし
- 6月29日(月)  
A区排水、遺構精査・実測
- 6月30日(火)  
遺構精査・実測
- 7月1日(水)  
未明までの降雨でA区水没のため排水  
遺構精査・実測、本日で全遺構完掘
- 7月2日(木)  
A区全体清掃、A区完掘写真・空撮、平面図作成
- 7月3日(金)  
A区下層掘り下げ(1×1mグリッドを面的に掘り  
下げ10～20cm深まで精査)、下層に遺構等なし  
A区西壁・北壁の土層確認  
A区内水準測量
- 7月6日(月)～7月8日(水)  
雨天のため作業なし
- 7月9日(木)  
A区排水、正午までに終了  
事業者と協議、A区埋戻し・浸透マス掘削は天候が  
回復してから実施  
天候の見通しがたつまで、発掘作業休止
- 7月27日(月)  
A区排水
- 7月28日(火)  
A区排水  
浸透マスの位置・数量について事業者と協議  
現在設計中で、掘削はどちらの場合でも対応できる  
よう3か所行う  
浸透マス掘削か所にB1～3区を設定
- 7月29日(水)  
A区を砕石で埋戻し  
B1～3区表土除去
- 7月30日(木)  
B1～3区遺構検出、遺構精査、実測
- 7月31日(金)  
B1～3区完掘、写真撮影、実測  
作業員参加は本日まで
- 8月3日(月)  
現場実測、機材搬出
- 8月4日(火)  
完掘状況撮影・空撮、完全撤収

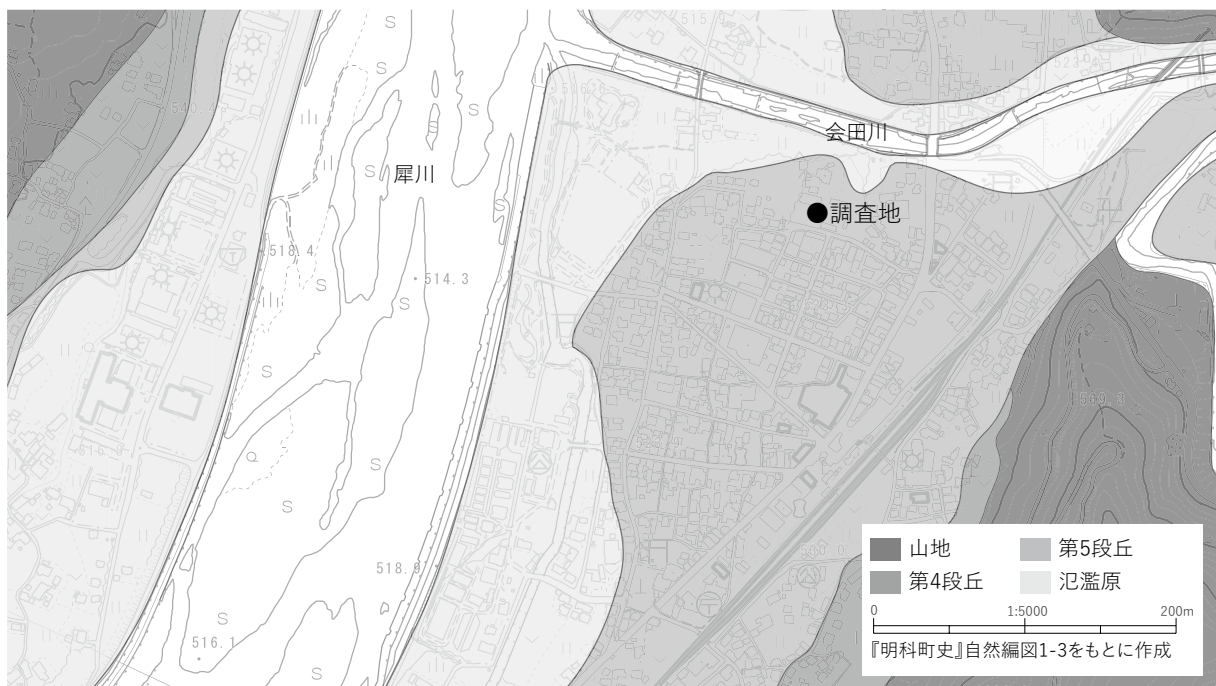
## 第2章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

安曇野市を含む<sup>まつもとぼんち</sup>松本盆地は長野県のほぼ中央にあたり、西を標高2,000m超の<sup>ひださんみやく</sup>飛騨山脈に、東を標高1,000m程度の筑摩山地に画される。安曇野市は盆地の中央付近、松本市街地から北西に10km程度の距離に位置する。安曇野市内で現在の集落が分布する範囲は、飛騨山脈山麓の標高700m付近から、安曇野市北東部の<sup>ちくまさんち</sup>生坂村との境界地点の標高500m付近までで、標高差にして約200mの範囲である。

安曇野市内を流れる主な河川としては、高瀬川、<sup>たかせがわ</sup>烏川、<sup>からすがわ</sup>穂高川、<sup>ほたかがわ</sup>黒沢川、<sup>くろざわがわ</sup>犀川がある。盆地北部から南流する高瀬川と、安曇野市北部において東流する穂高川、盆地南部から北流する犀川の三川が、安曇野市明科地域で合流し、犀川丘陵内を生坂村、<sup>おおまちし やさか</sup>大町市八坂、<sup>ながの しんしゅうしんまち</sup>長野市信州新町を経て長野盆地へ流入する。盆地西側ではこれらの水系に合流する<sup>なかぶさがわ</sup>中房川、烏川、黒沢川などの扇状地が発達し、大規模な扇状地群を形成している。

古殿屋敷は、高瀬川、穂高川、犀川の合流地点から約1.5km北に位置する。この遺跡は、筑摩山地から西流し犀川に注ぐ<sup>あいだがわ</sup>会田川の左岸段丘上に広がり、南北約0.1km・東西約0.15kmの規模である。『明科町史』自然編では、明科地域の河岸段丘を第1～5段丘に分類しており、古殿屋敷は第5段丘に所在する（降旗2007）。遺跡内の標高は約523～524mと平坦で、現在の犀川河床からの比高は約10mである。第5段丘は、古殿屋敷付近で南北0.6km、東西0.6kmほどの平坦面をもち、この面上に弥生～古墳時代の遺跡が存在する。この一帯は、現在はJR明科駅や国道19号、公共施設、商業施設が存在し、その周辺には住宅地が広がっている。



第2図 河岸段丘略図

## 2 歴史的環境

古殿屋敷の所在する安曇野市明科地域は、松本盆地東縁の北側とその東方に広がる山地からなる。犀川が形成した河岸段丘上では、豊科田沢から明科南陸郷まで遺跡が断続的に分布しており、山間部には古墳や山城などが築かれている。以下では、主に明科地域について歴史的環境を記載する。

現在までに、安曇野市では旧石器時代の遺跡は確認されていない。現在のところ市内で最も古い遺跡の時代は縄文時代早期で、明科中川手のこや城遺跡、上手屋敷遺跡などで押型文土器の破片、ほうろく屋敷遺跡で絡条体圧痕文土器が出土している。縄文時代前期には、明科中川手の上手屋敷遺跡、明科東川手の潮遺跡群塩田若宮遺跡、明科七貴のみどりヶ丘遺跡、ほうろく屋敷遺跡で集落が営まれた。縄文時代中期になると、市内全域で遺跡数は増加する。明科光の光遺跡群北村遺跡（以下、「北村遺跡」とする。）では、中央自動車道建設に先立つ発掘調査で縄文時代中期後葉～後期の土壌から多量の埋葬人骨が発見された（長野県埋文セ 1993）。縄文時代中期後葉～後期は、こや城遺跡、塩田若宮遺跡でも集落跡を確認している。縄文時代晩期には、明科七貴の荒井遺跡で浮線文が施された水Ⅰ式段階の鉢が採集されている（明科町史編纂会編 1984）。

弥生時代の主要な遺跡としては、ほうろく屋敷遺跡、みどりヶ丘遺跡がある。ほうろく屋敷遺跡では、第1・2次発掘調査で4群16基の再葬墓とそれに伴う土器30個体余りが出土した。また、みどりヶ丘遺跡からは、宅地造成に伴う発掘調査で弥生時代前・中期の土器・石器が多量に出土した（太田・河西 1966）。特に集石遺構とされる礫群からは、変形工字文や磨消縄文が施された土器片に太型蛤刃石斧や石包丁が共伴している。

古墳時代としては、犀川右岸の段丘上に所在する明科遺跡群龍門淵遺跡で、古墳時代前期の土器がまとまって出土している。古墳時代後期になると、古墳及び集落がつくられる。明科東川手の潮古墳群は円墳を主体として構成され、発掘調査によって7～8世紀に比定される（明科町教委 2000b、2005）。潮古墳群から会田川を挟んだ明科中川手の明科遺跡群栄町遺跡では、これまでに4次にわたる発掘が実施され、古墳時代後期の集落が広がっていることを把握している（安曇野市教委 2013、2014）。

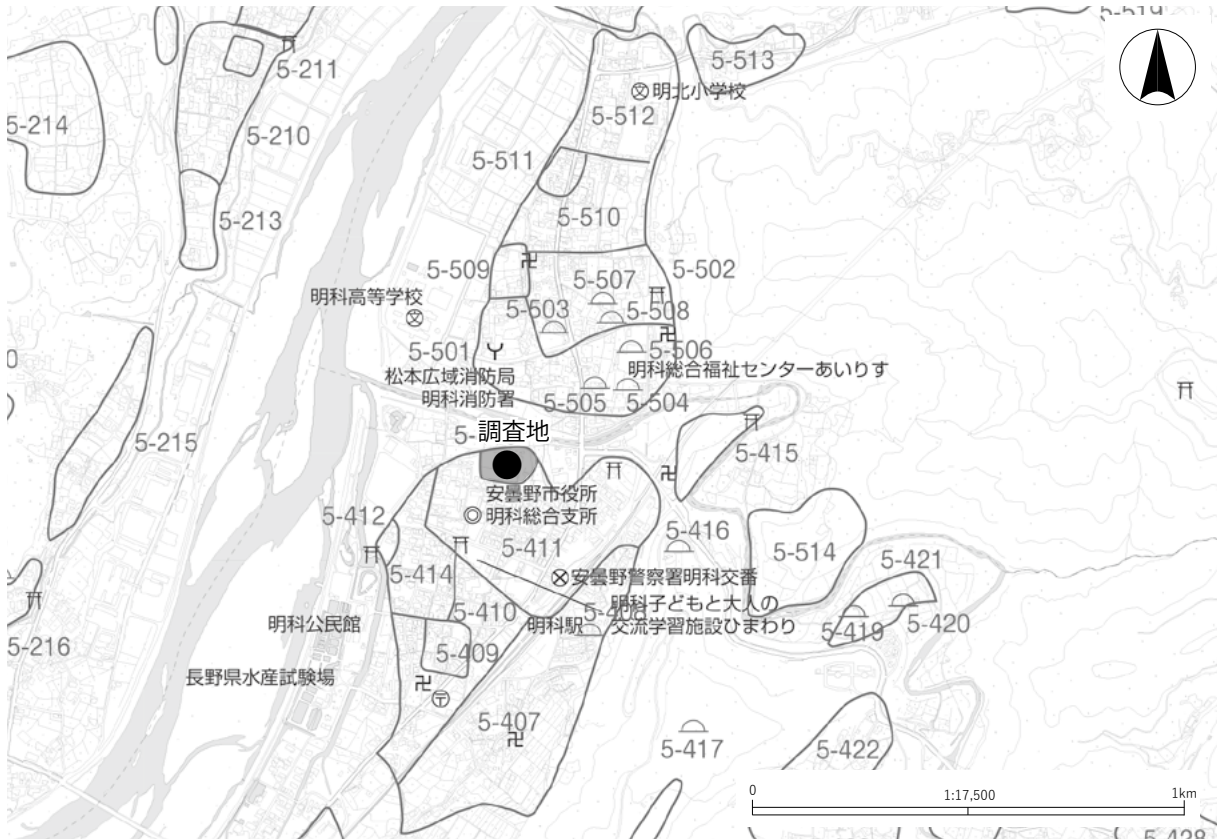
また、この時代には明科中川手で7世紀後半創建と考えられる寺院跡が確認されており、明科廃寺と呼ばれる。明科廃寺ではこれまでに5次にわたる調査を実施しており、平成11年（1999）に行われた第3次発掘調査によって掘立柱建物跡3棟、布掘り基礎を持つ掘立柱建物跡1棟などに伴って多量の瓦が出土した（明科町教委 2000a）。昭和28年（1953）の発掘調査と併せて、古代瓦のほか鴟尾や瓦塔が確認され、県内で最も古い時期の寺院のひとつとして注目されている。

古代の集落としては、北村遺跡で7世紀後半～11世紀前半に集落が営まれ、竪穴建物跡19棟、掘立柱建物跡48棟が確認されている（長野県埋文セ 1993）。また、ほうろく屋敷遺跡では、平安時代の竪穴建物跡20棟が検出された（明科町教委 1991）。遺構の時期は、9世紀後半～10世紀前半、11世紀後半～12世紀の2時期に大別される。明科地域には中世の城館跡が多く残されており、こや城遺跡、茶白山遺跡、上手屋敷遺跡、塔ノ原城址などで遺物の出土がある。このうち、塔原氏居館跡とされる



第2章 遺跡の位置と環境

上手屋敷遺跡では、平成元年（1989）と平成15年（2003）に発掘調査が実施され、内耳土器や青磁碗のほか安山岩製の宝篋印塔の相輪などが出土した（明科町教委 2004）。



第3図 古殿屋敷付近の遺跡（安曇野市埋蔵埋蔵文化財包蔵地図（平成22年（2010）3月31日調製を加工）

第2表 古殿屋敷付近の遺跡

No.	名称	所在地	種類	時代
5-210	塩川原遺跡	明科七貴	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
5-211	塩川原内堀館	明科七貴	城館跡	中世
5-213	孫五郎屋敷	明科七貴	散布地	縄文
5-214	塩川原上ノ平遺跡	明科七貴	城館跡・散布地	縄文・中世・近世
5-215	上野遺跡	明科七貴	散布地	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
5-216	やしき遺跡	明科七貴	散布地	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
5-407	明科遺跡群上郷遺跡	明科中川手	散布地	縄文・古墳・奈良・平安
5-408	明科遺跡群上郷古墳	明科中川手	古墳	古墳
5-409	明科遺跡群明科廃寺	明科中川手	社寺跡	古墳・奈良・平安
5-410	明科遺跡群泉町遺跡	明科中川手	集落跡	古墳・奈良・平安
5-411	明科遺跡群泉町遺跡	明科中川手	集落跡	古墳・奈良・平安
5-412	明科遺跡群龍門淵遺跡	明科中川手	その他（祭祀）	弥生・古墳
5-413	明科遺跡群古殿屋敷	明科中川手	集落跡・城館跡	古墳・平安・中世・近世
5-414	明科遺跡群本町遺跡	明科中川手	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安
5-415	こや城	明科中川手	集落跡・城館跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
5-416	能念寺1号墳	明科中川手	古墳	古墳
5-417	能念寺2号墳	明科中川手	古墳	古墳
5-419	武士平遺跡	明科中川手	散布地	古墳・中世・近世
5-420	武士平1号墳	明科中川手	古墳	古墳
5-421	武士平2号墳	明科中川手	古墳	古墳
5-422	吐中遺跡	明科中川手	散布地	縄文
5-501	潮遺跡群潮神明宮前遺跡	明科東川手	集落跡	古墳・奈良・平安
5-502	潮遺跡群新屋遺跡	明科東川手	散布地	古墳・奈良・平安
5-503	金山塚1号墳	明科東川手	古墳	古墳
5-504	金山塚2号墳	明科東川手	古墳	古墳
5-505	金山塚3号墳	明科東川手	古墳	古墳
5-506	金山塚4号墳	明科東川手	古墳	古墳
5-507	金山塚5号墳	明科東川手	古墳	古墳
5-508	お経塚古墳	明科東川手	古墳	古墳
5-509	潮遺跡群古屋敷遺跡	明科東川手	城館跡	古墳・奈良・平安・中世・近世
5-510	潮遺跡群浦田遺跡	明科東川手	散布地	古墳・奈良・平安・中世・近世
5-511	潮遺跡群古殿屋敷	明科東川手	城館跡	中世・近世
5-512	潮遺跡群塩田岩宮遺跡	明科東川手	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
5-513	潮遺跡群三山遺跡	明科東川手	散布地	縄文
5-514	潮遺跡群茶白山遺跡	明科東川手	城館跡・散布地	縄文・中世・近世

### 3 古殿屋敷の概要

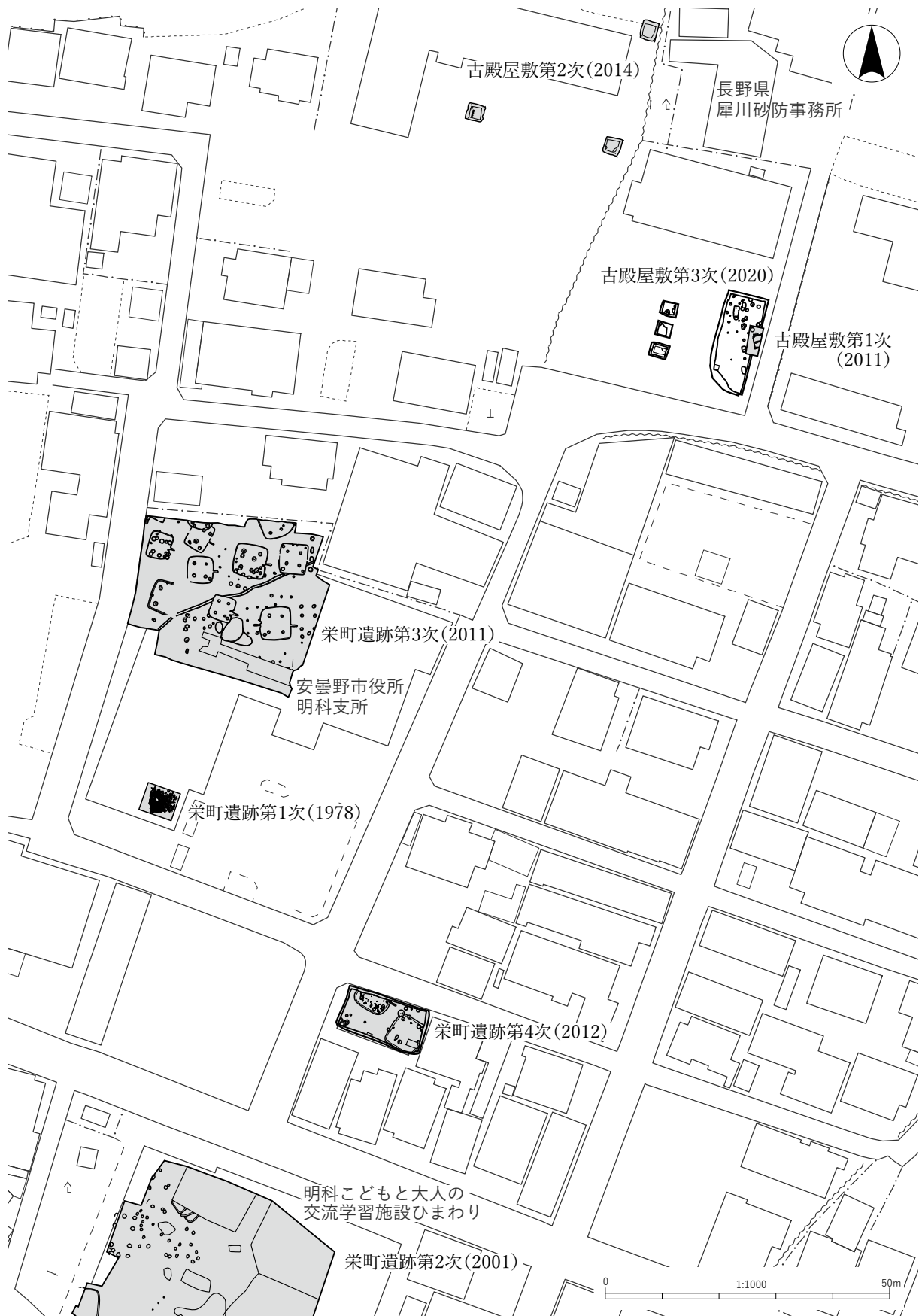
古殿屋敷は、城館跡として認識されてきた遺跡で、元禄11年(1698)明科村書上帳に「東久保平、古殿屋敷、東西二十二間、北南十四間、城主存じ奉らず候」の記載があり、この時代にはすでに城館跡となっていたことがわかる。『明科町史』上巻の発行時である昭和59年(1984)には、東側にわずかに堀跡が残っていたようである(明科町史編纂会編1984)。現況では明確に堀跡としては認識できないが、東側の地形は急斜面となっている。

古殿屋敷第1次発掘調査は、平成23年(2011)に安曇野市教育委員会が実施した。駐車場排水溝布設に伴う調査面積24㎡の調査であったが、平安時代の木棺墓から青銅製八稜鏡、緑釉陶器、灰釉陶器、土師器などが出土した(安曇野市教委2013)。木棺墓の底面下には長軸に直行する3筋の溝状掘り込みがあり、木棺を支える枕木の痕跡である可能性が指摘された。また、青銅製八稜鏡は、漆塗りサワラ材の木製容器に収納されていた可能性が高いことも判明した。しかし、古殿屋敷の所在する会田川より南の明科地域では平安時代の集落跡は未発見であり、木棺墓を有した集落の所在解明が課題となった。

平成26年(2014)には、第1次調査地の西接地で、グループホーム外構の浸透施設設置に際して第2次発掘調査を実施した(安曇野市教委2016)。調査は、3×3mの調査区を3か所設定して実施した。このうち敷地中央付近のC区では、地表下80～120cmに炭化材を多量に包含するシルト層(4a～d層)を確認し、土壌を採取して水洗フルイを実施したところ、石製小玉21点、イネ炭化種実93点(完形)を採取した。また、出土炭化材、イネ炭化種実で放射性炭素年代測定(AMS法)を実施したところ、古墳時代前～中期の年代を得た。

第3表 古殿屋敷発掘調査記録

調査次	調査年	調査略号	調査原因	遺構・遺物の概要	文献
第1次	平成23年 (2011)	FTY11	排水溝布設	平安時代木棺墓1、青銅製八稜鏡1、 緑釉陶器、灰釉陶器、土師器	安曇野市教委2013
第2次	平成26年 (2014)	FTY14	浸透施設設置	焼失竪穴建物跡1、土師器、弥生土器、 炭化米	安曇野市教委2016
第3次	令和2年 (2020)	FTY20	消防団詰所建設	平安時代土壙墓1、灰釉陶器、土師器、 柱穴列、掘立柱建物跡	安曇野市教委2022 (本書)



第4図 古殿屋敷・栄町遺跡発掘調査区位置図

## 第3章 調査の方法

### 1 調査区の設定

発掘調査に際して、明科中川手 4232 番 1 の全体に図面上で一辺 10m のグリッドを設定し、この 10m グリッドを利用して、調査区 A・B 区に現地で一辺 2m の調査用グリッドを設定した（第 5・6 図）。設定したグリッドは、敷地東辺を基準としたため、南北軸は真北から 15 度 07 分 53 秒東へ傾く。なお、この発掘調査の基準点測量では、世界測地系を採用し、補正パラメータ touhokutaiheiyouuki2011.per Ver.3.0.0 を使用して、平成 23 年（2011）の東北地方太平洋沖地震での地殻変動に基づく座標補正をした。

標高基準は、安曇野市の保有する下水道マンホールの標高 523.970m をベンチマークとし、調査用にグリッド杭 F5 に標高を移設して 524.043m とした。

### 2 発掘作業

表土除去は、第 2 次調査での土層観察結果をもとに、建設用重機を使用して現代の造成土を除去した。造成土除去後は、遺構が検出されるまで人力により掘削した。

遺物の取り上げは、原則として遺構ごとに行った。遺構観測は調査用グリッドを基準として、調査員・作業員が現場で簡易遺方測量を実施した。記録写真には、デジタルカメラ、UAV を使用した。

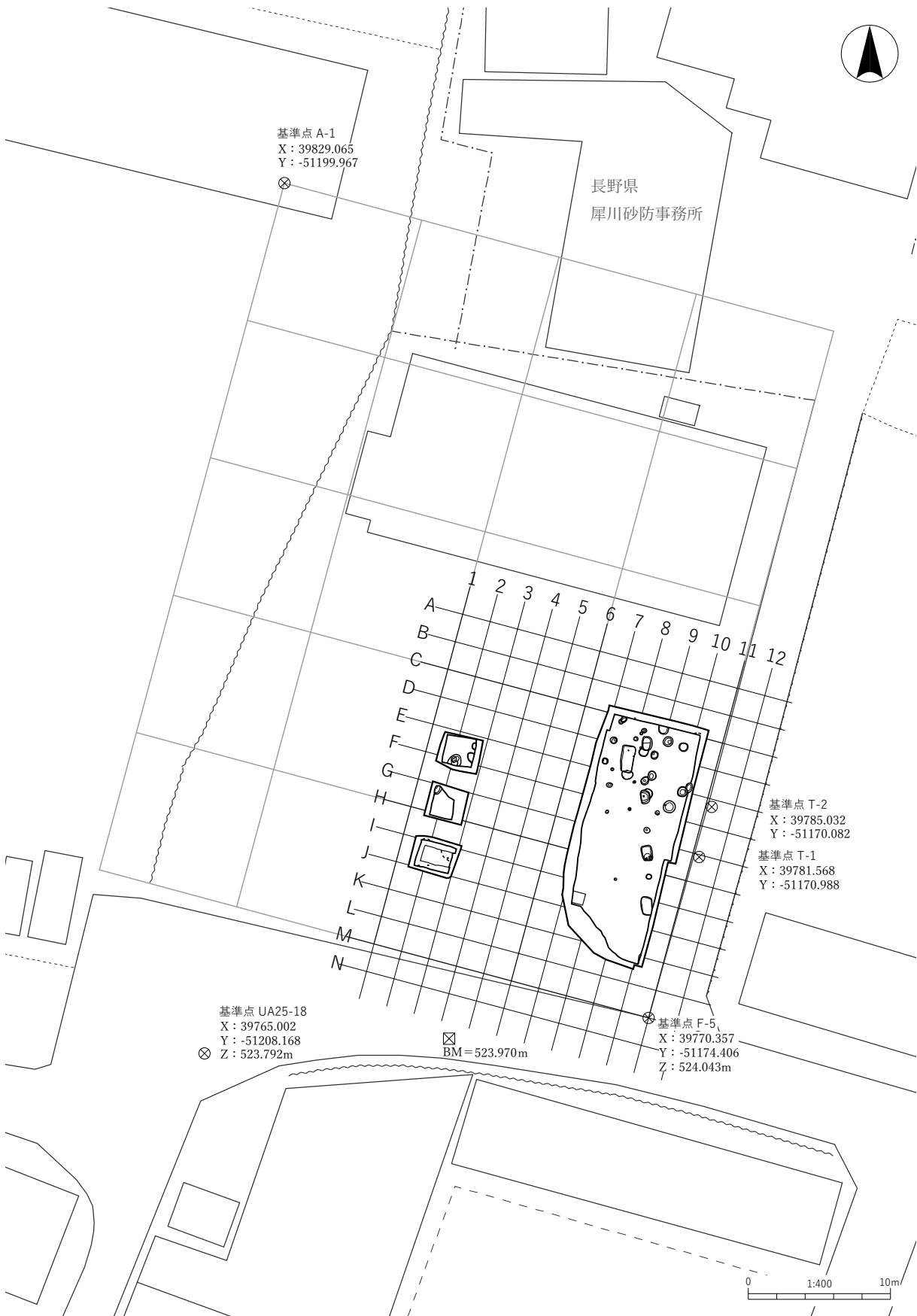
### 3 整理作業

整理作業は、現場作業終了後に室内で行い、土器等の洗浄、注記、接合、実測、属性観察、図版作成・調整、写真撮影等及び報告書作成を行った。整理作業のうち自然科学分析は業者に委託した。遺物注記は、墨汁を使用し手書きで行った。

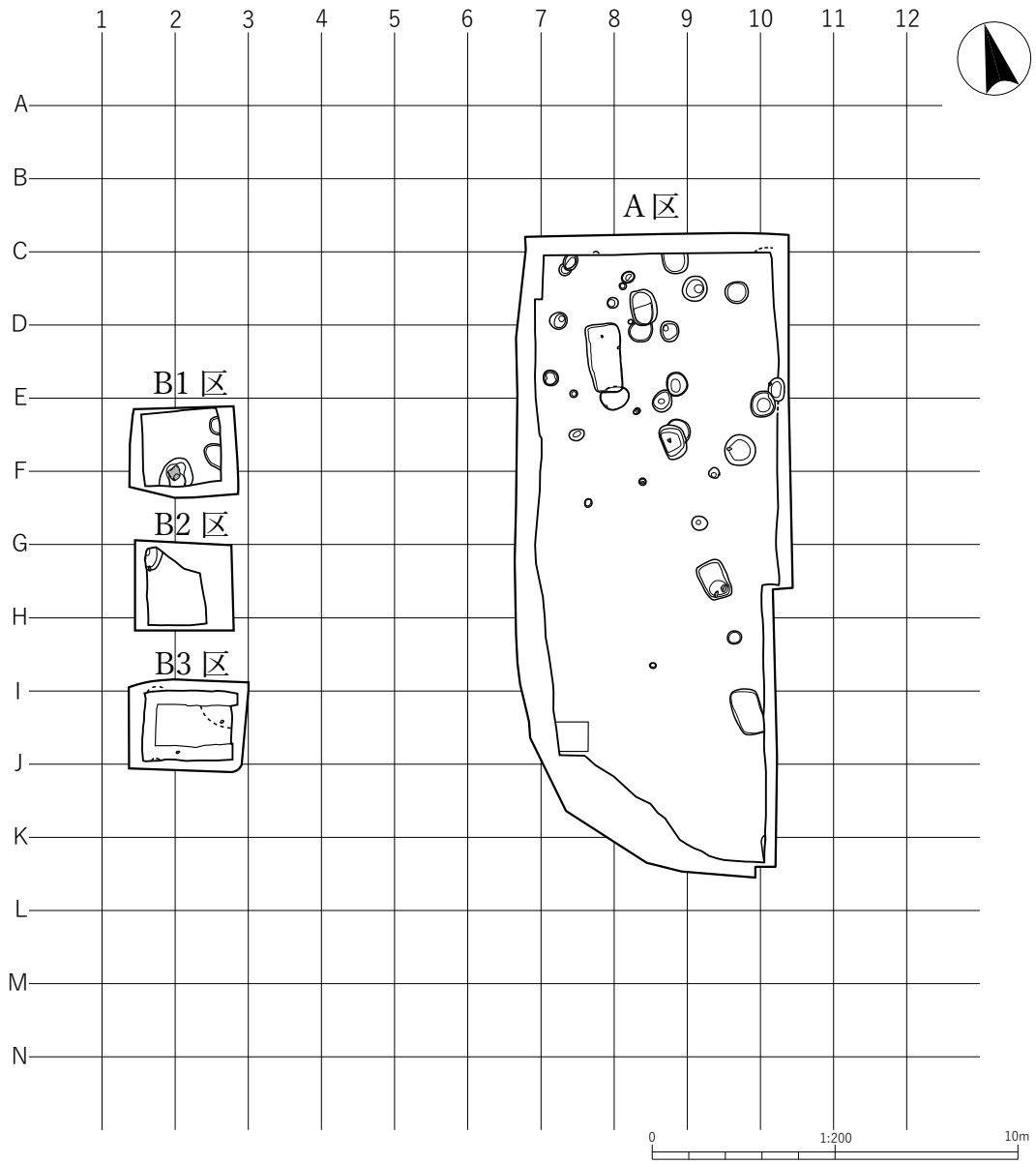
記載には、調査略号「FTY20」を使用し、以下の例によった。

第 4 表 遺物注記

内容	注記
出土位置記録遺物	FTY20 調査区名 遺構名・層名 No. ■
出土遺構記録遺物	FTY20 調査区名 遺構名・層名



第5図 グリッド配置図



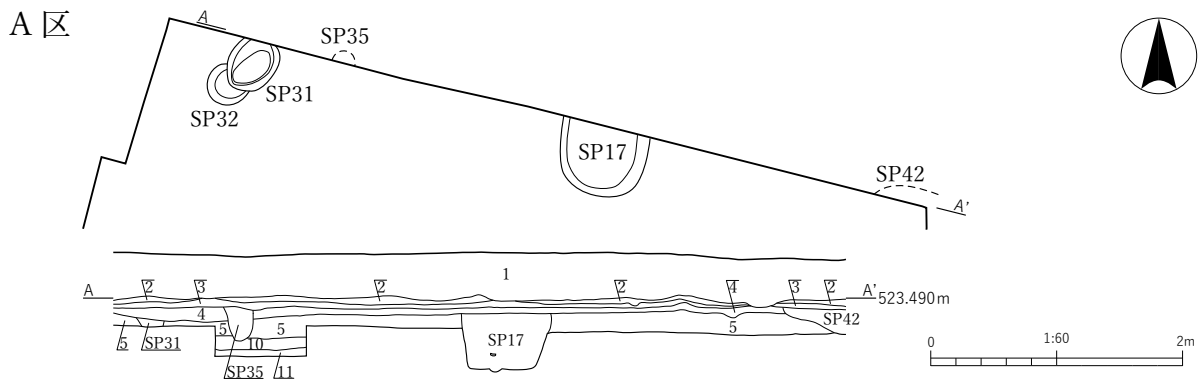
第6図 調査区全体図

## 第4章 層序

今回の調査では、A区北・西壁・B3区西壁において土層観察を実施し、基本層序の確認を行った。

### 1 A区

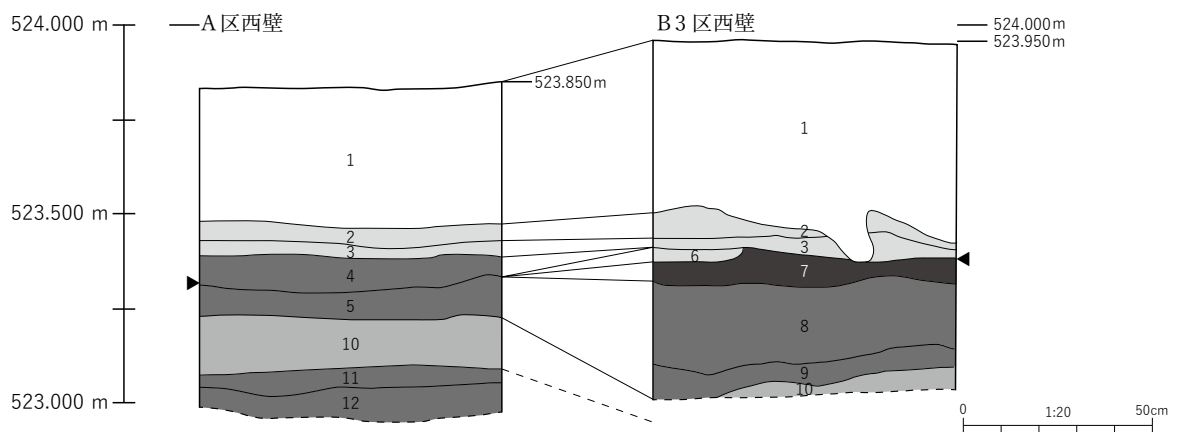
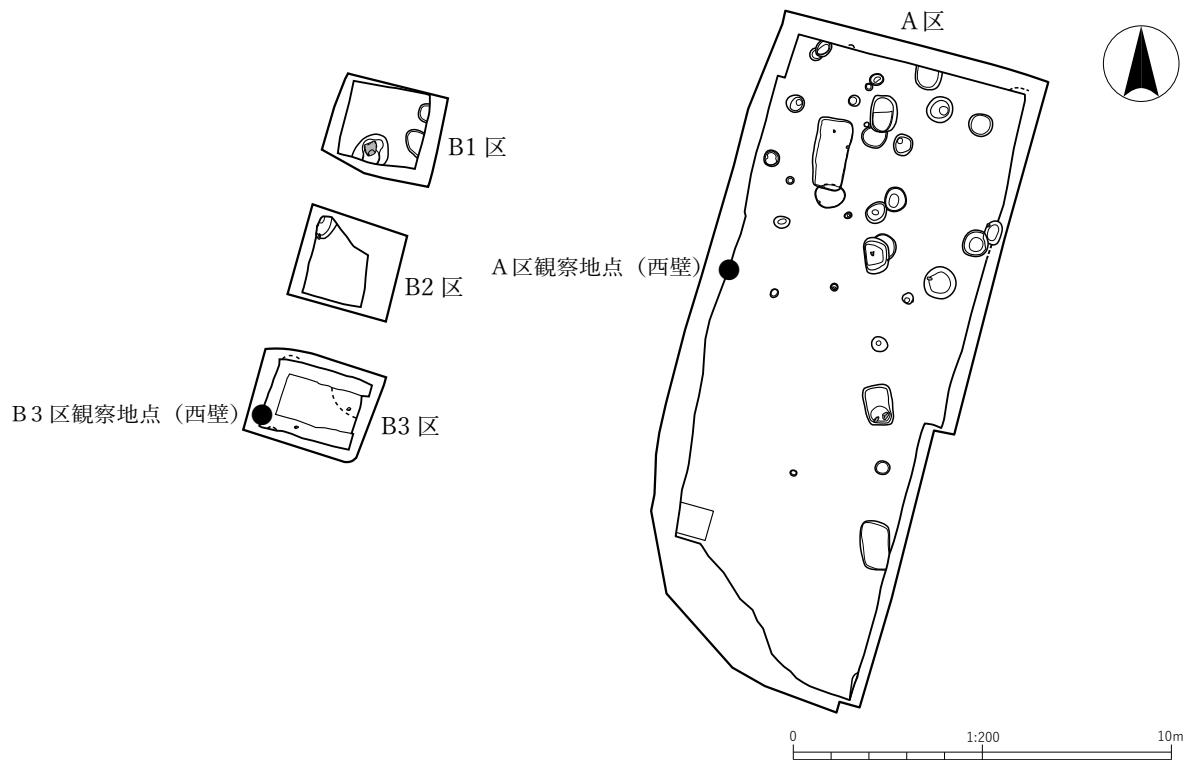
A区では、深度約90cmの掘削で、合計8層の堆積を確認した。第1層とした造成土の層序は約35cmで、その下位の第2・3層に旧耕作土が堆積し、第3層では下部に酸化鉄の濃集がある。第4層は、第3・5層より粗粒のシルト層である。A区北壁には、第4層上面から掘り込まれたピット（SP35・42）がある（第7図）。これらのピットからは遺物等が出土していないため、時期比定はできないが、層位的に第5層上面で検出できた遺構よりは新しい。第5層は、微量の炭化物を包含するシルト層で、この層の上面で平安時代などの遺構を検出できた。ただし、精査した平安時代の遺構の掘り込みが浅いことから、第5層上面で検出した遺構の廃絶後、第4層堆積までに当時の地表面が削平を受けた可能性がある。第10～12層は、褐色・暗褐色のシルト層で、第10層は微量の炭化物を包含するが、第11・12層は炭化物を包含しない。



第7図 A区北壁

### 2 B3区

B3区でも、深度約90cmの掘削で合計8層の堆積を確認できたが、その内容はA区と若干異なる。第1～3層は、A区と同様の堆積で、第1層の層厚は約45cmであった。B3区では、旧耕作土である第2・3層の下位に、炭化物・径1cm以下の円礫を包含する第6層が部分的に堆積し、この下位に全面的に弥生～奈良時代の土器片を多量に包含する第7層が広がる。第7層は、しまり・粘性ともに非常に強く、微細な土器片や炭化物が多量に混入することから、人為的な堆積の可能性も高いが、B3区の面積が狭小なため全容は不明である。第7層より下位の第8・9層は、共にシルト層で層相及び平安時代の遺構検出面との関係から、両層ともA区で確認した第5層に対応すると判断した。B3区での第10層は、掘削深度の制約から部分的に確認できたのみであるが、A区の第10層と同一の層相である。



- 1, 造成土
  - 2, 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
しまり強、粘性中  
少量の酸化鉄を含む  
旧耕作土
  - 3, 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
しまり強、粘性中  
径2cm以下の亜円礫を少量含む  
酸化鉄を多く含み、下部では濃集する  
旧耕作土
  - 4, 10YR3/3 暗褐色シルト  
しまり強、粘性中  
第3・5層より若干粗粒  
微量の酸化鉄、褐色スコリアを含む  
上部に暗褐色の粒子を多く含む
  - 5, 10YR3/3 暗褐色シルト  
しまり強、粘性中  
褐色スコリア、微量の炭化物を含む  
この層の上面で平安時代遺構検出面(A区)
  - 6, 10YR4/2 灰黄褐色粘土  
しまり中、粘性中  
カーボン、1cm以下の円礫混入  
酸化鉄集積あり
  - 7, 10YR2/2 黒褐色シルト  
しまり強、粘性強  
遺物包含層(弥生~奈良の土器多量混入)  
褐色スコリア粒(1mm以下)を多量に含む  
カーボン粒、炭化物多量混入  
粘性、しまりは柱穴群の埋土と近似する  
この層の上面で平安時代遺構検出面(B3区)
  - 8, 10YR3/3 暗褐色シルト  
しまり強、粘性中  
第3・5層より若干粗粒  
微量の酸化鉄、褐色スコリアを含む  
上部に暗褐色の粒子を多く含む
  - 9, 10YR3/3 暗褐色シルト  
しまり強、粘性中  
褐色スコリア、微量の炭化物を含む
  - 10, 10YR4/4 褐色シルト  
しまり強、粘性中  
褐色シルトのブロック、微量の炭化物を含む
  - 11, 10YR3/4 暗褐色シルト  
しまり強、粘性中  
径1cm以下の黄褐色ブロック、黒褐色ブロックを含む
  - 12, 10YR4/6 暗褐色シルト  
しまり強、粘性中  
径3cm以下の黒褐色ブロックを含む
- ※◀遺構検出面

第8図 基本層序



## 第5章 遺構

古殿屋敷第3次発掘調査で確認した遺構は、土壙1基、1柱穴列1列、掘立柱建物跡2棟、その他ピットである。以下に、A区で調査した土壙、柱穴列、掘立柱建物跡及びB1~3区の詳細を記載する。

### 1 土壙

#### (1) ST01 (第12・13図)

**検出層位** A区第5層上面

**位置** C7・C8・D7・D8グリッド

**平面形・規模** 調査区内北西で検出した遺構である。表土除去時に灰釉陶器の破片が出土したため、慎重に遺構検出を実施した。平面形は、隅丸長方形を呈し、主軸方向はN11°Eである。検出面での規模は、長軸1.88m、直交軸0.72~0.92mで、相対的に北側の幅が広く、南側の幅が狭い。遺構南辺から約4分の1程度の場所から、灰釉陶器1点、土師器3点がまとまって出土した。灰釉陶器は碗で、口縁部が下・高台が上の逆位で出土した。この周辺では、土壌化がかなり進行した人骨、木質遺物も確認できた。また、現場調査時に遺構の半分程度の量の覆土を採取し、現場終了後に水洗フルイで選別したところ、ヒトの乳歯が出土した。

**壁・覆土** 調査できた覆土の厚みは、0.08m程度と浅い。検出面での遺構平面形は明瞭であったが、壁の立ち上がりは緩やかで、明確な壁面を持たない。確認できた覆土は、1層のみであった。覆土は、シルト・粘土のブロックを包含するほか、炭化物及びヒトの乳歯も含まれていた。

**底面** 底面はほぼ平坦で、外周付近で緩やかに立ち上がる。底面のうち、遺物出土位置の周辺で南北0.5~0.9×東西0.75mの範囲で底面が黒色化した範囲があり、この部分は固くしまりが強かった。また、径10cm程度の礫3点が底面・南壁に散布していた。

**重複関係** ST01南辺で、SP28を切る。SP28は、掘立柱建物跡SB01を構成するピットであるため、ST01はSB01より新しいことがわかる。

**時期** 出土土器から、松本盆地古代11期に比定できる。

**所見** ST01は平面形が隅丸長方形を呈するため、現場調査時は木棺墓の可能性が高いことを念頭に精査を進めた。しかし、木棺の部材及び枕木などの痕跡、鉄釘の出土を確認できなかったため、木棺墓の可能性はあるものの、土壙と認定した。また、人骨は現場で確認できたものの、土壌化が進行しており採取不能であった。人骨の部位の同定もできず<sup>1</sup>、頭部が残存していなかったため、頭位方向は不明である。

出土遺物としては、土器類が遺構南辺から約0.4m北でまとまって出土した。これらは副葬品、または葬送儀礼で使用した後に埋納した品物の可能性がある。これらと同位置では、残存長約8cmの棒状の木質遺物も検出したが、腐朽が進行しており採取不能であった。

<sup>1</sup> 現場での所見では、四肢骨のいずれかの可能性が高い。

## 2 柱穴列

### (1) SA01 (第14～19図)

検出層位 A区第5層上面

位置 C8・D8・E8・F9・G9・H9・I9・I10・K10グリッド

平面形・規模 SP22・01・14・02・10・03・12・04・05 からなるピット列である。これらのピット列は、A区中央付近を南北方向に貫き南北とも調査区外に延びている。このため、調査区内だけでも、延長約17mを測る。列の軸方向はN1°Wであり、ほぼ真北を向く。ピット列は、SP01のように平面形が約0.95×0.7mの長方形を呈する相対的に大きなピットと、その北側に位置するSP10のように直径約0.35mの相対的に小さなピットがある。

SA01を構成するピット間の距離を、第5表にまとめた。左列では、長方形ピット間の距離を示した。これらの遺構間距離は、3.6～4.2mで、平均3.80m(標準偏差0.28284)である。SP02-SP03間距離が4.2mと、他の区間に比べて長い。中列では、円形ピット間の距離を示した。これらの遺構間距離は、3.4～3.6mで、平均約3.53m(標準偏差0.11547)である。この中列が、標準偏差が最小となり、遺構間距離が最も規格的といえる。右列では、隣り合う円形ピットと長方形ピットの遺構間距離を示した。これらの遺構間距離は、1.2～2.4mで、平均約1.67m(標準偏差0.58523)である。この右列が、標準偏差が最大で、遺構間距離のばらつきが大きいといえる。SA01を構成するピットを柱穴として、この柱穴列が何らかの直線的な構造物を構成すると仮定すると、柱間距離・遺構の掘り方などは規格外があったほうが構造的に安定するはずである。そこで、第5表での検討から、左列・中列のピット間距離の標準偏差が小さいため、SA01は長方形ピットのみを組み合わせ、円形ピットのみを組み合わせた2時期があったことが想定できる。しかし、ピットの切り合いがないことから前後関係は不明である。

第5表 SA01のピット間距離

区間	距離 (m)	区間	距離 (m)	区間	距離 (m)
SP01-SP02	3.6	SP22-SP14	3.6	SP22-SP01	1.2
SP02-SP03	4.2	SP14-SP10	3.6	SP13-SP20	1.2
SP03-SP04	3.8	SP10-SP12	3.4	SP10-SP03	1.9
SP04-SP05	推定 3.6	平均	3.5333	SP12-SP04	2.4
平均	3.80	標準偏差	0.11547	平均	1.675
標準偏差	0.28284			標準偏差	0.58523

覆土 SP01の遺構深度は約0.5mで、覆土は合計8層を確認できた。このうち第2層が柱痕跡を示すと認めた。覆土の観察により、当初のピットの掘り方は一辺約0.7×0.7mの隅丸正方形であったが、遺構廃絶時に柱抜取を行い、その際に当初の掘り方の北側に柱抜取穴が掘られたことを確認した。SP01第7・8層は柱抜取穴の覆土である。

SP02の遺構深度は約0.4mで、覆土は合計4層であった。SP02では明確に柱痕跡が残っていたわ

けではないが、遺構の掘り方及び柱抜取については SP01 と同様で、当初は約 0.7 × 0.7m の掘り方で柱を設置し、柱抜取の際に当初の掘り方の北側に柱抜取穴を掘削したとの所見を得た。SP02 第2層は、柱抜取穴の覆土である。

SP03 の遺構深度は約 0.2m で、覆土は合計 4 層を確認した。SP03 も柱痕跡が明確に残存しているわけではないが、SP01・02 と同様に、当初約 0.7 × 0.7m 程度の掘り方で柱穴を掘削したのち、柱抜取の際に柱抜取穴を掘削し、柱抜取後に埋め戻した可能性が高い。

SP04 の遺構深度は約 0.2m で、覆土は合計 4 層を確認した SP03 と同様に、明確に柱痕跡が残存しているわけではないが、当初の掘り方に加えて、柱抜取の際に柱抜取穴が掘られた可能性が高い。

SP05 は、調査区南東隅の東壁で確認したピットである。基本層序の第 5 層上面で検出できる遺構であることが層位的に確認できた。残存している遺構深度は約 0.3m で、覆土は合計 5 層を確認した。SP01 ～ 04 と比較して全容が不明なため、柱痕跡・柱抜取穴については不明である。

SP22 は、深度約 0.2m の円形のピットである。覆土は単層で、褐色粘土に褐色土ブロックを含む。

SP14 は、深度約 0.1m の楕円形ピットである。覆土は合計 2 層で、いずれも炭化物を包含する。

SP10 は、深度約 0.2m の円形のピットである。覆土は合計 4 層を確認し、中心付近に柱痕跡の可能性のある覆土が堆積している。

SP12 は、深度約 0.1m の円形のピットである。覆土は合計 2 層を確認した。

**重複関係** SP01 が、SP18 を切る。SP02 が、SP20 を切る。SP18・20 は、いずれも掘立柱建物跡 SB01 のピットであるため、SA01 が SB01 より新しいことがわかる。また、SP14 が、SP13 に切られる。SP13 は、掘立柱建物跡 SB02 のピットであるため、SA01 が SB02 より古いことがわかる。

**時期** 古墳時代後期と考えられる土師器小破片が、複数のピットから出土している。

**所見** SA01 は、同一軸線上に設けられた 2 時期にわたる柱穴列の可能性が高い。その軸線は、ほぼ真北を指し、A 区の南北に延びている。SA01 を構成するピットは、長方形の深いピットと円形の浅いピットの 2 種類に大別でき、このうち長方形ピットのうち SP01 では、柱痕跡及び柱抜取穴を明確に観察できた。このことから、SA01 を構成するピットは柱穴であり、SA01 は柱穴列であると判断した。

### 3 掘立柱建物跡

#### (1) SB01 (第 20 図)

**検出層位** A 区第 5 層上面 (A 区北壁にて、SP17 を基本層序第 5 層上面で検出 (第 7 図))

**位置** C8・C9・C10・D7・D8・D9・D10・E7・E8・E9・E10 グリッド

**平面形・規模** A 区内北東隅に位置し、SP06・07・08・17・18・20・28 で構成され、南北軸は N40° E を測る。なお、SP06 は古殿屋敷第 1 次発掘調査の際に検出し、当時 P1 と付番したピットそのものである。A 区内では 2 × 2 間の柱穴が所在し、調査区外の北東方向に延びているため、平面形の全容及び梁間・桁行方向は確認できていない。A 区内では、SP28・06 の遺構中心間距離が約 3.8 m、

SP28・17の遺構中心間距離が約4.2mの規模である。各ピットの平面形は、直径約0.6～0.8mで円形を呈する。

**覆土** 確認できた遺構深度は約0.15～0.3mで、基本的にレンズ状の堆積である。ただし、SP17では覆土第3層が柱痕跡を示す可能性がある。

**重複関係** SP28が、土壙ST01に切られるため、SB01はST01より古い。また、SP18がSP01に切れ、SP20がSP02に切られる。SP01・02はいずれも柱穴列SA01のピットであるため、SB01はSA01より古いことがわかる。

**時期** 古墳時代後期と考えられる土師器小破片が、複数のピットから出土している。

**所見** SB01は、今回の発掘調査で確認できた遺構のうち、切り合い関係からは最も古いといえる。また、SB01を構成するピットは古墳時代後期の土師器小破片を包含するため、この時代以降に構築されたと推定できる。各ピットは、直径約0.6～0.8mで、残存している深度は最大で約0.3mである。遺構自体は、A区外に広がっているため全形は不明である。

## (2) SB02 (第21図)

**検出層位** A区第5層上面 (A区北壁にて、SP31を基本層序第5層上面で検出 (第7図))

**位置** C7・C8・C9・D7・D8グリッド

**平面形・規模** A区内北西隅に位置し、SP13・15・16・26・27・31で構成され、南北軸はN20°Eを測る。規模は、梁間1間、桁行2間以上で、梁間となるSP26・13間の距離は3.4m、桁行となるSP26・31間の距離は2.3mである。なお、柱間の距離は、SP26・27が1.1m、SP27・31が1.2m、SP13・15が2.7mで、東辺は距離が長い。各ピットの平面形は、直径約0.4～0.7mで円形を呈する。

**覆土** 確認できた遺構深度は、約0.1～0.25mで、覆土の堆積状況は一様ではない。層相及び層序から、人為的に埋め戻されたと判断できる。

**重複関係** SP13が、SP14を切る。SP14は柱穴列SA01のピットであるため、SB02はSA01より新しいことがわかる。切り合い関係から、SA01はSB01より新しいことがわかっているため、遺構の前後関係としては、古い順にSB01→SA01→SB02の順となる。また、SP31がSP32を切っている。

**時期** 古墳時代後期と考えられる土師器小破片が、複数のピットから出土している。

**所見** SB02を構成するピットは、古墳時代後期の土師器小破片を包含するため、この時代以降に構築されたと考えられる。各ピットは、直径約0.4～0.7mで、残存している深度は最大約0.25mである。遺構自体は、A区外に広がっているため全形は不明である。

## 4 B1～3区

### (1) B1区 (第22図)

B1区では、SP36・37・38の3基のピットを検出した。3基とも、基本層序第8層上面で検出できた。SP36・37は、B1区東壁にかかっており、調査区外に広がる。東壁断面での土層観察から、SP36は、南北0.46m、深さ0.38mを測り、柱痕跡のような覆土の堆積状況である。SP38は、南北は調査区内で0.84m、東西0.80m、深さ0.68mを測り、B1区では最も規模の大きいピットである。平面形は、楕円形を呈する。覆土中には、大きさ約0.3×0.3mの平坦な礫1点を包含していた。

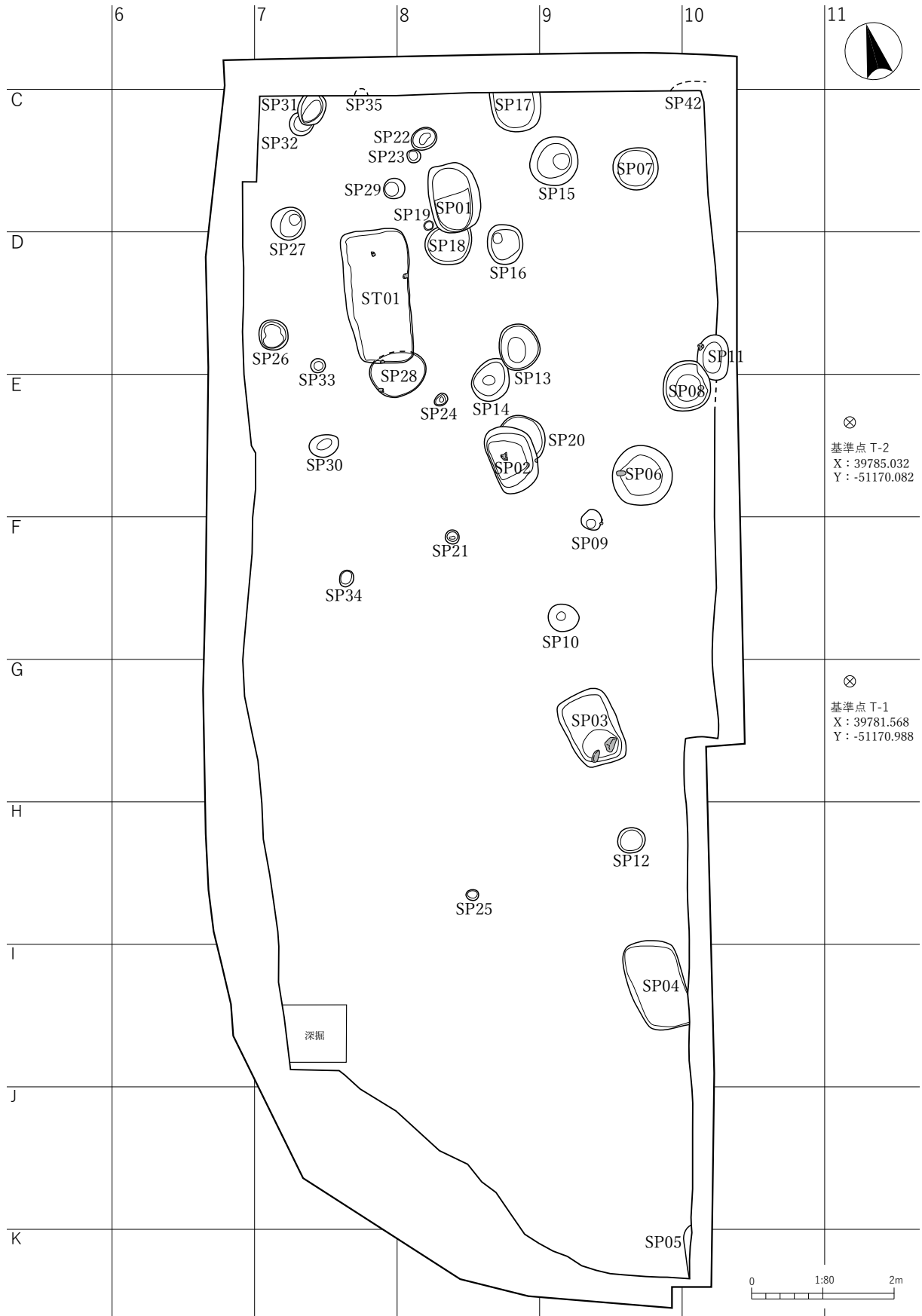
### (2) B2区 (第23図)

B2区は、北東側が大きく攪乱されていたが、土壌が良好に残存していた調査区北西隅でSP39を検出した。検出面は、基本層序第8層上面である。SP39は、調査区外に広がる。調査区内では、南北0.60m、東西0.48mを測り、深さは0.52mであった。SP39は、その位置や平面形及び規模、深さなどからSP38と関連のある柱穴である可能性が高いと現場では判断したが、調査区が断絶しているため全容は不明である。なお、SP39とSP38の推定中心間距離は、約2mである。

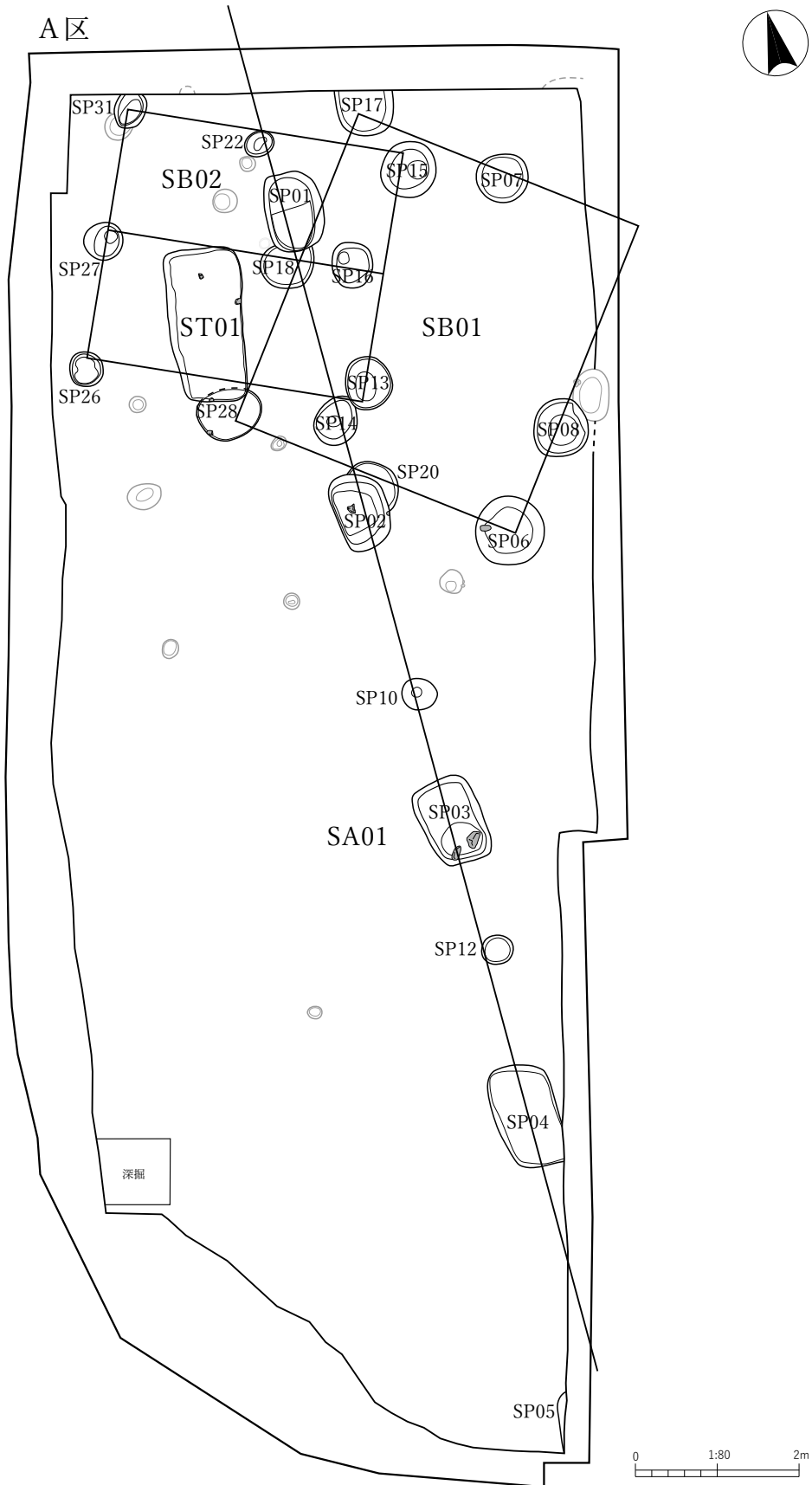
### (3) B3区 (第24図)

B3区は、B1・2区と比較して遺構検出が困難であったため、調査区外周に沿って逆「コ」字状にトレンチを設定し、外周断面の土壌堆積状況を確認しながら遺構検出を試みた。この結果、SP40・41を検出できた。SP40は、調査区南壁にかかり基本層序第7層上面で検出したピットで、直径0.44m、深さ0.34mを測る。SP41も、調査区北西隅で北壁にかかり基本層序第7層上面で検出したピットで、直径0.56m、深さ0.38mを測る。また、B3区ではこれらのピット以外に、北東隅の南北約0.8m、東西約0.6mの範囲が緩い落ち込みとなっていた。調査面積が狭小でこの落ち込み全体を精査することができなかったため、遺構であるか、地形の起伏であるかの判断はできなかった。

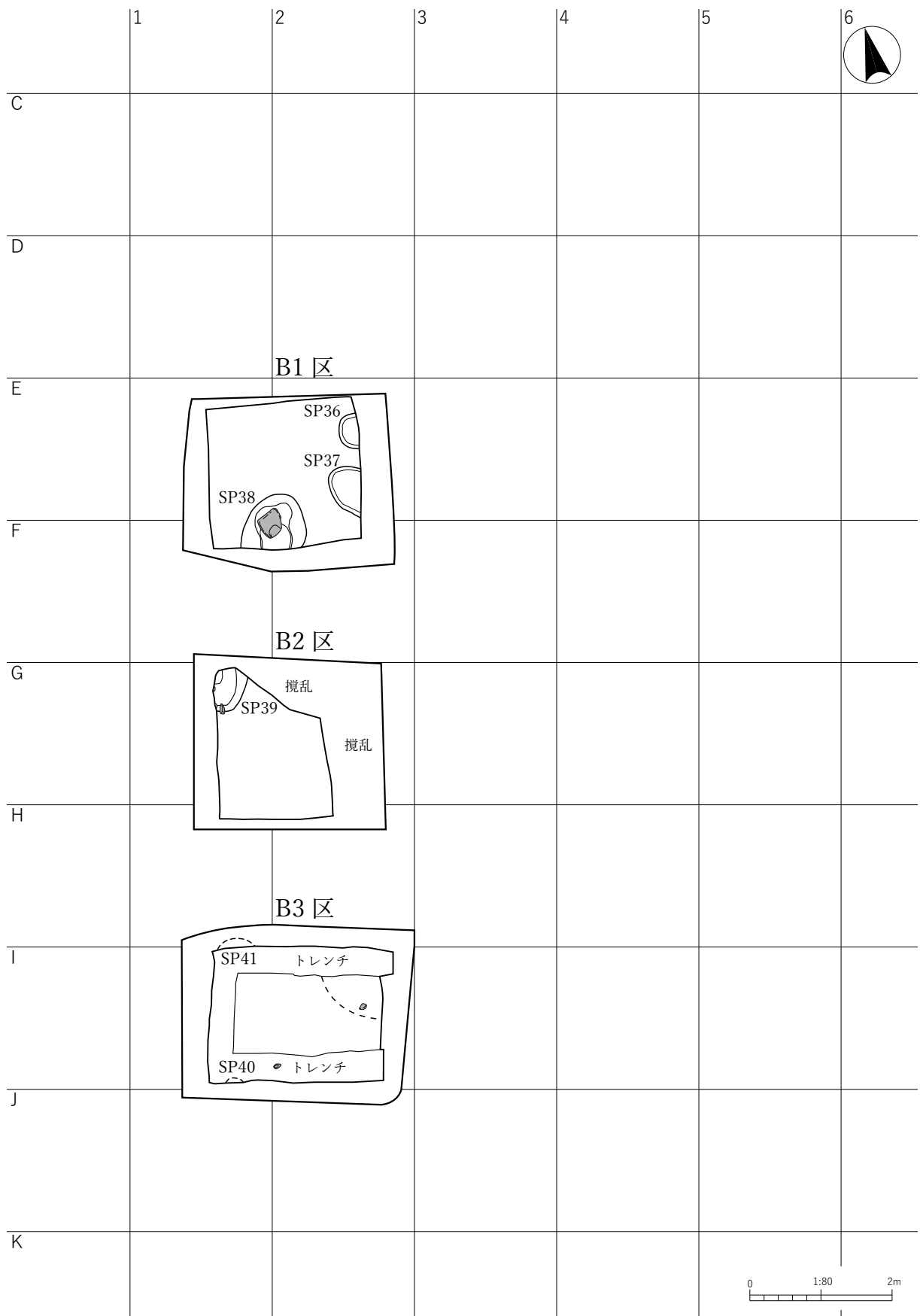
また、B3区からは、櫛描波状文を施した弥生土器甕の体部破片や、土師器甕の底部破片が出土したため、第6章に掲載した。



第9図 A区全体図

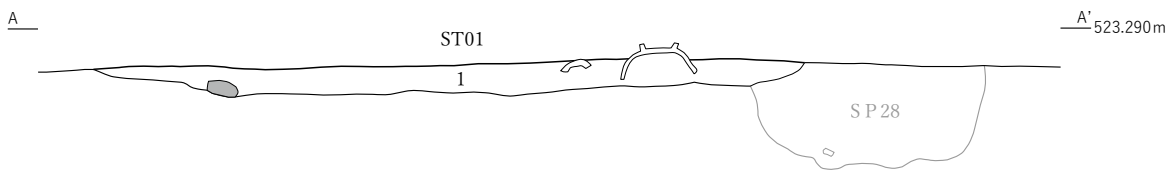
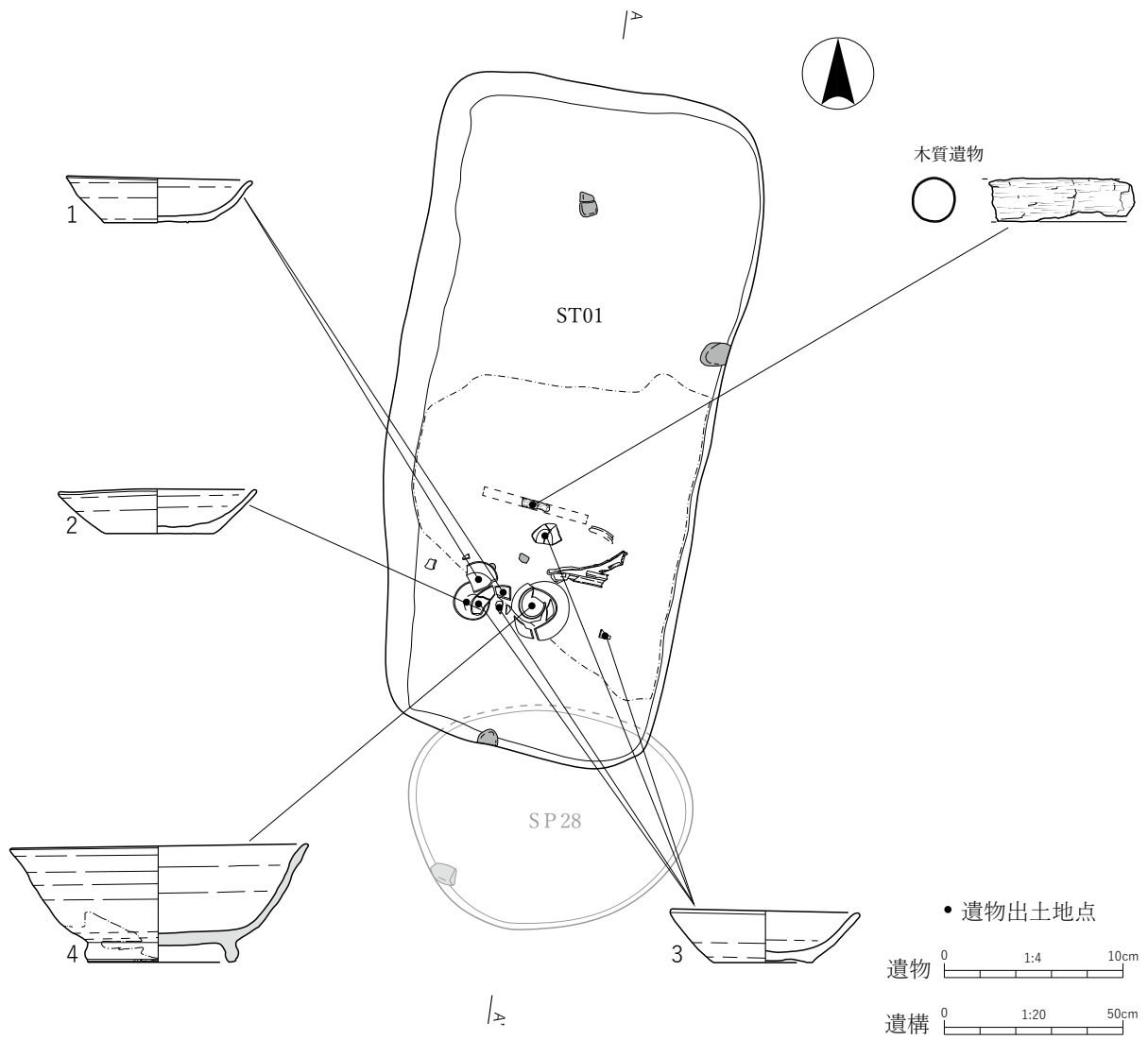


第10図 A区遺構配置図

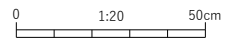


第11図 B1～3区全体図

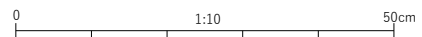
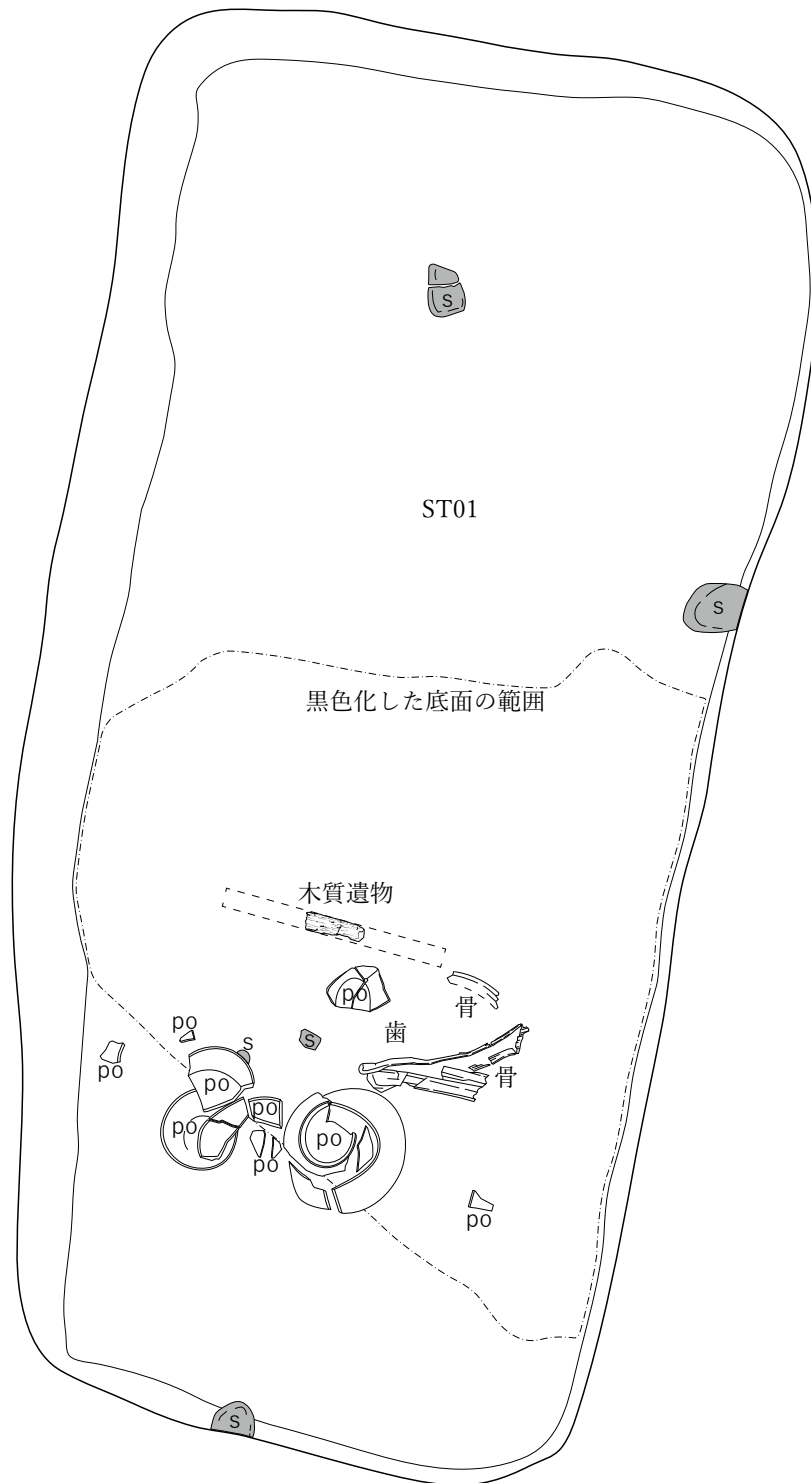




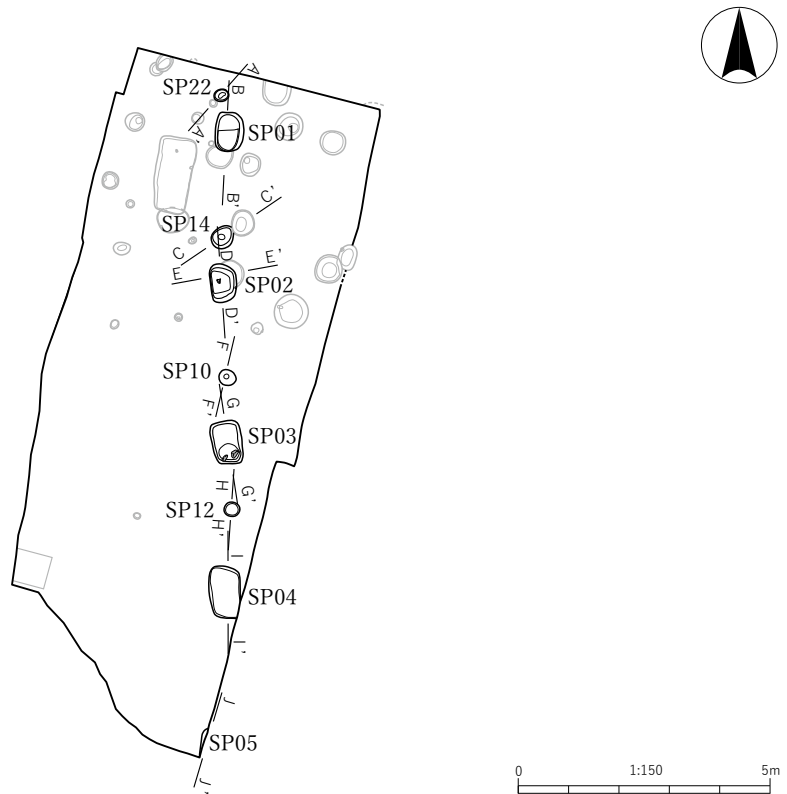
ST01  
 1,10YR3/3 暗褐色粘土  
 しまり中、粘性強  
 褐色シルトブロック、褐色粘土ブロックを少量含む  
 炭化物を含む



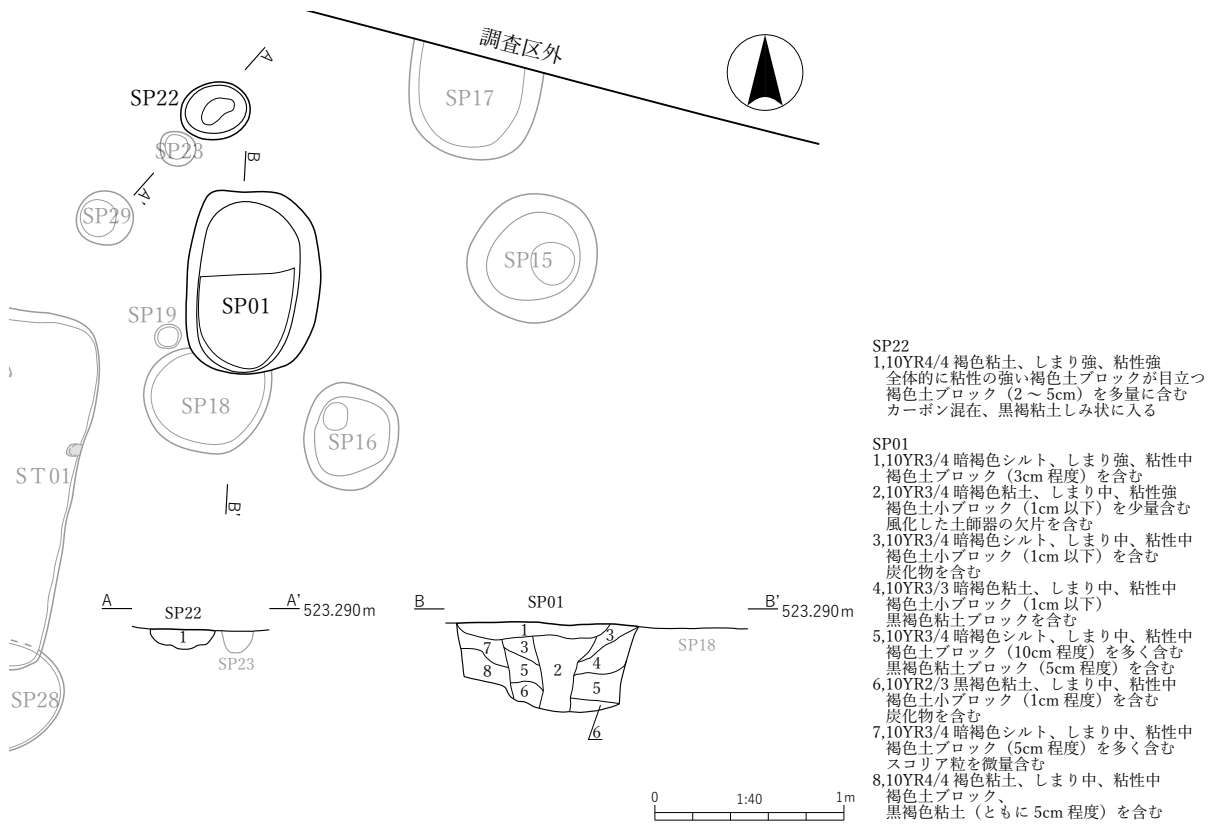
第12図 ST01



第13図 ST01 遺物出土状況

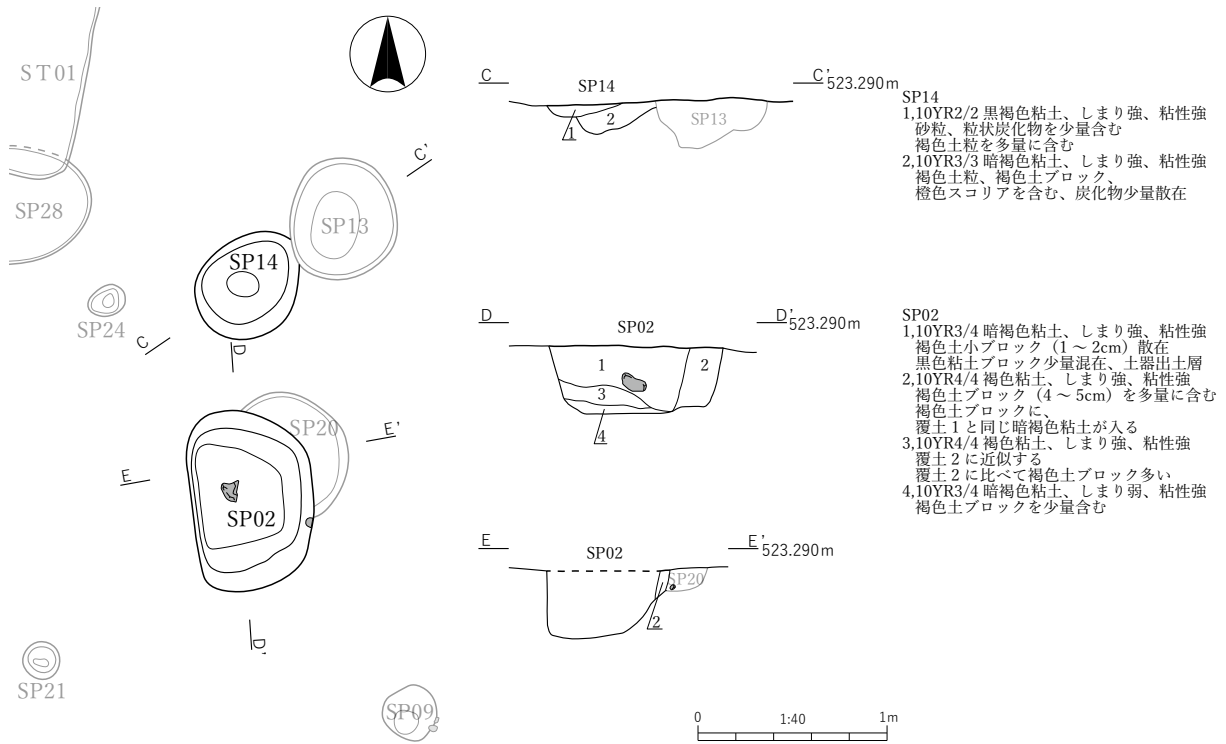


第14図 SA01

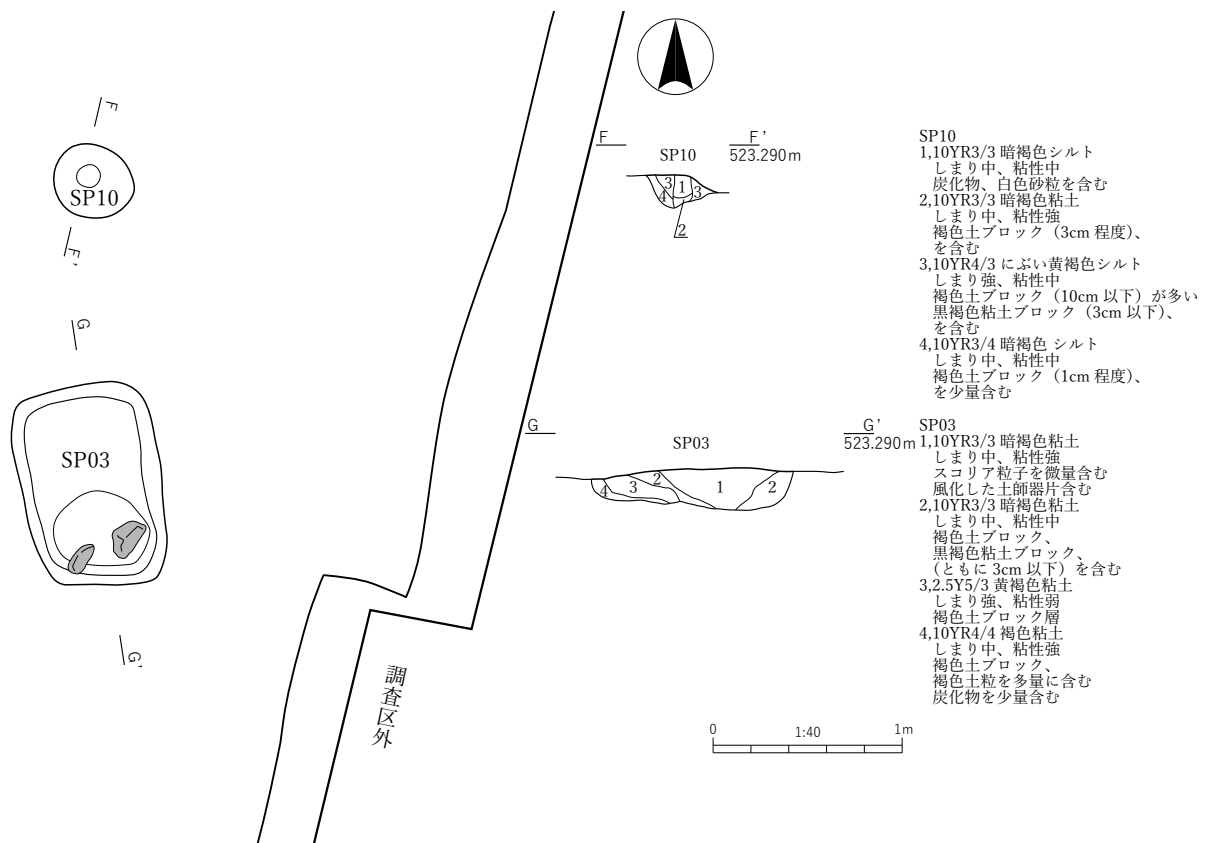


第15図 SA01 (SP22・01)

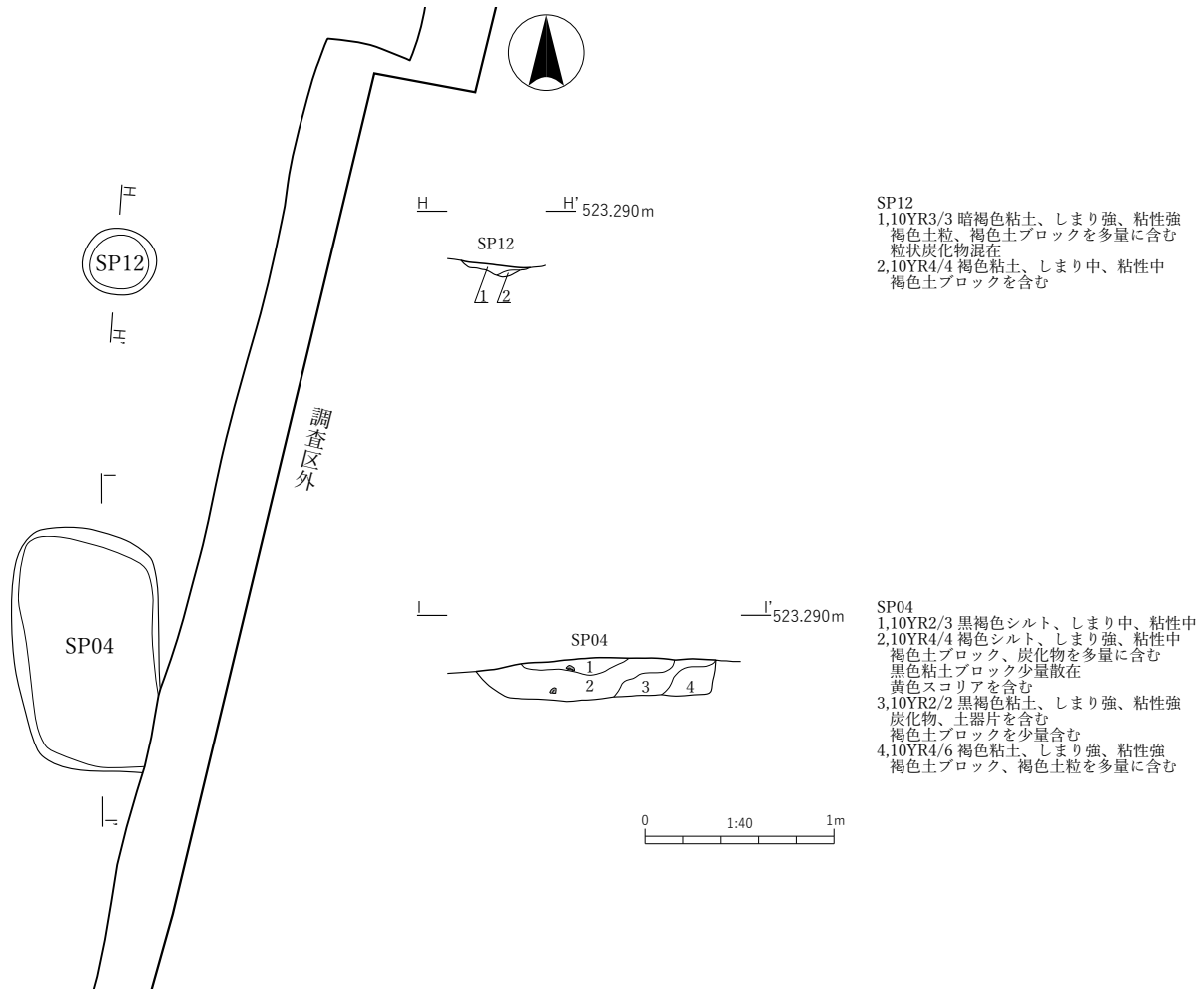
- SP22  
 1.10YR4/4 褐色粘土、しまり強、粘性強  
 全体的に粘性の強い褐色土ブロックが目立つ  
 褐色土ブロック (2~5cm) を多量に含む  
 カーボン混在、黒褐色粘土しみ状に入る
- SP01  
 1.10YR3/4 暗褐色シルト、しまり強、粘性中  
 褐色土ブロック (3cm 程度) を含む  
 2.10YR3/4 暗褐色粘土、しまり中、粘性強  
 褐色土小ブロック (1cm 以下) を少量含む  
 風化した土師器の欠片を含む  
 3.10YR3/4 暗褐色シルト、しまり中、粘性中  
 褐色土小ブロック (1cm 以下) を含む  
 炭化物を含む  
 4.10YR3/3 暗褐色粘土、しまり中、粘性中  
 褐色土小ブロック (1cm 以下)  
 黒褐色粘土ブロックを含む  
 5.10YR3/4 暗褐色シルト、しまり中、粘性中  
 褐色土ブロック (10cm 程度) を多く含む  
 黒褐色粘土ブロック (5cm 程度) を含む  
 6.10YR2/3 黒褐色粘土、しまり中、粘性中  
 褐色土小ブロック (1cm 程度) を含む  
 炭化物を含む  
 7.10YR3/4 暗褐色シルト、しまり中、粘性中  
 褐色土ブロック (5cm 程度) を多く含む  
 スコリア粒を微量含む  
 8.10YR4/4 褐色粘土、しまり中、粘性中  
 褐色土ブロック、  
 黒褐色粘土 (ともに 5cm 程度) を含む



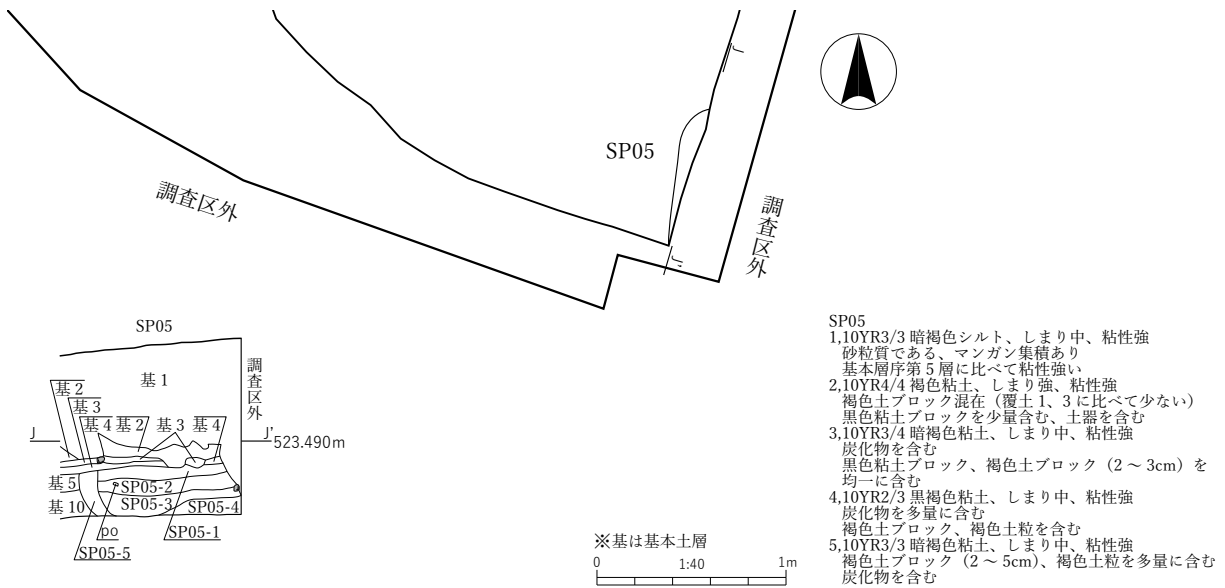
第16図 SA01 (SP14・02)



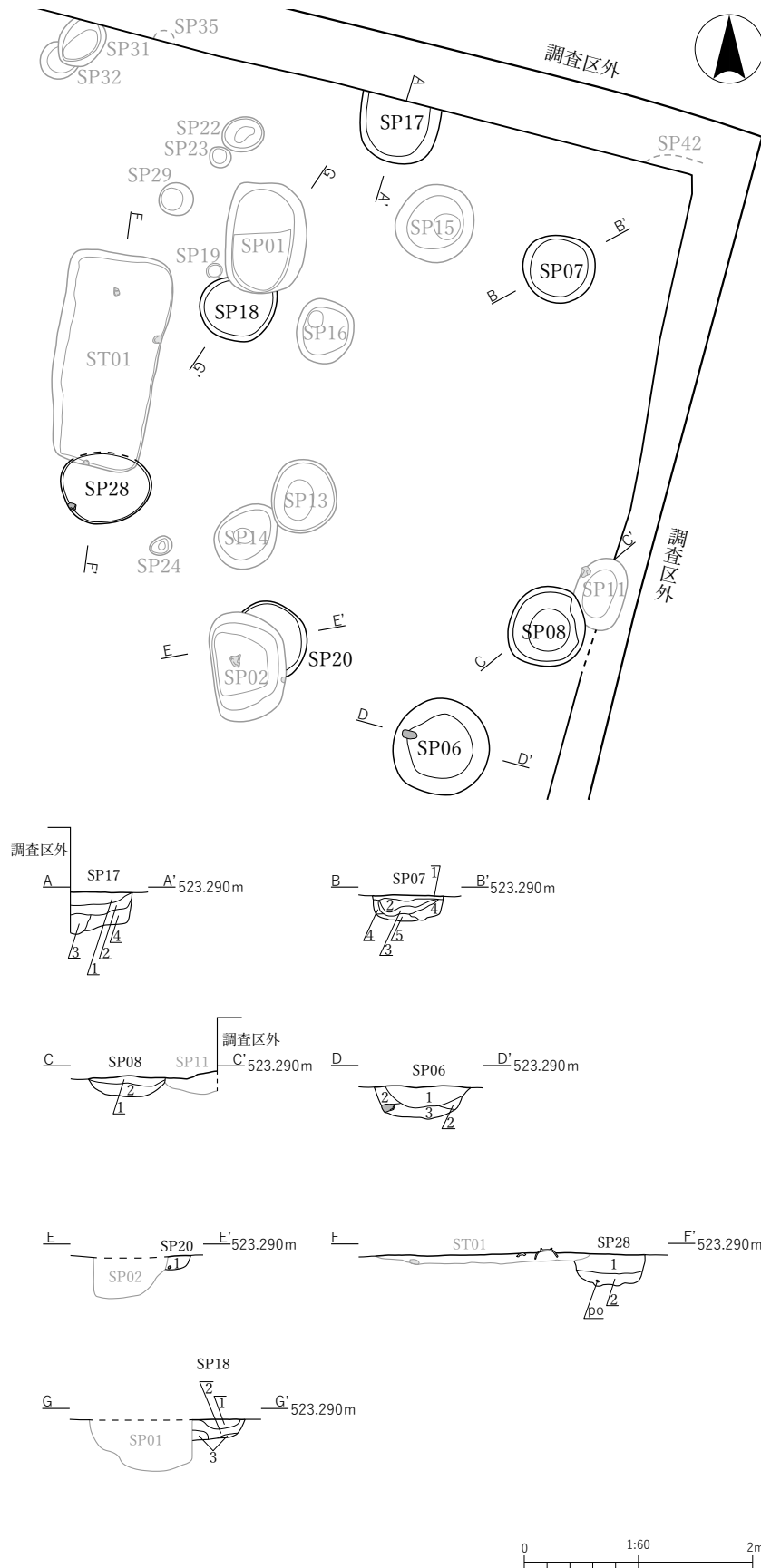
第17図 SA01(SP10・03)



第18図 SA01 (SP12・04)



第19図 SA01 (SP05)



SB01  
SP17  
1.10YR2/3 黒褐色シルト、しまり中、粘性中スコリア粒、炭化物を微量含む  
2.10YR3/3 暗褐色シルト、しまり中、粘性中褐色土ブロック(4cm程度)を含む  
3.10YR2/3 黒褐色粘土、しまり中、粘性強円礫(3cm程度)を微量含む  
褐色粘土粒子を少量含む  
4.10YR3/3 暗褐色シルト、しまり中、粘性中褐色土ブロック(1cm以下)を含む  
微量のスコリア粒子を含む

SP07  
1.10YR3/1 黒褐色シルト、しまり強、粘性強砂粒を多量に含む  
赤褐色スコリア、粒状炭化物を含む  
2.10YR3/4 暗褐色シルト、しまり強、粘性強砂粒を多量に含む(覆土1に比べて少ない)  
褐色土粒を少量含むが、褐色土ブロック、シルトブロックは含まない  
3.10YR3/4 暗褐色粘土、しまり強、粘性強砂粒を少量含む  
褐色土粒、褐色土小ブロック(5mm程度)、を含む  
4.10YR3/4 暗褐色粘土、しまり強、粘性強褐色土ブロック、褐色土粒を含む  
粒状炭化物混在  
5.10YR2/2 黒褐色粘土、しまり中、粘性強褐色土粒を少量含む、粒状炭化物散在

SP08  
1.10YR3/2 黒褐色粘土、しまり中、粘性強砂粒を含む  
褐色土粒、炭化物混在  
2.10YR4/4 褐色粘土、しまり中、粘性強褐色土ブロック(0.5~3cm)を多量に含む  
橙色スコリアを含む

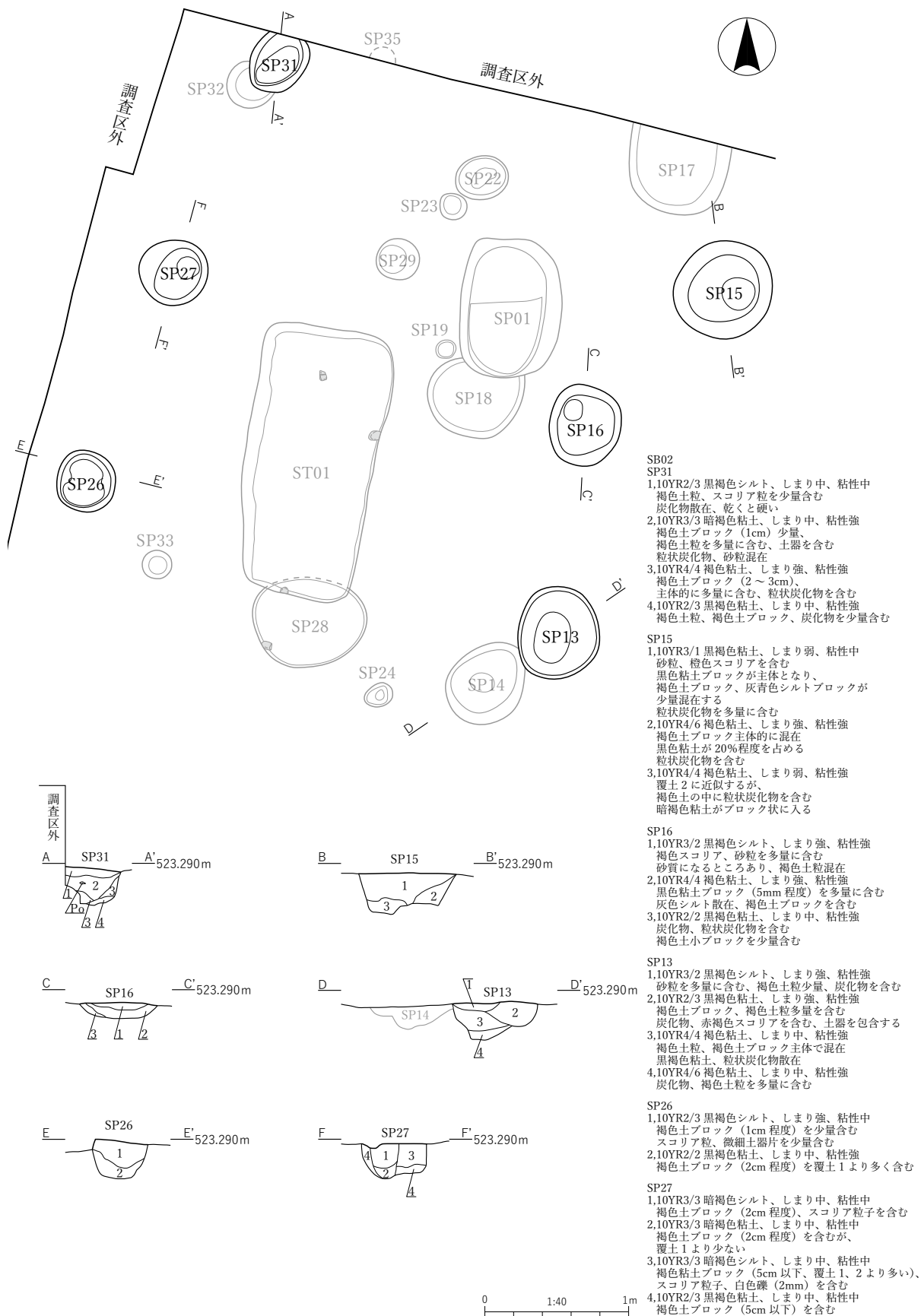
SP06  
1.10YR2/3 黒褐色シルト、しまり強、粘性強褐色土粒多量  
黒色粘土小ブロック、赤褐色スコリアを含む  
2.10YR2/2 黒褐色粘土、しまり中、粘性強褐色土小ブロックを含む  
3.10YR3/4 暗褐色粘土、しまり弱、粘性強褐色土ブロックを多量に含む  
褐色土小ブロック  
炭化物(5mm程度もあり)を含む

SP20  
1.10YR3/3 暗褐色粘土、しまり強、粘性強褐色土小ブロック(5mm以下)を少量含む  
砂粒均一に散在、炭化物を含む

SP28  
1.10YR2/2 黒褐色粘土、しまり中、粘性強褐色土粒、褐色土ブロック少量  
橙色スコリアを含む  
炭化物散在、砂粒が上部に散在  
2.10YR3/4 暗褐色粘土、しまり強、粘性強褐色土ブロック(1cm前後)を少量含む  
粘性は覆土1より強い

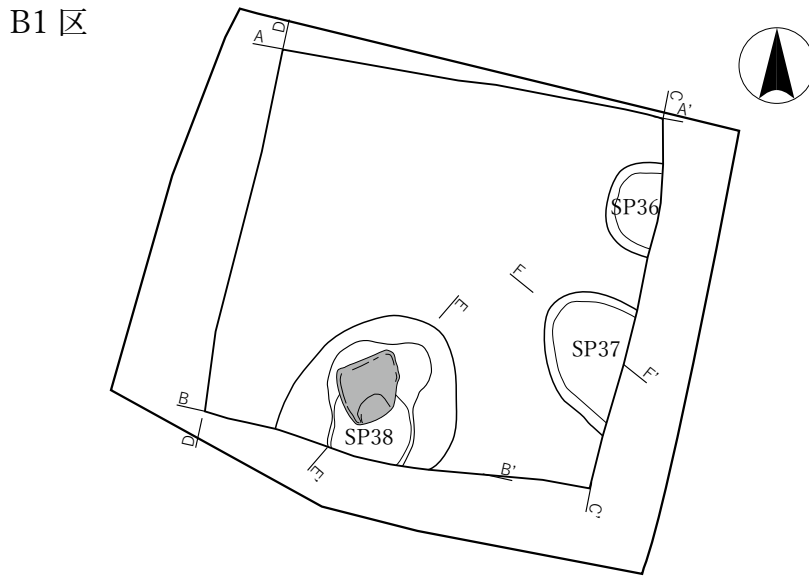
SP18  
1.10YR3/2 黒褐色シルト、しまり強、粘性中褐色土粒、褐色土ブロック(5mm以下)、少量を含む  
砂粒多く褐色スコリアを含む  
2.10YR2/2 黒褐色粘土、しまり強、粘性強褐色土ブロック(約1cm)20%  
褐色土粒を多量に含む、炭化物混在  
3.10YR4/3 に近い黄褐色粘土、しまり中、粘性強褐色土ブロック主体の層

第20図 SB01

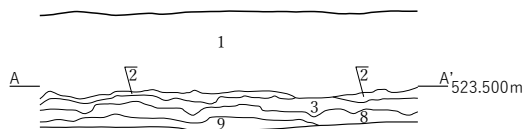


第21図 SB02

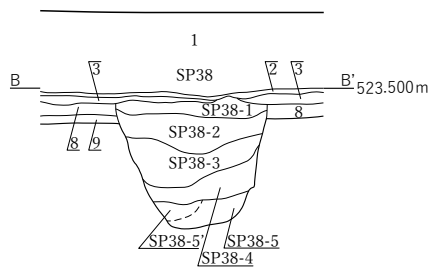
B1区



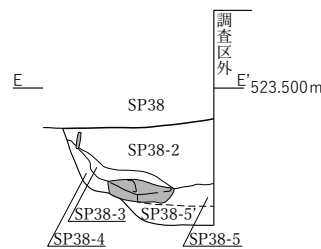
北壁



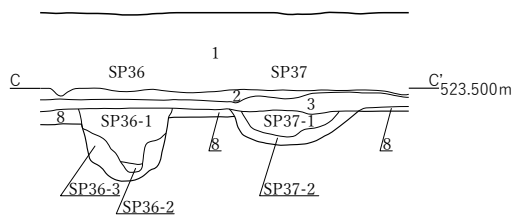
南壁



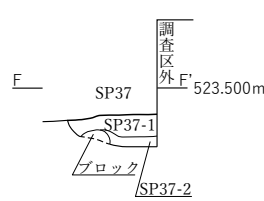
SP38



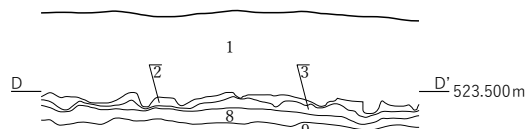
東壁



SP37



西壁



- 1, 造成土
- 2, 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
しまり強、粘性中  
少量の酸化鉄を含む、旧耕作土
- 3, 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
しまり強、粘性中  
径2cm以下の亜円礫を少量含む  
酸化鉄を多く含む、下部では濃集する  
旧耕作土
- 8, 10YR3/3 暗褐色シルト  
しまり強、粘性中  
第3・5層より若干粗粒  
微量の酸化鉄、褐色スコリアを含む  
上部に暗褐色の粒子を多く含む
- 9, 10YR3/3 暗褐色シルト  
しまり強、粘性中  
褐色スコリア、微量の炭化物を含む

SP36

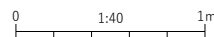
- 1, 10YR3/4 暗褐色シルト  
しまり中、粘性中  
褐色土ブロック (3cm以下)  
褐色スコリア粒 (1cm以下) を少量含む
- 2, 10YR3/3 暗褐色粘土  
しまり中、粘性強  
褐色土ブロック (1cm以下) を含む
- 3, 10YR3/3 暗褐色シルト  
しまり中、粘性中  
褐色土ブロック (3cm以下) を多く含む

SP37

- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト  
しまり中、粘性中  
褐色土粒、橙色スコリアを含む  
粒状炭化物を少量含む、マンガン集積あり
- 2, 10YR4/4 褐色粘土  
しまり強、粘性強  
褐色土粒、基本土層第10層のブロック混在  
粒状炭化物を少量含む

SP38

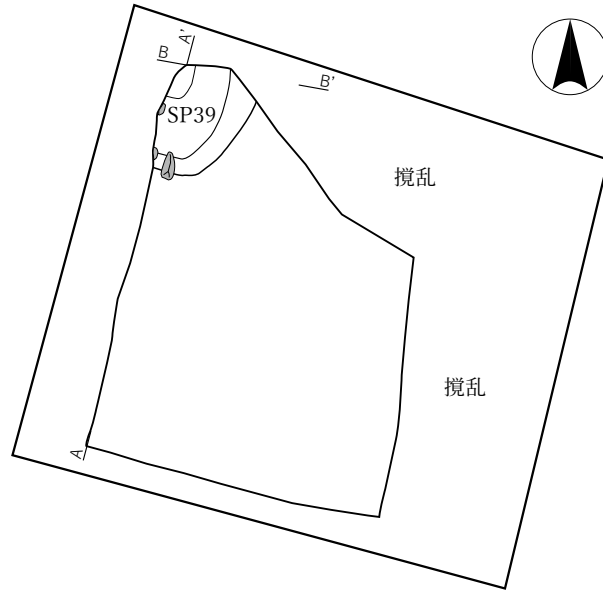
- 1, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト  
しまり中、粘性強  
上層水田耕土のマンガンの集積あり  
褐色土粒、橙褐色スコリアを少量含む  
炭化物混在
- 2, 10YR3/2 黒褐色シルト  
しまり強、粘性強  
褐色土ブロック (2~5cm)、  
10~20%を含む  
橙褐色スコリア、炭化物を多量に含む  
褐色土粒均一に混在
- 3, 10YR3/3 暗褐色シルト  
しまり中、粘性強  
褐色土ブロック (5~10cm)、  
10%以下を含む  
炭化物、褐色土粒を含む
- 4, 10YR3/4 暗褐色粘土  
しまり強、粘性中  
褐色土ブロック (2~5cm)、  
60~80%主体となる  
粒状炭化物混在
- 5, 10YR4/4 褐色粘土  
しまり強、粘性強  
褐色土ブロック (約5cm) 20~30%  
覆土4より少ない
- 5', 10YR4/4 褐色粘土  
しまり強、粘性強  
覆土5と近似するがしまりが更に強い  
炭化物ブロックあり



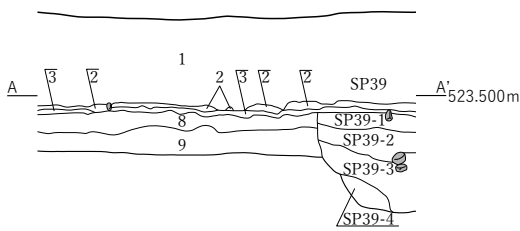
第22図 B1区



B2区

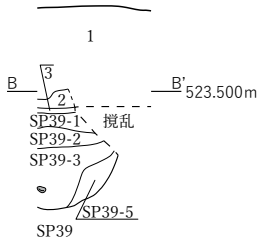


西壁

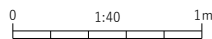


- 1, 造成土
- 2, 10YR4/2 灰黄褐色シルト、しまり強、粘性中  
少量の酸化鉄を含む、旧耕作土
- 3, 10YR4/2 灰黄褐色シルト、しまり強、粘性中  
径 2cm 以下の亜円礫を少量含む  
酸化鉄を多く含み、下部では濃集する  
旧耕作土
- 8, 10YR3/3 暗褐色シルト、しまり強、粘性中  
第 3・5 層より若干粗粒  
微量の酸化鉄、褐色スコリアを含む  
上部に暗褐色の粒子を多く含む
- 9, 10YR3/3 暗褐色シルト、しまり強、粘性中  
褐色スコリア、微量の炭化物を含む

SP39

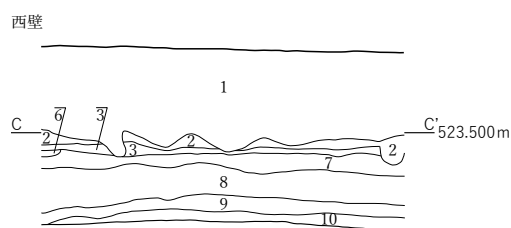
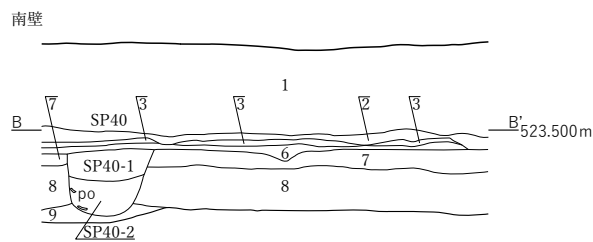
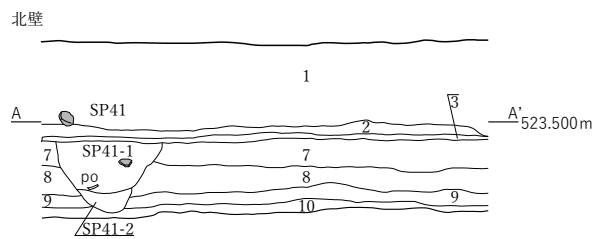
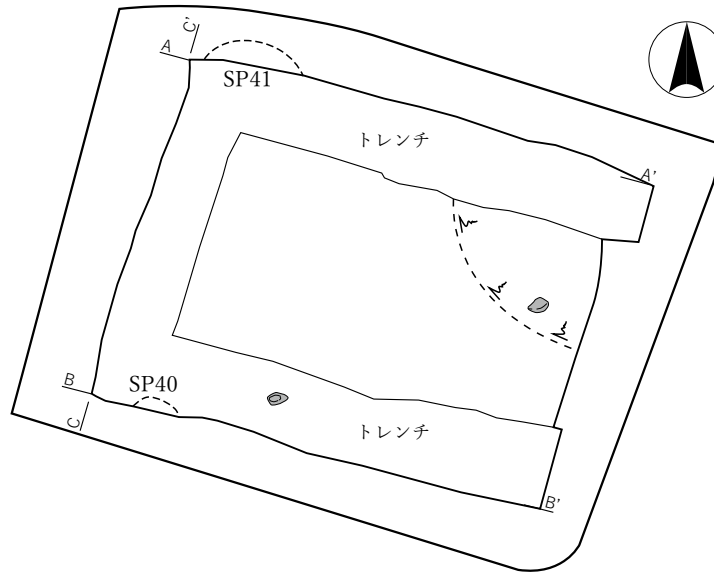


- SP39
- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト、しまり強、粘性中  
酸化鉄を多く含む  
褐色土ブロック (2cm 程度)、  
褐色スコリア粒子少量 (10% 以下)、  
炭化物を含む
  - 2, 10YR3/3 暗褐色シルト、しまり強、粘性中  
褐色スコリア粒子 (1cm 程度)、  
褐色土ブロックを少量 (10% 以下) 含む
  - 3, 10YR3/4 暗褐色粘土、しまり中、粘性強  
褐色土粒、粒状炭化物を多量に含む  
褐色土ブロック (2~4cm) 20~30% 程度、  
を含む、橙褐色スコリアを含む
  - 4, 10YR3/3 暗褐色粘土、しまり強、粘性強  
褐色土粒散在  
褐色土ブロック (2~3cm 大) 10% 程度、  
を含む、粒状炭化物を含む
  - 5, 10YR4/4 褐色粘土、しまり強、粘性強  
褐色土粒、粒状炭化物を多量に含む  
褐色土ブロック (3~4cm) 60~70% 混在  
灰褐色シルトブロック混在、柱構築時の埋土



第23図 B2区

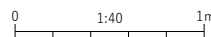
B3区



- 1, 造成土
- 2, 10YR4/2 灰黄褐色シルト、しまり強、粘性中  
少量の酸化鉄を含む、旧耕作土
- 3, 10YR4/2 灰黄褐色シルト、しまり強、粘性中  
径2cm以下の亜円礫を少量含む  
酸化鉄を多く含み、下部では濃集する  
旧耕作土
- 6, 10YR4/2 灰黄褐色粘土、しまり中、粘性中  
カーボン、1cm以下の円礫混入  
酸化鉄集積あり
- 7, 10YR2/2 黒褐色シルト、しまり強、粘性強  
遺物包含層（弥生～奈良の土器多量混入）  
褐色スコリア粒（1mm以下）を多量に含む  
カーボン粒、炭化物多量混入  
粘性、しまりは柱穴群の埋土と近似する
- 8, 10YR3/3 暗褐色シルト、しまり強、粘性中  
第3・5層より若干粗粒  
微量の酸化鉄、褐色スコリアを含む  
上部に暗褐色の粒子を多く含む
- 9, 10YR3/3 暗褐色シルト、しまり強、粘性中  
褐色スコリア、微量の炭化物を含む
- 10, 10YR4/4 褐色シルト、しまり強、粘性中  
褐色シルトのブロック、微量の炭化物を含む

- SP41
- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト、しまり強、粘性中  
橙褐色スコリア（1mm以下）、  
粒状炭化物を多量に含む、礫・土器を含む  
褐色土ブロック（最大3cm）を10%以下含む  
褐色スコリア粒（1cm以下）を少量含む
  - 2, 10YR2/3 黒褐色粘土、しまり強、粘性強  
褐色土ブロック（1cm以下）少量含む  
褐色スコリアを微量に含む

- SP40
- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト、しまり強、粘性中  
赤色スコリア粒（1mm以下）、  
粒状炭化物を含む
  - 2, 10YR2/3 黒褐色粘土、しまり強、粘性強  
褐色土ブロック（1cm以下）、  
褐色土粒を少量（10%以下）含む  
褐色のスコリア粒を微量含む、土器を含有



第24図 B3区

## 第6章 遺物

古殿屋敷第3次発掘調査では、土壙（ST01）やピットから、弥生時代後期～古墳時代後期、平安時代の遺物が出土し、本報告書では12点を資料化し掲載した。以下に、各資料について記載する。なお、土器・施釉陶器については、中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見（小平1990）によって、土師器、須恵器、灰釉陶器に大別した。さらに、土器・施釉陶器の種類は用途に応じて、食膳具、煮炊具、貯蔵具に分類し、器種を設定した。また、平成23年（2011）実施の、古殿屋敷第1次発掘調査での遺物を再実測し、再掲した。

### 1 A区

#### (1) ST01（第26図1～4）

ST01出土土器は、4点を資料化した。4点とも、ST01の南辺から約0.4m付近でまとまって出土した。ST01の1～3は、土師器坏である。1・2は正位で出土し、3は破片となっており本来の埋納状況は不明であるが、2の上に1・3が重なるような状況で検出できた。4は、1～3の東隣から逆位で出土した。

土師器坏A（1～3）の法量を見ると、母数は3と少ないが、口径の平均は10.7cm（標準偏差0.36055）、器高の平均は2.8cm（標準偏差0.17320）である。3点とも、底部は回転糸切りであった。

4は、灰釉陶器碗である。口縁部はやや弱く外反し、体部下半はやや張りだし気味で、底部付近はケズリ調整したことにより弱い稜を作出している。高台は、外面下半の稜が不明瞭である。灰釉は浸し掛けで、底部付近まで施釉している。これらの特徴から、4は虎溪山1号窯式に比定できると判断した。

灰釉陶器の虎溪山1号窯式は、松本盆地古代10～13期に出現する。また、土師器坏Aの口径・器高は、松本盆地古代11期、三間沢川左岸遺跡Ⅵ期（松本市教委2017）の特徴がみられる。このことから、ST01出土土器類の製作年代は、松本盆地古代11期に比定できるが、ST01が墓壙であるため、この年代がST01の被葬者の埋葬時期を直接的に示すかはわからない。

#### (2) ピット（第26図5～7）

5は、SP04出土の土師器甕の口縁部である。口縁部は、強く外反し端部は玉縁状になる。内外面とも横ナデを施す。6は、SP06出土の軟質須恵器坏Aの口縁～体部上半である。口径が16.0cmで、口縁部は肥厚する。7は、SP08出土の土師器甕底部である。推定底径は8.0cmで、内外面共に粗いナデが残るが、底面は残存状況が悪く調整が不明である。

## 2 B1・3区

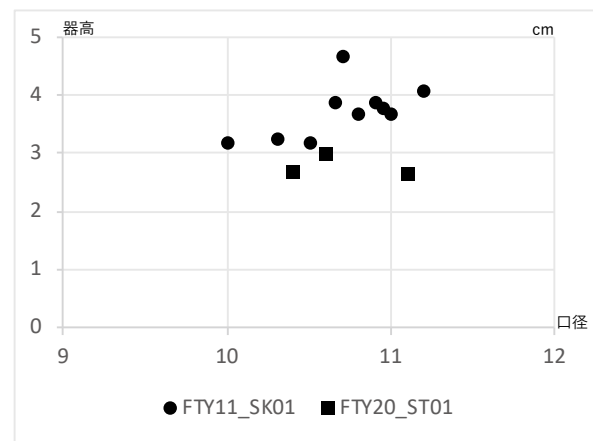
8は、B1区 SP38 出土の土師器甕である。口縁部は強く外反し、口頸部は横ナデを施す。体部上半は不明瞭なハケメ状の調整が残る。9～11は、B3区出土の弥生土器甕の体部上半小破片で、いずれも遺構外からの出土である。小破片のため、具体的な器形は不明である。12は、B3区出土の土師器甕底部である。体部下外面及び底面はナデ調整されている。

## 3 第1次発掘調査（再実測）

第27・28図には、古殿屋敷第1次発掘調査 SK01(以下、「FTY11\_SK01」とする。)出土遺物を再実測し、掲載した。また、この調査の報告書(安曇野市教委 2013、以下「前報告」とする。)に掲載できなかった金属製品を追加実測し掲載した(第28図17～19)。

1は、青銅製瑞花双鳥八稜鏡である。前報告の内容に変更はないが、今回遺物実測を行ったので実測図を掲載した。

2～16は土師器、緑釉陶器、灰釉陶器である。古殿屋敷第1次調査 SK01は、出土遺物から松本盆地古代10期に比定している(安曇野市教委 2013)。出土土器類の器種を比較すると、FTY11\_SK01の埴は緑釉陶器であり、土師器盤B・小型甕、灰釉陶器瓶類は、第3次調査 ST01(以下、「FTY20\_ST01」とする。)にはない。土師器坏Aは、第1次調査で10点出土しているため、第25図に第1次調査と第3次調査の土師器坏Aの口径・器高分布を掲載した。まず、口径をみると、FTY11\_



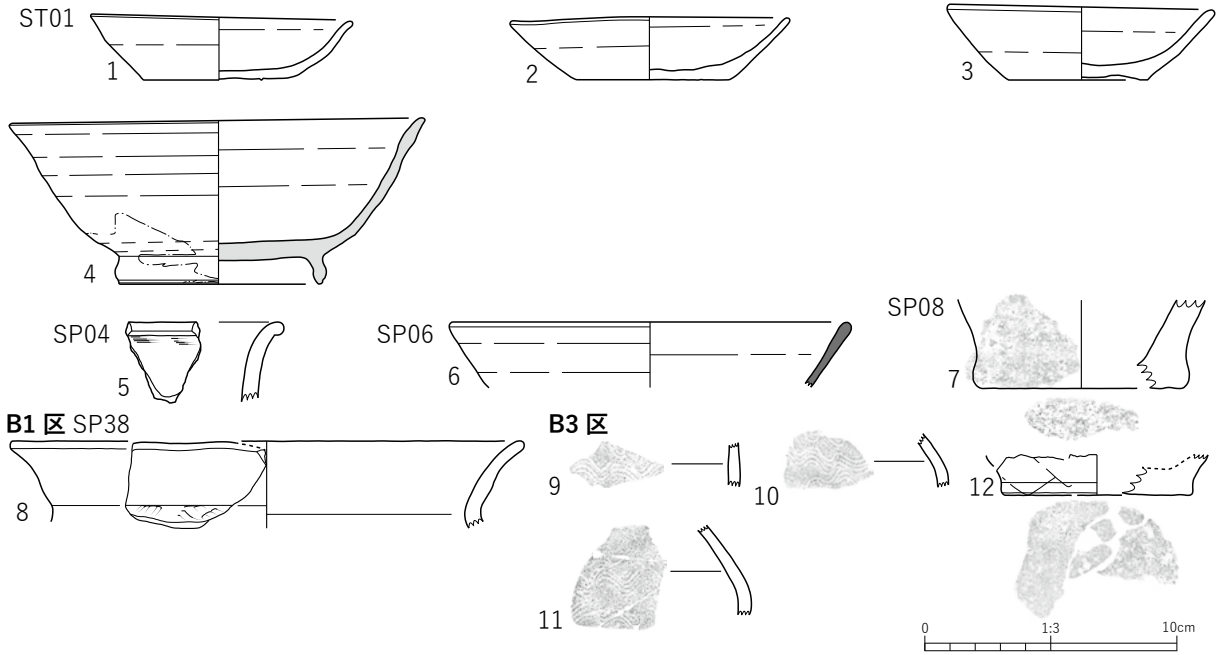
第25図 土師器坏Aの口径・器高分布

SK01では平均10.7cm(標準偏差0.35668)、FTY20\_ST01では平均10.7cm(標準偏差0.36055)となり、資料数の違いはあるが、ほぼ同じ大きさといえる。次に器高をみると、FTY11\_SK01では平均約3.74cm(標準偏差0.46335)、FTY20\_ST01では平均約2.78cm(標準偏差0.18929)となり、FTY20\_ST01が約1cm低い結果となった。当該期の土師器坏Aは時代が下るにつれて小型化する傾向があるため(小平1990、松本市教委2017)、土師器坏の製作年代を比較すると、FTY11\_SK01が古く、FTY20\_ST01が新しいといえる。なお、11～16についての報告内容は、前報告から変更はない。

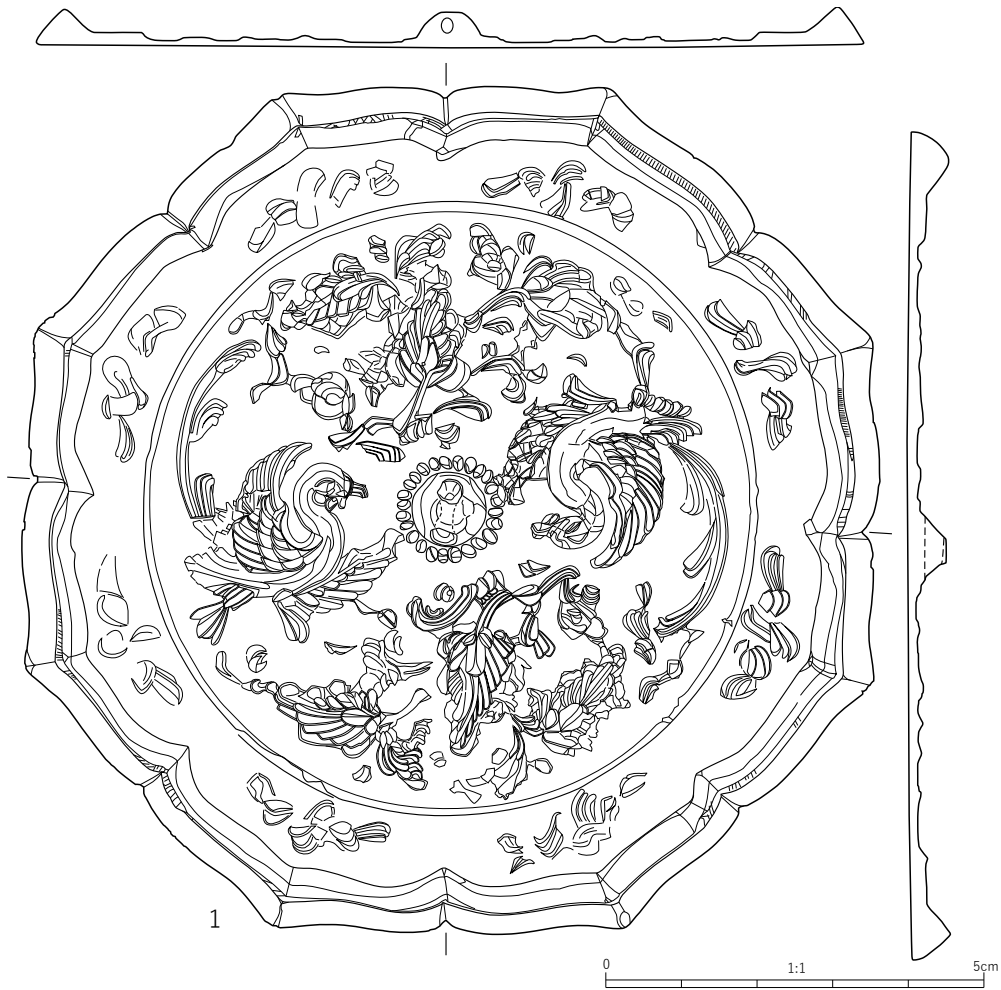
17～18は、鉄製の釘である。17は、基部を単純に曲げて頭部としたもので、釘身の断面は方形である。18も、17と同様に基部を曲げて頭部を作出したものと考えたが、頭部が欠損している。19は、板状の金属製品で、用途は不明である。STY11\_SK01は、平安時代の木棺墓であるため、木棺構築材の接合方法の解明が重要である。本遺構から、釘が出土したことで、木棺の構築材が釘留めであったことが確実にされた。

第6章 遺物

A区



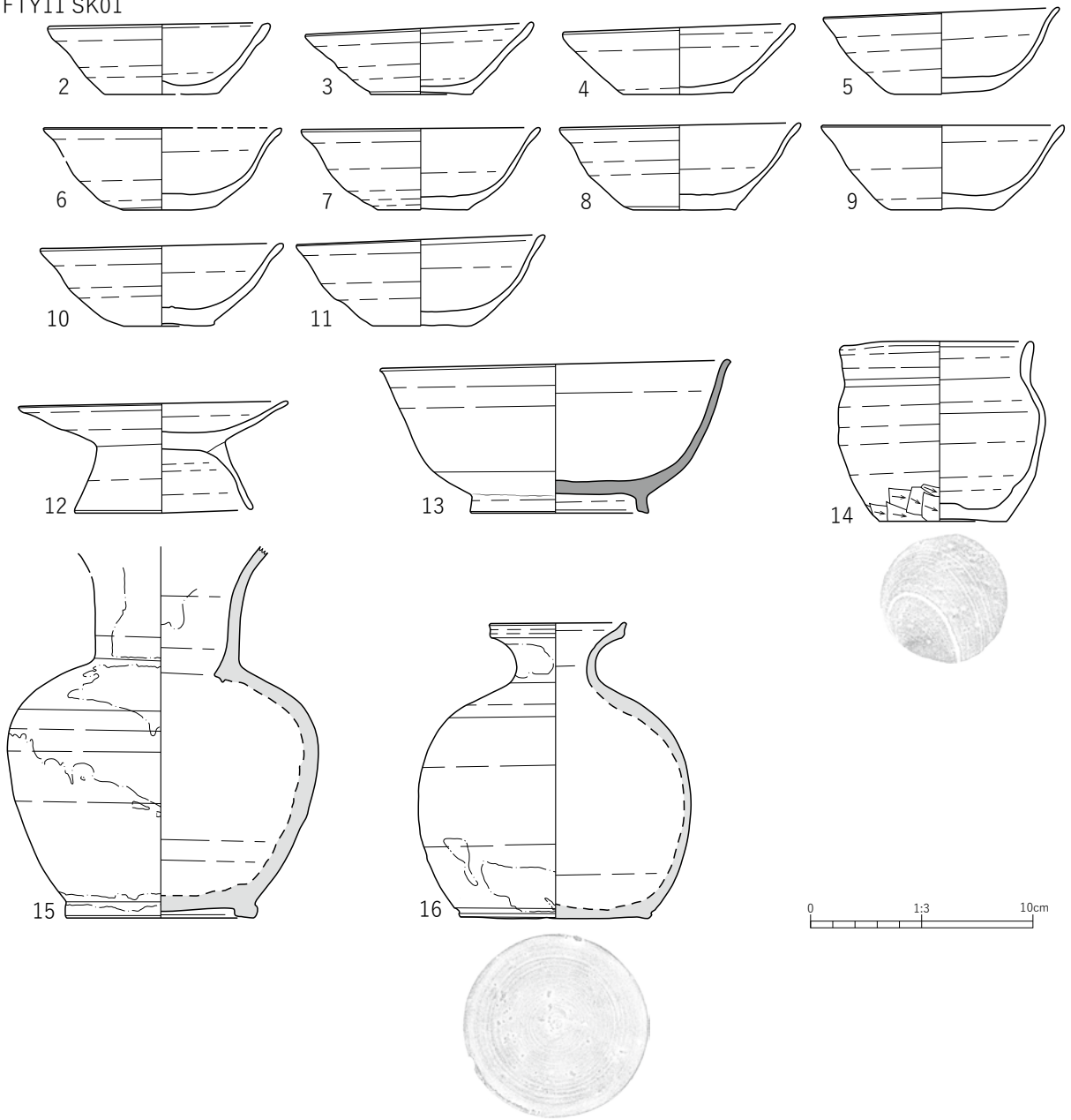
第26図 出土土器 (第3次)



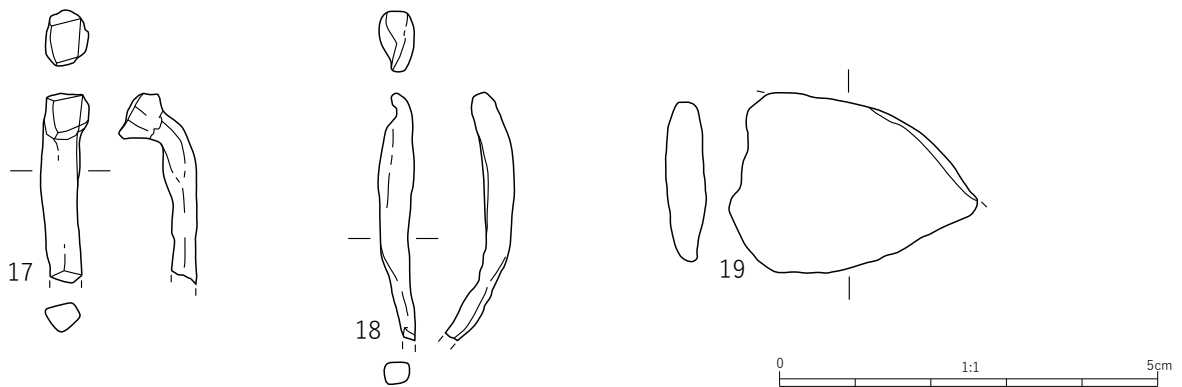
第27図 八稜鏡 (第1次追加実測)

土器類

FTY11 SK01



金属製品



第28図 出土土器・金属製品（第1次再実測・追加実測）

第6章 遺物

第6表 出土土器観察表（第3次）

No.	遺構等	層位等*	種別	器種	残存部位	口径 (cm)		底径 (cm)		器高 (cm)		技法の特徴			備考
												外面	内面	底部	
1	A区 ST01	覆土1層	土師器	坏A	口縁部～底部	10.4	実	6.1	実	2.7	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	底面に凸凹あり。胎土に礫(白、黒、茶色)多い。
2	A区 ST01	覆土1層	土師器	坏A	口縁部～底部	11.1	実	6.1	実	2.7	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	摩耗強い。胎土に礫多く含む。
3	A区 ST01	覆土1層	土師器	坏A	口縁部～底部	10.6	実	5.5	実	3.0	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	底面に凸凹あり。胎土に白い礫多く含む。
4	A区 ST01	覆土1層	灰釉陶器	埴	口縁部～底部	16.5	実	8.1	実	7.0	完	ロクロナデ+ケズリ+灰釉	ロクロナデ+灰釉	回転ヘラ削り	外面体部下半にケズリ。釉は浸し掛け。
5	A区 SP04	覆土	土師器	甕	口縁部	不明	—	不明	—	3.1	残	ナデ	ナデ	不明	胎土に礫多く含む(白、黒、茶、透明)。
6	A区 SP06	覆土2・3層	軟質須恵器	坏A	口縁部～体部上半	16.0	復	不明	—	2.6	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	胎土に礫(黒、白、茶)多く含む。黒斑あり。
7	A区 SP08	覆土	土師器	甕	体部下～底部	不明	—	8.0	復	3.5	残	ナデ	ナデ	不明	胎土に礫多く含む。
8	B1区 SP38	覆土	土師器	甕	口縁部～頸部	24.0	復	不明	—	3.4	残	ハケ目	ナデ	不明	口縁約1/12残存。胎土に礫多い。内面摩耗。
9	B3区	基8・9層	弥生土器	甕	体部	不明	—	不明	—	1.7	残	櫛描波状文	不明	不明	黒斑あり。No.10と同一個体か。
10	B3区	基8・9層	弥生土器	甕	体部	不明	—	不明	—	2.1	残	櫛描波状文	不明	不明	黒斑あり。No.9と同一個体か。
11	B3区	基9層	弥生土器	甕	体部	不明	—	不明	—	3.5	残	櫛描波状文	不明	不明	脚付きの甕か。黒斑あり。
12	B3区	基8・9層	土師器	甕	体部下～底部	不明	—	7.6	復	1.6	残	ナデ	不明	ナデ	胎土に礫多く含む。底部歪む。

※「基」は、基本層序を示す。

第7表 出土金属製品観察表（第1次）

No.	遺構	層位	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
1	SK01	覆土4層	八稜鏡	銅	10.9	10.9	縁厚 0.55 紐厚 0.5	161.5	再実測
17	八稜鏡付近	覆土4層	釘	鉄	2.5	0.5	0.4	1.2	追加実測
18	SK01	覆土4層	釘	鉄	3.3	0.5	0.4	1.1	追加実測
19	SK01内 南西	覆土4層	鉄片	鉄	2.4	3.3	0.5	5.2	追加実測

第8表 出土土器観察表(第1次)

No.	遺構等	層位等	種別	器種	残存部位	口径 (cm)		底径 (cm)		器高 (cm)		技法の特徴			備考
												外面	内面	底部	
2	SK01	覆土4層	土師器	坏A	口縁～ 底部	10.0	実	5.0	実	3.2	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.6
3	SK01	覆土4層	土師器	坏A	口縁～ 底部	10.3	実	4.5	実	3.3	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.11
4	SK01	覆土4層	土師器	坏A	口縁～ 底部	10.5	実	5.0	実	3.2	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.12
5	SK01	覆土4層	土師器	坏A	口縁～ 底部	10.7	実	4.6	実	3.9	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.9
6	SK01	覆土4層	土師器	坏A	口縁～ 底部	10.7	実	4.4	実	4.7	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.10
7	SK01	覆土4層	土師器	坏A	口縁～ 底部	10.8	実	4.2	実	3.7	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.2
8	SK01	覆土4層	土師器	坏A	口縁～ 底部	10.9	実	5.0	実	3.9	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.13
9	SK01	覆土4層	土師器	坏A	口縁～ 底部	11.0	実	4.6	実	3.8	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.15
10	SK01	覆土4層	土師器	坏A	口縁～ 底部	11.0	実	4.1	実	3.7	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.4
11	SK01	覆土4層	土師器	坏A	口縁～ 底部	11.2	実	4.3	実	4.1	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.5
12	SK01	覆土4層	土師器	盤B	口縁～ 底部	12.3	実	8.1	実	5.2	完	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	FTY11_No.7
13	SK01	覆土4層	緑釉陶器	埴	口縁～ 底部	15.8	実	8.0	実	5.9	完	ロクロナデ + 緑釉	ロクロナデ + 緑釉	回転糸 切り	FTY11_No.14
14	SK01	覆土4層	土師器	小型 甕D	口縁～ 底部	8.7	実	5.7	実	8.1	完	ロクロナデ + ケズリ	ロクロナデ	回転糸 切り	FTY11_No.8
15	SK01	覆土4層	灰釉陶器	長頸 壺	頸部～ 底部	不明	—	8.4	実	16.8	残	ロクロナデ + 灰釉	ロクロナデ + 灰釉	回転糸 切り + ナデ	FTY11_No.1
16	SK01	覆土4層	灰釉陶器	小瓶	口縁～ 底部	6.2	実	8.5	実	13.3	完	ロクロナデ + 灰釉	ロクロナデ + 灰釉	回転ヘ ラ削り	FTY11_No.3



## 第7章 自然科学分析

### 1 放射性炭素年代

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂、佐藤正教、廣田正史、山形秀樹、Zaur Lomtadidze、三谷智広

#### (1) はじめに

長野県安曇野市に所在する明科遺跡群古殿屋敷より出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### (2) 試料と方法

試料は、土壙 ST01 から出土した炭化材 1 点である。発掘調査所見によれば、ST01 の時期は 10 世紀中頃～後半と推定されている。

測定試料の情報、調製データは第 9 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、暦年代を算出した。

第 9 表 測定資料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-43537	試料 No.1 遺構：土壙（ST01）	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン

#### (3) 結果

第 10 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代、第 29 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代（yrBP）の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

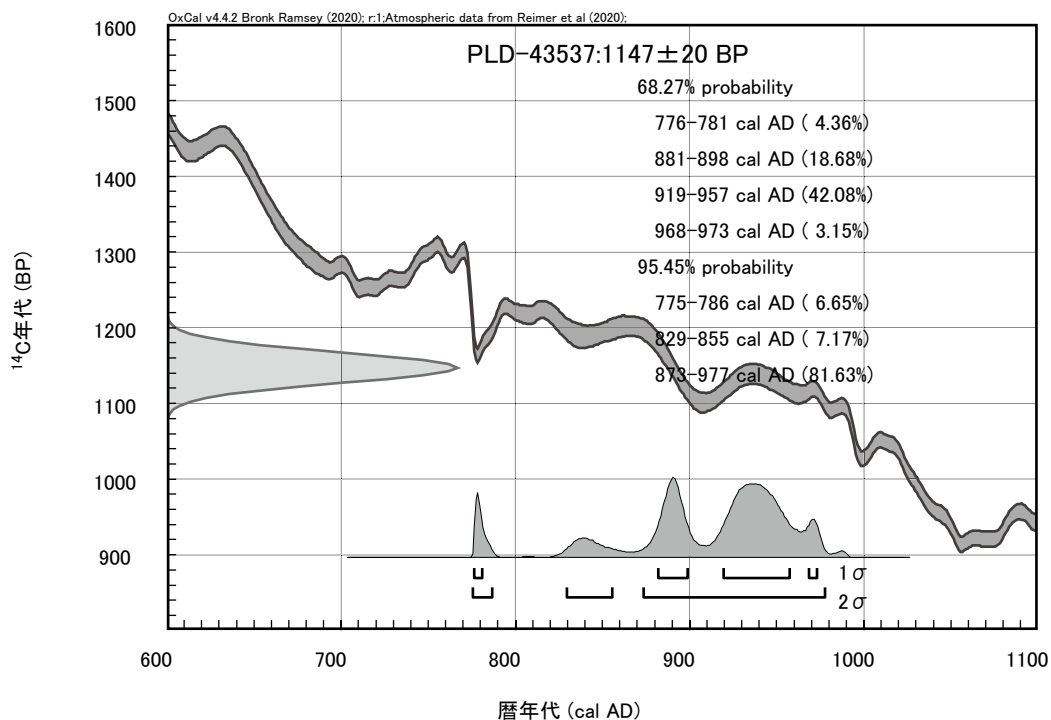
暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された  $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、および半減期の違い（ $^{14}\text{C}$  の半減期

5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C 年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された <sup>14</sup>C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は <sup>14</sup>C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第10表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ <sup>13</sup> C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	<sup>14</sup> C 年代 (yrBP ± 1 σ)	<sup>14</sup> C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-43537 試料 No.1	-28.58 ± 0.14	1147 ± 20	1145 ± 20	776-781 cal AD ( 4.36%) 881-898 cal AD (18.68%) 919-957 cal AD (42.08%) 968-973 cal AD ( 3.15%)	775-786 cal AD ( 6.65%) 829-855 cal AD ( 7.17%) 873-977 cal AD (81.63%)



第29図 暦年較正結果

#### (4) 考察

試料 No.1 (PLD-43537) の測定結果は、2 σ 暦年代範囲(確率 95.45%)で見ると、775-786 cal AD (6.65%)、829-855 cal AD (7.17%)、873-977 cal AD (81.63%) で、8世紀後半～10世紀後半の暦年代を示した。これは、奈良～平安時代中期に相当し、土壌の推定時期と整合的である。

なお、今回測定した試料は、最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。したがって、最終形成年輪の残っ

ていない今回の試料の測定結果は、古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。

### 参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」: 3-20. 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

## 2 明科遺跡群古殿屋敷（第3次発掘調査）出土の歯牙

藤田 尚、三谷智広、中村賢太郎（パレオ・ラボ）

### (1) はじめに

長野県安曇野市に所在する明科遺跡群古殿屋敷から出土した歯牙の鑑定結果について報告する。

### (2) 試料と方法

明科遺跡群古殿屋敷の土壙 ST01 覆土から出土した歯 20 袋である。遺構の時期は、平安時代（10 世紀半ば～後半）と推定されている。試料は、「FTY20\_ST01 フク土」とラベリングされた 20 袋のチャック付き袋に 1～数点ずつ封入されていた。これらの試料を、肉眼で観察し、鑑別した。

### (3) 結果

今回観察した試料は、ヒト (*Homo Sapiens*) の乳歯であると鑑別された。いずれも歯冠部のみであり、歯根部は存在しない。このような場合、鑑別は 2 通りを考えなければならない。一つは、出産以前の胎児の歯であることによって、歯根の形成にまで至っていないものであること。一つは、乳歯から永久歯への生え代わりの時期において、生理的機序によって乳歯の歯根が吸収され、結果として歯冠のみが残存する場合である。20 袋の歯のうちいくつかには、歯の咬合面に毎日の食事で生じる歯のすり減り、いわゆる咬耗が明らかに見られる。従ってこれらの歯を残した個体（ヒト）は、早期の死産等による個体ではなく、少なくとも乳歯と永久歯が生え変わる時点までは、生存していたと解釈することにより妥当性がある。

乳歯の歯冠は薄く、従って今回の資料も完形で残存したものは少ない。従って、歯種の同定については、はっきり確信を持って断言できないものがほとんどであるが、袋ごとの歯種についてさらに詳細な所見を述べる。

歯①：上顎左の第 1 乳臼歯破片と思われる。咬耗の痕跡が認められるとともに（第 31 図 1）隣接面に齶蝕（むし歯）の所見が認められた（第 31 図 2）。

歯②：乳臼歯破片と思われるが、非常に部分的にしか残存しておらず、それ以上のことは分からない。

歯③：同様に乳臼歯破片と思われる。咬耗の痕跡が認められた（第 31 図 3）。

歯④：本歯も乳臼歯と思われるが、部位は不明である。咬耗の痕跡が認められた。

歯⑤：乳犬歯の可能性が高い。上顎か下顎かまた左右は判別できない。

歯⑥：乳切歯と思われるが、小さな破片であり、それ以上は分からない。

歯⑦：乳切歯と思われるが、小さな破片であり、それ以上は分からない。

歯⑧：乳切歯と思われるが、小さな破片であり、それ以上は分からない。

歯⑨：乳切歯と思われるが、小さな破片であり、それ以上は分からない。

歯⑩：乳切歯と思われるが、小さな破片であり、それ以上は分からない。齲蝕（むし歯）が認められる。

歯⑪：乳切歯と思われるが、小さな破片であり、それ以上は分からない。

歯⑫：乳臼歯の一部と思われるが、破片が小さく、それ以上は分からない。

歯⑬：乳切歯と思われるが、小さな破片であり、それ以上は分からない。

歯⑭：乳犬歯の破片かと思われるが、小さな破片であり、それ以上は分からない。

歯⑮：乳切歯と思われるが、小さな破片であり、それ以上は分からない。

歯⑯：乳臼歯の一部と思われるが、破片が小さく、それ以上は分からない。

歯⑰：乳臼歯の一部と思われるが、破片が小さく、それ以上は分からない。

歯⑱：乳切歯と思われるが、小さな破片であり、それ以上は分からない。

歯⑲：ヒトの歯と思われるが、ヒト科以外の歯の可能性も否定できない。また、明らかに①－⑳までとは大きさ、色が異なる。

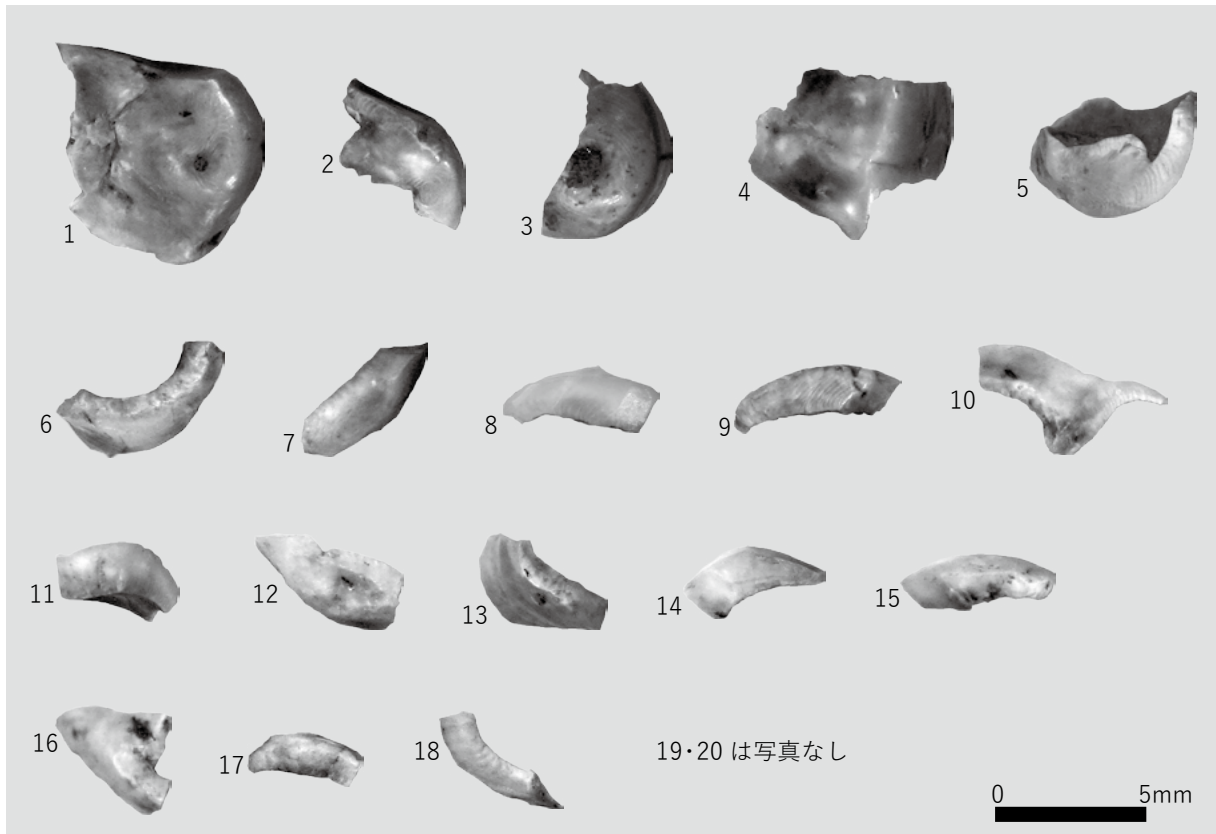
歯⑳：乳歯の歯冠の微小破片。

#### (4) 考察

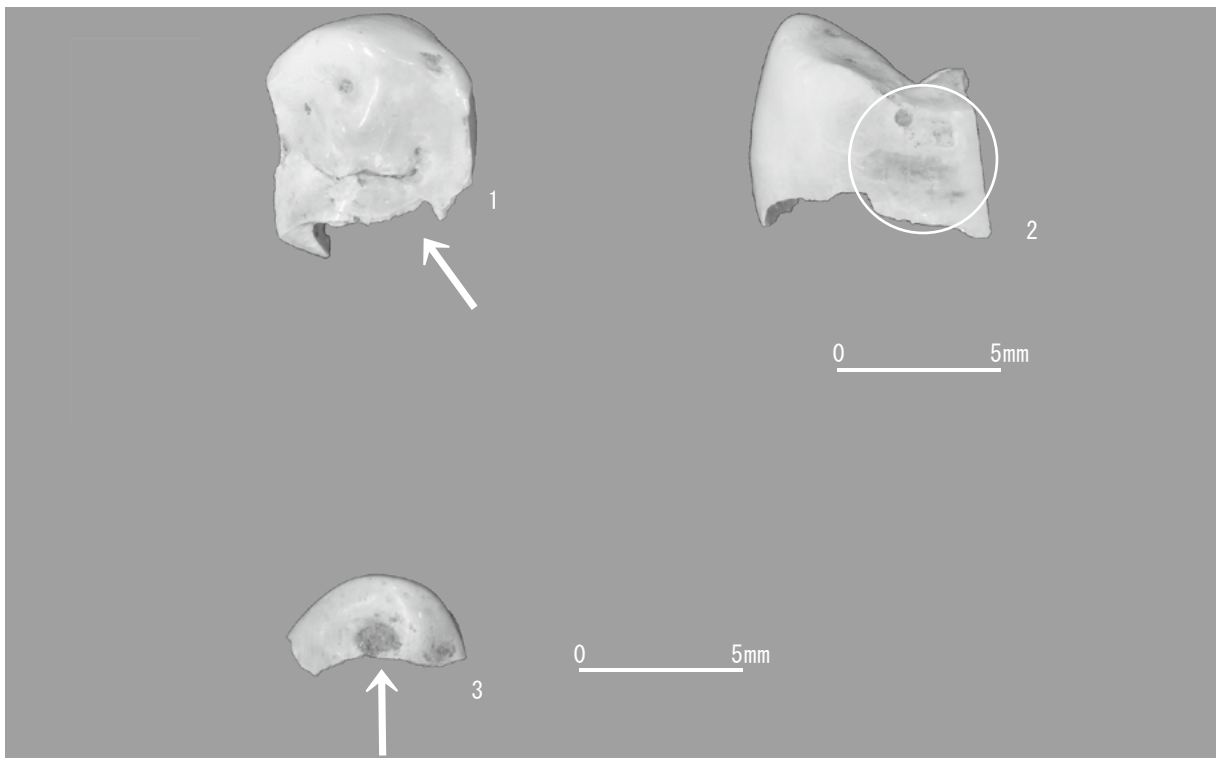
今回鑑別した歯については、いずれも乳歯の破片と判断された。歯⑲については、前述のように、乳歯とは思わず、ヒト以外の歯もしくは歯ではない物体であることも考えられる。

今回の鑑別から、以下のことが考察できる。即ち、木棺墓もしくは土壙墓からの出土であれば、これらの乳歯は同一人物の可能性が高い。一般に乳歯のエナメル質基質の形成は、胎生数週間で開始されるが、肉眼で識別できるようになるのは、妊娠5か月以降である。生後9か月ごろから永久歯の形成が肉眼で鑑別できるようになるが、資料中に永久歯と見られる歯が無かったのは、少々不思議である。それは、乳臼歯に毎日の食事に起因すると考えられる咬耗が見られること、また齲蝕（むし歯）の痕跡が認められることから、この乳幼児は1歳半から3歳の間までに死去したと考えるのが第1の考え方である。4、5歳以降は、永久歯が歯槽骨の内部に留まっているとしても、死体が骨になった場合、その永久歯の歯冠が発見されても良いはずである。しかしながら、土壙から全く永久歯の歯冠部らしきものが発見されていない。ただし、これは同一個体の歯ではなく、複数個体の歯が混在した結果、と考えれば納得出来る状況となる。咬耗やむし歯の存在は、当時の食生活を考える上で極めて貴重である。今後この観点からの研究を深めることは意義のあることと思われる。

歯は人体中最も硬度が高く、遺跡からしばしば発掘される。本個体が乳幼児であったとすれば、人骨は非常にきゃしゃであって、時を経ることなく土に還ってしまっただろう。しかし歯は硬度が高いため、残ったと考えるべきである。ただ、前述のように、その場合形成が開始されている永久歯は、乳歯よりよほど頑丈な訳であるから、それが全く発見されていないということは、やはり不思議である。以上の状況から、同地域の10世紀半ばから後半の平安時代の葬制について、遺体の再葬等も含めて検討を試みる必要があるかもしれない。



第30図 古殿屋敷出土の歯牙 1



第31図 古殿屋敷出土の歯牙 2

1 歯①に見られた咬合面の咬耗    2 歯①に見られた齲蝕（むし歯）の痕跡    3 歯③に見られた咬合面の咬耗

## 第8章 調査の総括

### 1 成果と課題

古殿屋敷第3次発掘調査では、公共施設建設に際し、面積103㎡の発掘調査を実施した。この調査の結果、土壙1基、柱穴列1か所、掘立柱建物跡2棟、その他ピットを確認した。

第32図は、平成23年（2011）実施の第1次発掘調査区と令和2年（2020）の第3次調査区を重ね合わせた平面図である。今回の調査で検出した遺構に木棺墓FTY11\_SK01を加え、切り合い関係及び比定時期を第32図右下に整理した。検出した遺構では、掘立柱建物跡SB01が最も古い。SB01を構成するピットは柱穴列SA01に切られるほか、土壙FTY20\_ST01にも切られる。SA01は、掘立柱建物跡SB02に切られる。FTY20\_ST01とFTY11\_SK01は、出土土器の型式学的検討から時期差があると判断した。SA01・SB02とFTY20\_ST01には、直接的な切り合いはない。

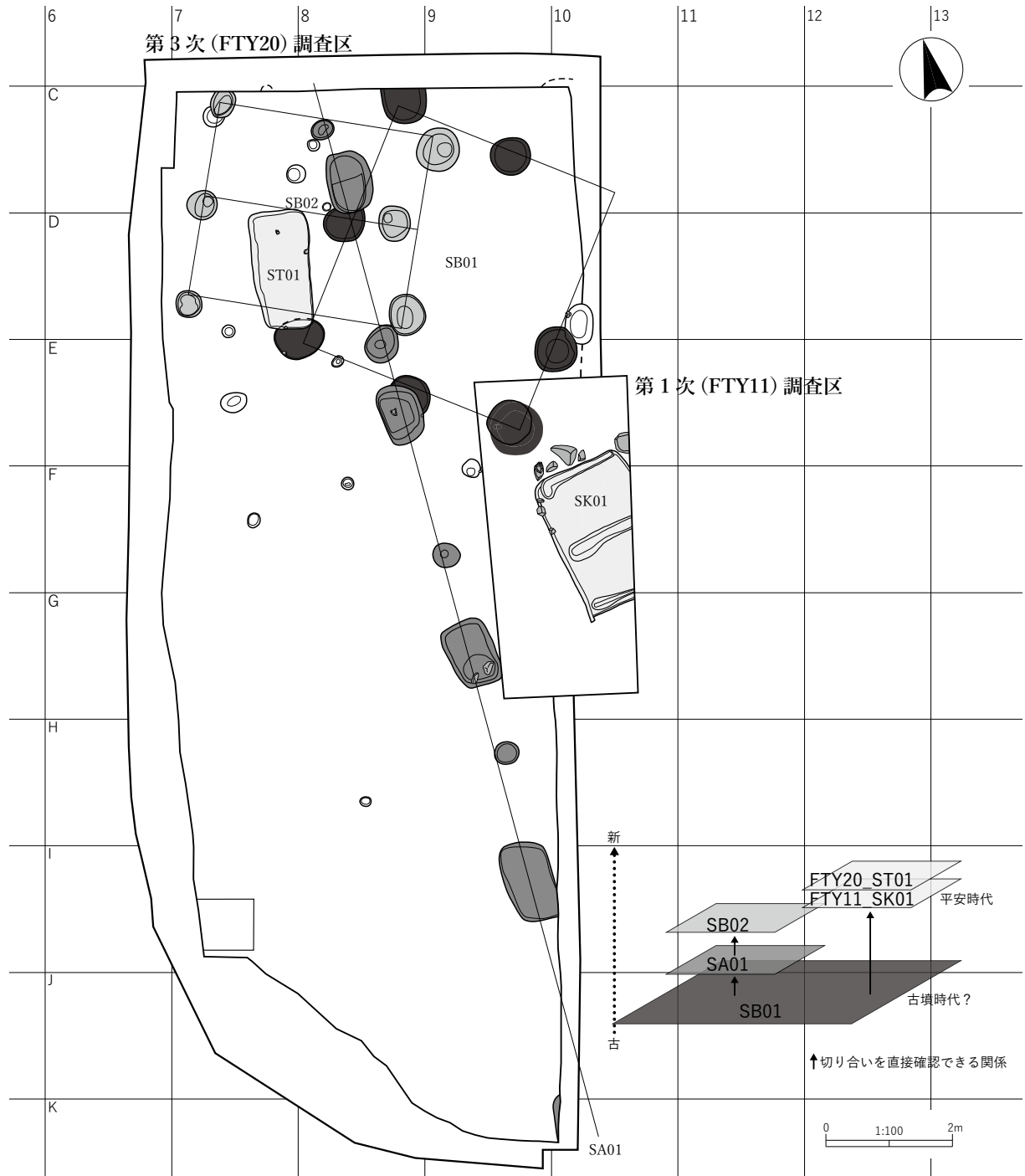
土師器坏Aの法量分析の結果から、FTY11\_SK01を松本盆地古代10期、FTY20\_ST01を松本盆地古代11期に時期比定し、前後関係が判明した。これらの遺構間の距離は約4.4mで、長軸方向はやや異なる。現在のところ、古殿屋敷の所在する会田川左岸で、平安時代の集落跡を確認していないため、古殿屋敷の平安時代の墓の被葬者は、会田川右岸の潮遺跡群<sup>うしおしんめいぐうまえ</sup>潮神明宮前遺跡（以下、「潮神明宮前遺跡」とする。）の平安時代集落に所属していたと考えることが妥当である（安曇野市教委2019）。潮神明宮前遺跡の平安時代集落は、古殿屋敷から会田川を隔てて北に約300mに所在する。これまでの発掘調査・試掘の結果から潮神明宮前遺跡における平安時代集落の遺構分布範囲は、東西約150m、南北約100mと推定でき、遺構密度は1.19棟/100㎡となっている<sup>1</sup>。平安時代の木棺墓の立地については、集落からある程度の距離をおいた場所に立地する場合と、集落の内部の竪穴建物に隣接した目立つところに群集せず単独で作られる場合があることが指摘されている（原2009）。古殿屋敷の2基の墓と潮神明宮前遺跡の集落との関係は、前者といえる。

これまでの調査結果をまとめると、古殿屋敷の変遷は次のとおりである。まず、第2・3次調査での弥生土器の出土から、弥生時代の集落が近隣に存在する可能性がある。続いて、第2次調査で古墳時代前～中期の焼失建物跡を精査し、土器類・石製小玉のほか、炭化材・炭化米が出土したことから、当該期に集落及び食糧生産域が存在したことがわかる。古墳時代後期～奈良時代には、第3次調査で柱穴列SA01を検出した。SA01に後続して、掘立柱建物SB02が建てられるが、詳細な時期や規模は不明である。平安時代の10世紀後半には、この場所は墓域となりFTY11\_SK01やFTY20\_ST01が造られた。また、本書第5章では触れなかったが、基本層序第7層上面で掘り込みを確認できるピット群もあり、年代的に新しい掘立柱建物である可能性もある。元々、古殿屋敷は屋敷地であったという伝承があり、中近世の城館跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されていることから、中世以降の遺構・遺物の存在に留意が必要である。

今後の課題として、次の点が挙げられる。まずは、柱穴列SA01の詳細な検討である。圍繞施設と

1 潮神明宮前遺跡第1～3次発掘調査の結果、平安時代の竪穴建物跡数35、発掘調査面積2,925㎡である（安曇野市教委2019）。

して塀などの建造物が存在したとすると、その範囲・区画内の利用方法の解明が必要といえる。続いて、平安時代の墓域の広がりと内容の解明がある。第1次調査の時点では調査面積が狭小で墓域の広がりを想定できなかったが、第3次調査で土壌を検出したことにより複数の墓で構成される墓域であることが判明した。また、墓壙の規模や出土土器にも差があることがわかった。出土した乳菌の理解も併せて、今後の課題としたい。



第32図 第1次・第3次調査区合成図



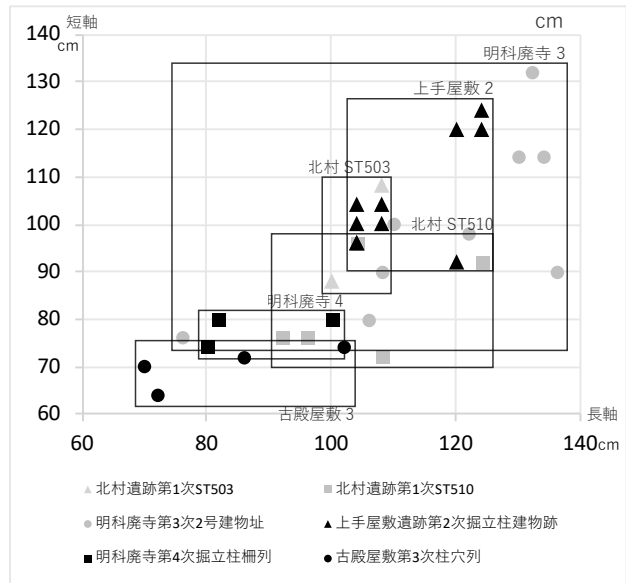
## 2 方形柱穴

古殿屋敷第3次発掘調査で検出した柱穴列SA01は、ほぼ真北を指す軸線上に柱痕跡と抜取穴を残す方形柱穴と円形ピットが並ぶ。このうち方形柱穴からは、小破片ながら古代の土器類が出土した。第11表に、安曇野市内で、意識的に柱穴を方形に掘削して掘立柱建物や塀などの構造物を構築したと考えられる主な例を集成した。各報告書から、平面形上端での長・短軸<sup>1</sup>を計測し、2つの変数のばらつきを数値化するために共分散<sup>2</sup>を算出した。また、計測値をもとに散布図を作成した(第33図)。

長・短軸の共分散をみると、古殿屋敷第3次SA01(以下、「FTY20\_SA01」とする。)は

49.333であった。これと比較して、明科廃寺第4次掘立柱柵列が22.000と最もばらつきが小さく、規格的であると解釈できる。北村遺跡第1次ST503・ST510、上手屋敷遺跡第2次掘立柱建物跡は、69.600～80.000の数値をとり、FTY20\_SA01よりばらつきが大きい。明科廃寺第3次2号建物址は、方形柱穴列で構成される2×5間以上の掘立柱建物である。このうち計測可能な9基の柱穴では、共分散が249.333となり、今回比較対象とした他の遺構よりばらつきが大きいことを示している。

次に、長・短軸の規模とその分布について第33図をみると、FTY20\_SA01の柱穴規模は、70～102×70～74cmの範囲に分布する。これは、今回比較対象とした遺構の中では、最も規模が小さい。明科廃寺第4次掘立柱柵列が、2番目に規模の小さい分布である。北村遺跡第1次ST510・ST503がこれに続く。上手屋敷遺跡第2次掘立柱建物跡は、4×3間以上の掘立柱建物跡で、柱穴規模は104～124×92～120cmに分布する。なお、今回の分析対象にはしていないが、上手屋敷遺跡の柱穴での掘削の深さは56～100cmであり、他の遺構に比較して深い。明科廃寺第3次2号建物址は、柱穴規模が76～136×76～132cmと分布が広範囲にわたる。第33図の分布からは、長軸が80cm前後、100～120cm、120～140cmの3群で構成される可能性もあり、建物規模や柱穴の組み合わせについて今後検討する必要がある。



第33図 方形柱穴の長・短軸分布

1 抜取穴のある柱穴では、抜取穴を除いた当初の掘削の平面形を復元して計測した。

2  $x, y$  の観測値の組からなるデータを  $(x_1, y_1), \dots, (x_n, y_n)$  とすると、2変数の共分散 ( $S_{xy}$ ) は次の式で定義される。

$$S_{xy} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})$$

第11表 方形柱穴の規模

遺跡・遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	共分散
北村遺跡第1次 ST503	108	108	80.000
	100	88	
北村遺跡第1次 ST510	92	76	69.600
	96	76	
	124	92	
	108	72	
	104	96	
明科廃寺第3次 2号建物址	134	114	249.333
	110	100	
	130	114	
	132	132	
	122	98	
	108	90	
	106	80	
	76	76	
136	90		

遺跡・遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	共分散
上手屋敷遺跡第2次 掘立柱建物跡	104	96	71.111
	108	100	
	104	100	
	104	96	
	108	104	
	124	120	
	120	120	
	124	124	
明科廃寺第4次 掘立柱柵列	82	80	22.000
	80	74	
	100	80	
古殿屋敷第3次 柱穴列 SA01	70	70	49.333
	72	64	
	86	72	
	102	74	

### 3 平安時代の墓域

古殿屋敷第3次発掘調査では、第1次発掘調査で精査した平安時代の木棺墓 FTY11\_SK01 に後続する FTY20\_ST01 を検出し、精査した。これらの遺構は近接しており、時期差はあるものの、この場所が複数の墓で構成される墓域であったと判断できる。

第12表には、安曇野市内でこれまでに調査された主な平安時代の墓をまとめた。これ以外にも、平安時代の土坑で墓といえそうな遺構は数多くある<sup>1</sup>が、出土遺物が乏しいため墓と断定できない土坑、時期比定ができない土坑は集成外とした。この点については、改めて詳細な確認と検討が必要である。

#### (1) 安曇野の平安時代墓

集成した墓<sup>2</sup>のうち、確実に木棺墓といえるのは FTY11\_SK01 のみであり、出土遺物には漆塗り木箱入り青銅製八稜鏡、緑釉陶器など他の墓では見られないものがある。これ以外は、土壙として報告された遺構で、時期は10世紀前半～11世末にわたる。馬場街道遺跡第1次2号土壙は、出土した灰釉陶器碗を大原2号窯式とし、平安時代後期と報告した。灰釉陶器の型式からは、FTY11\_SK01 に後出する可能性が高い。栗の木下遺跡では、試掘で密集した4基の土壙を確認している。これら4基の土壙は、直径1m前後の楕円形で、伸展葬は考えにくい。報告書では、4基の土壙を一連の遺構と捉えており、大原2号窯式の灰釉陶器

<sup>1</sup> 例えば、梶海渡遺跡等では、平安時代の土坑が多量に報告されている（豊科町教委1993）。

<sup>2</sup> 出典は、第12表に記載した文献である。

第8章 調査の総括

第12表 安曇野市のおもな平安時代の墓

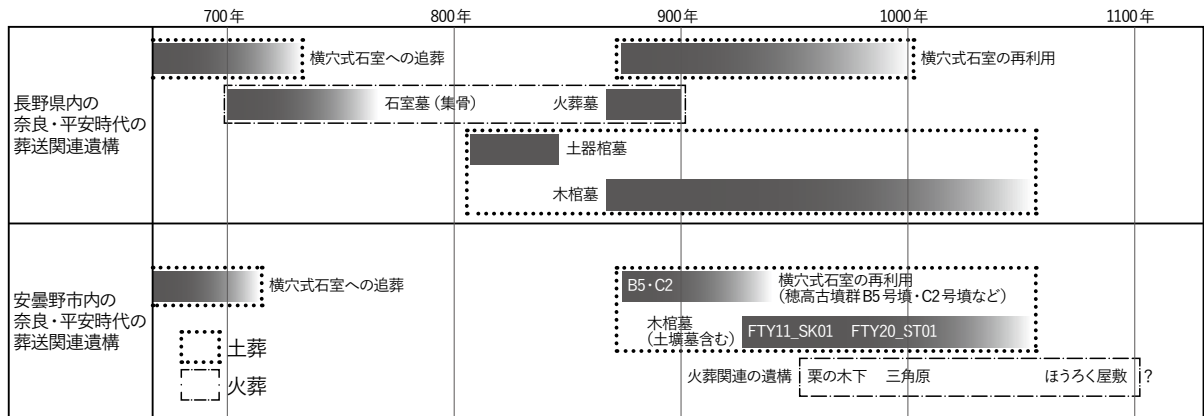
遺跡	調査次	遺構	種別	平面形	長軸×短軸 (m)	遺物など	時期※	文献
馬場街道遺跡	第1次	2号土壙	土壙	長楕円形	1.5 × 0.8	須恵器長頸壺1、灰釉壙1・小瓶1	10C 前半	穂高町 教委 1987
古殿屋敷	第1次	SK1	木棺墓	長方形	2.3 × 1.6	青銅製八稜鏡1 (漆塗り木箱入り)、 土師器坏8・盤1・小型甕1、 黒色A坏2、緑釉壙1、灰釉瓶2	10C 中葉	安曇野市 教委 2013
栗の木下遺跡	試掘	土壙1	土壙	楕円形	1.2 × 0.8	灰釉皿1・壙1・壺1	10C 後半	三郷村 教委 2005
栗の木下遺跡	試掘	土壙2	土壙 (焼 石・焼土 含む)	楕円形	0.9 × 0.75	灰釉壙2	10C 後半	三郷村 教委 2005
栗の木下遺跡	試掘	土壙3	土壙	楕円形	0.95 × 0.85	土師器坏3・壙2・小型甕1、 須恵器甕1、灰釉壺1、鉄製品1	10C 後半	三郷村 教委 2005
栗の木下遺跡	試掘	土壙4	土壙	楕円形	0.9 × 0.8	なし	10C 後半	三郷村 教委 2005
古殿屋敷	第3次	ST01	土壙	長方形	1.9 × 0.9	灰釉壙1、土師器坏3、乳菌19、 木製遺物	10C 後葉	本書
三角原遺跡	第1次	92号土坑	墓	不整楕円 形	1.5 × 0.5	土師器坏1	10C 後葉～ 11C 前葉	長野県 埋文セ 2005
三角原遺跡	第1次	89号土坑	墓	不整楕円 形	1.0 × 0.5	黒色A坏2、黒色B小壙1、 土師器坏1	10C 後葉～ 11C 前葉	長野県 埋文セ 2005
三角原遺跡	第1次	1号土坑	火葬関連 施設	不整形	0.8 × 0.7	灰釉壙1、土師器小型甕1	10C 後葉～ 11C 前葉	長野県 埋文セ 2005
潮神明宮前 遺跡	第3次	SK3	土壙	楕円形	0.6 × 0.4	土師器坏4・壙3、黒色B壙1	11C 前葉	安曇野市 教委 2019
三角原遺跡	第1次	6号土坑	墓	不整楕円 形	2.1 × 0.95	黒色A壙1、土師器坏5	11C 中葉	長野県 埋文セ 2005
明科廃寺	第4次	SK1	土壙	楕円形	1.5 × 0.6	土師器坏3	11C 後葉	安曇野市 教委 2017
ほうろく屋敷 遺跡	第1次	H6号住 上部火葬 墓	火葬墓	不整形	2.4 × 1.9	灰釉小瓶1・広口瓶1、土師器坏5、 黒色B坏1	11C 末	明科町 教委 1991

※ 時期は、各報告書記載の時期からおおよその暦年代に換算した。

壙、虎溪山1号窯式の灰釉陶器皿が相伴したことから、年代を10世紀後半とした。なお、これらの土壙のうち、土壙2は焼石・焼土が特徴的に残っていたため、火葬関連の遺構<sup>1</sup>と考える<sup>さんかくぼら</sup>。三角原遺跡では、平安時代の墓として3基の土壙と1基の火葬関連の遺構が調査された。このうち土壙と考えられる92・89・6号土坑は、長軸1.0～2.1mの楕円形で、土師器、黒色土器A・Bが埋納され、灰釉陶器などはない。最も新しい土壙は、明科廃寺第4次SK1で、楕円形の浅い掘り込みに土師器3点が埋納されていた。この遺構は、明科廃寺が寺院としての機能を有しなくなった後に、域内に構築された墓と考えている。

火葬関連の遺構として報告されている例は、前述の栗の木下遺跡土壙2、ほうろく屋敷遺跡第1次H6号住上部火葬墓、三角原遺跡第1次1号土坑火葬関連遺構の3例で、10世紀後半～11世紀前葉に造られた。

1 長野県内で9世紀後半に出現する火葬墓が、蔵骨器を土坑内に埋納するという定型化した墓制であるのに対し、安曇野市の例は焼土・骨片を包含するだけで火葬墓とは異なるため、「火葬関連の遺構」と記載する。



上段は原1995・2003、を参考に作成

第34図 奈良・平安時代の墓

栗の木下遺跡土壇2は径1m未満の楕円形で上部に焼石と焼土が残り、遺構上面中央付近から大原2号窯式の灰釉陶器壺が出土した。ほうろく屋敷の例は、9世紀の竪穴建物跡が廃絶・埋没した場所に造られた火葬関連施設である。炭化物の中から、灰釉陶器広口瓶に焼骨が入った状態で出土しており、蔵骨器の可能性が高い。三角原遺跡1号土坑は、集落から約40m離れた地点から単独で検出された。一辺1m未満の不正方形の遺構内に炭化物や焼土が多く含まれていた。この覆土中には、微細な焼骨も包含されている。

なお、今回は詳述しないが、当該期には古墳の横穴式石室を再利用した墓制<sup>1</sup>もある。

第34図では、安曇野市内の奈良・平安時代の墓の変遷を、長野県内の傾向と比較した。安曇野市では、現在のところ木棺墓・土壇の出現は10世紀中頃における。類例が少ないため下限は不明であるが、明科廃寺第4次SK1のような土壇として継続するのであれば、11世紀末までは存在する。また、3例のみであるが火葬関連の遺構も存在する。浅く不整形な土坑の覆土が焼土や炭化物を多量に包含し、骨片も含むことがあるという特徴を有する。10世紀中頃に出現したこの遺構が次の時代にどのように継続するか、類例を待ちたい。

## (2) 乳歯の出土

FTY20\_ST01からは、採取した土壌からヒトの乳歯が19点出土した。これらの乳歯は、歯冠部のみが残存しており、咬合面の咬耗、齲蝕が見られる。反面、永久歯は検出されなかったため、第7章で歯槽骨内に永久歯が形成されていない年齢である可能性、複数個体の乳歯歯冠部を土壇に埋納した可能性を指摘した。

第13表には、『長野県内遺跡出土古人骨リスト（詳細版）』（茂原ほか2018）から、長野県内における奈良・平安時代の乳歯が出土した遺構15例を抽出した。15例のうち大部分は、当該期の土坑・土壇墓で頭蓋骨、上下顎骨、歯槽骨などと共に乳歯が出土している。この例に該当しないのが、上五明<sup>かみごみょう</sup>条里水田址SB7である。この遺構は11世紀初頭の焼失建物跡で、カマド周辺から歯冠のみが出土した。ただし、乳歯・永久歯ともにみられる混合歯列期で、8歳前後の小児・男性と推定される。上五明条里水田址SB7の例は、頭蓋骨などが伴わず、乳歯の歯冠のみが出土した点がFTY20\_ST01と類似する。

<sup>1</sup> 横穴式石室の再利用については、宮村2017を参考にした。

第8章 調査の総括

FTY20\_ST01では、人骨も検出したが残存状態が悪く、採取できなかった。このため、採取した乳歯と人骨の関係は不明である。もし、被葬者が1歳半～3歳の乳児であれば、これらの乳歯は被葬者のものと判断できるが、乳歯自体が何らかの目的をもって、墓壇に埋納された可能性も残る。

第13表 長野県内で乳歯を出土した奈良・平安時代の遺構（茂原ほか2018をもとに作成）

遺跡	所在地	遺構名	時期・遺構種別	内容
篠ノ井遺跡群	長野市	SM6001	平安中期（10C後半～11C） ・土坑墓	7歳前後・性別不明、歯はほとんどが乳歯の混合歯列
篠ノ井遺跡群	長野市	SM7022	平安中期（10C前半） ・土坑墓	3歳前後・性別不明、歯は乳歯列、歯槽内には形成中の永久歯がある、乳歯の咬耗は少ない
平林東沖遺跡	長野市	SK7	平安・土坑墓	6歳程度の幼児・性別不明、歯は乳歯と永久歯が混在する
松原遺跡	長野市	SJ9	平安・土坑墓	5・6歳の幼児、乳歯列、永久歯の歯冠が形成され伏埋される
松原遺跡	長野市	SK1226	平安・土坑墓	人骨SK1226-3、3歳程度・性別不明、乳歯列、乳歯が10本が残る
松原遺跡	長野市	SK1598	土坑墓か	1歳以内の乳児、性別不明、乳歯列、乳歯に咬耗はほとんどない
松原遺跡	長野市	SK1687	平安・土坑墓	3～4歳程度、性別不明、乳歯列
松原遺跡	長野市	VU11	遺構外検出面グリッド	6歳前後、女性か、乳歯列、形成中の歯は小さいので女性と判断
屋代遺跡群	千曲市	SK6267	7C後半～8C代か・土坑墓	2歳前後・性別不明、乳歯列の個体
峯謡坂遺跡	千曲市	SM04	詳細時期不明・土坑墓 or 溝跡内の土坑	6歳以下の子供・性別不明、乳歯
上五明条里水田址	坂城町	SK643	平安時代後期以降か・土坑墓	6歳前後の小児、性別不明、残っているのは歯だけ、上顎歯の4本が残る、どの永久歯にも咬耗はない
上五明条里水田址	坂城町	SB7	11C初頭・竪穴建物跡	8歳前後の小児・男性か、数本の歯だけが残る、歯冠のみ、乳歯も出土しており混合歯列
弥勒堂遺跡	上田市	22号土壙	平安・土坑墓	2歳前後・性別不明、乳歯列は未完成
深堀遺跡	佐久市	D46号土坑	平安以降か・土坑墓	3歳程度・性別不明
深堀遺跡	佐久市	D47号土坑	平安時代以降か・土坑墓	1～1.5歳・性別不明、乳歯が上顎で9本・下顎で5本が残る



A区遺構検出（上が東）

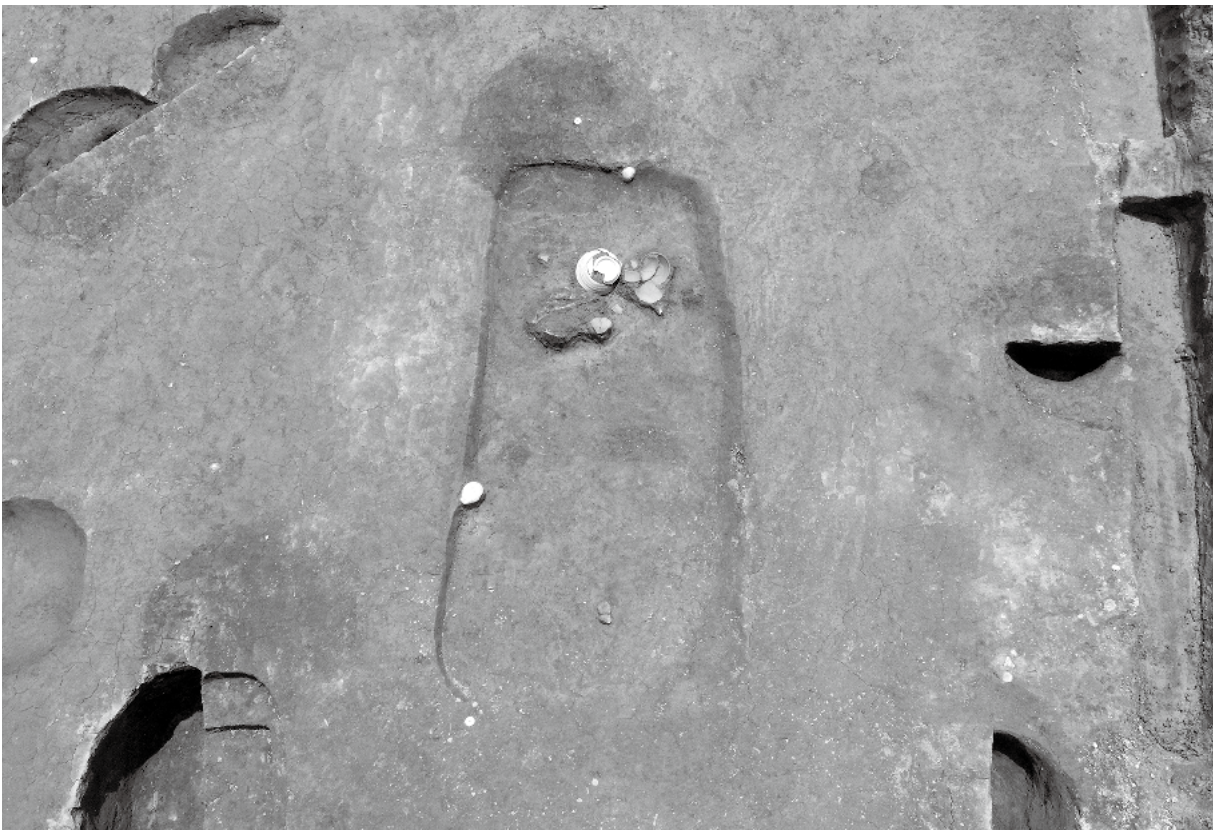


A区遺構検出（北から）

1 調査状況



A区完掘（北から）

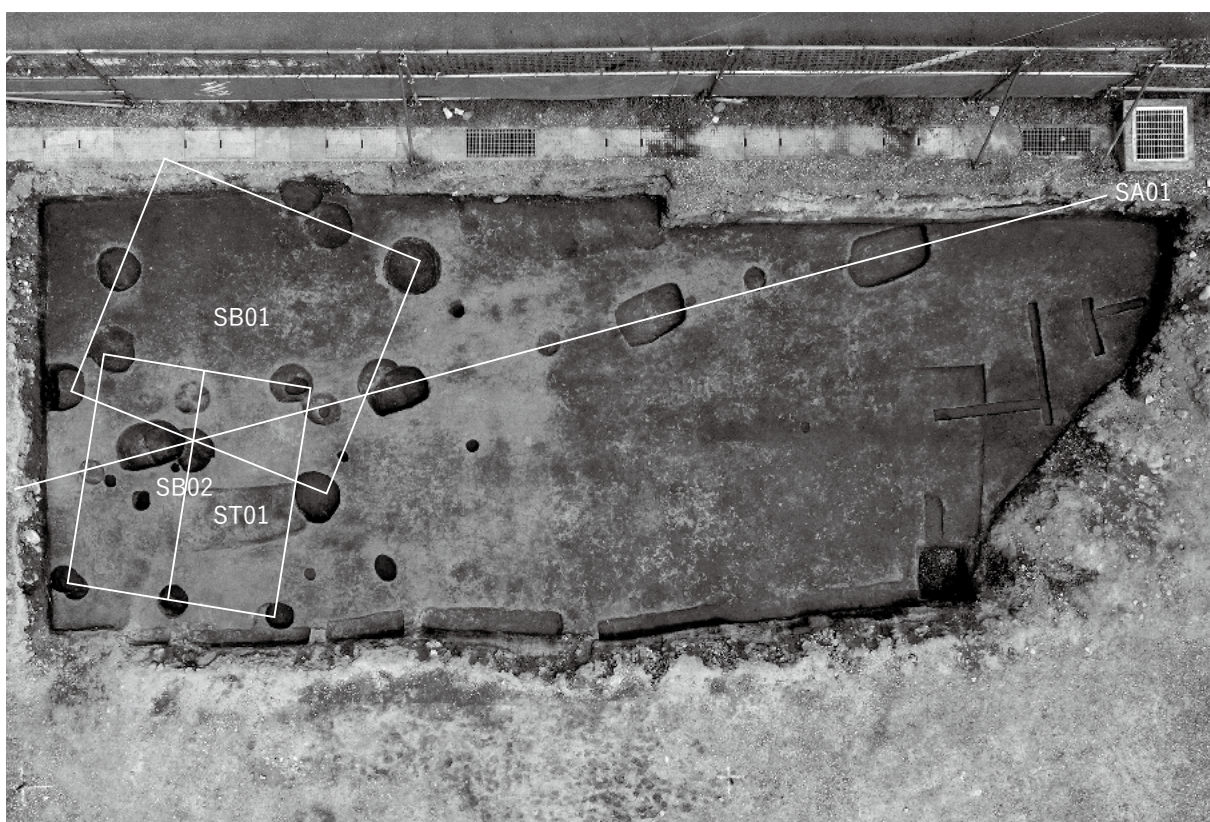


ST01完掘（北から）

2 調査状況



ST01 遺物出土状況（北から）



A区遺構配置（上が東）

### 3 調査状況





A区西壁基本土層

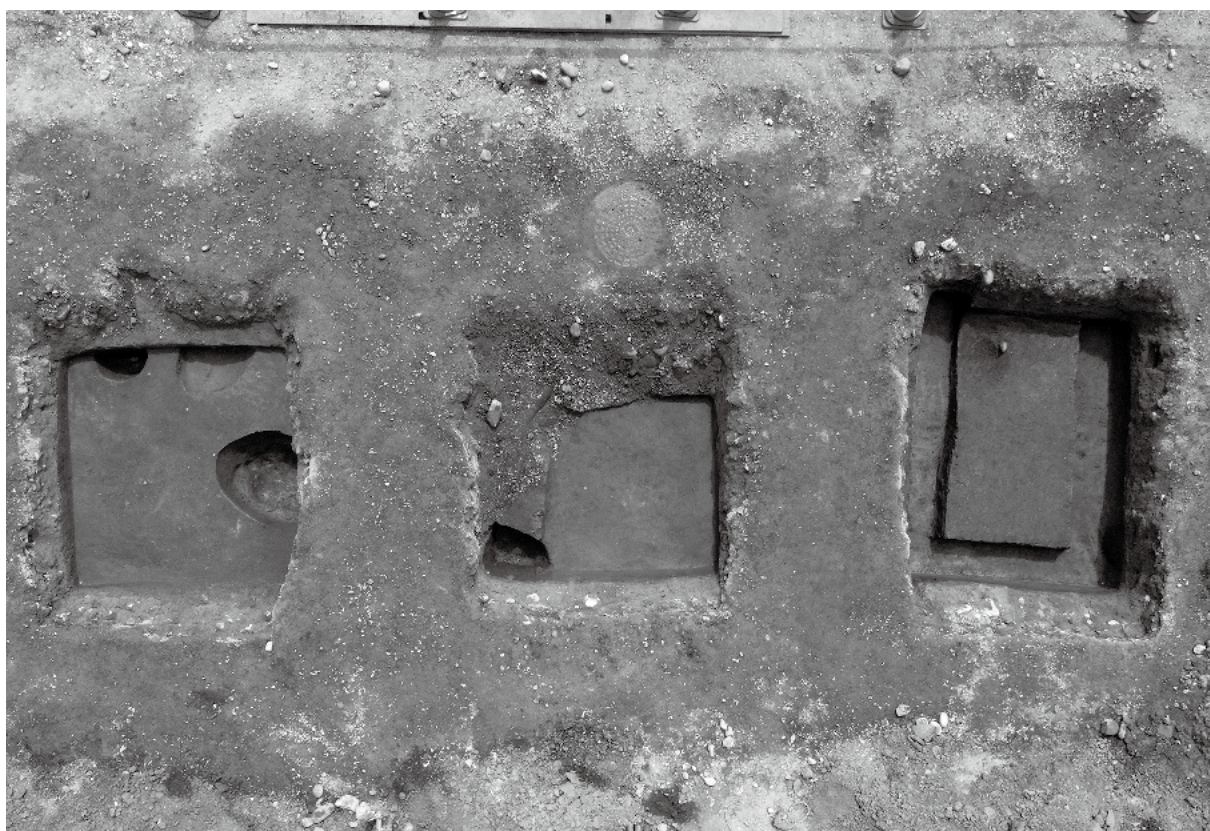


A区北壁土層

4 調査状況

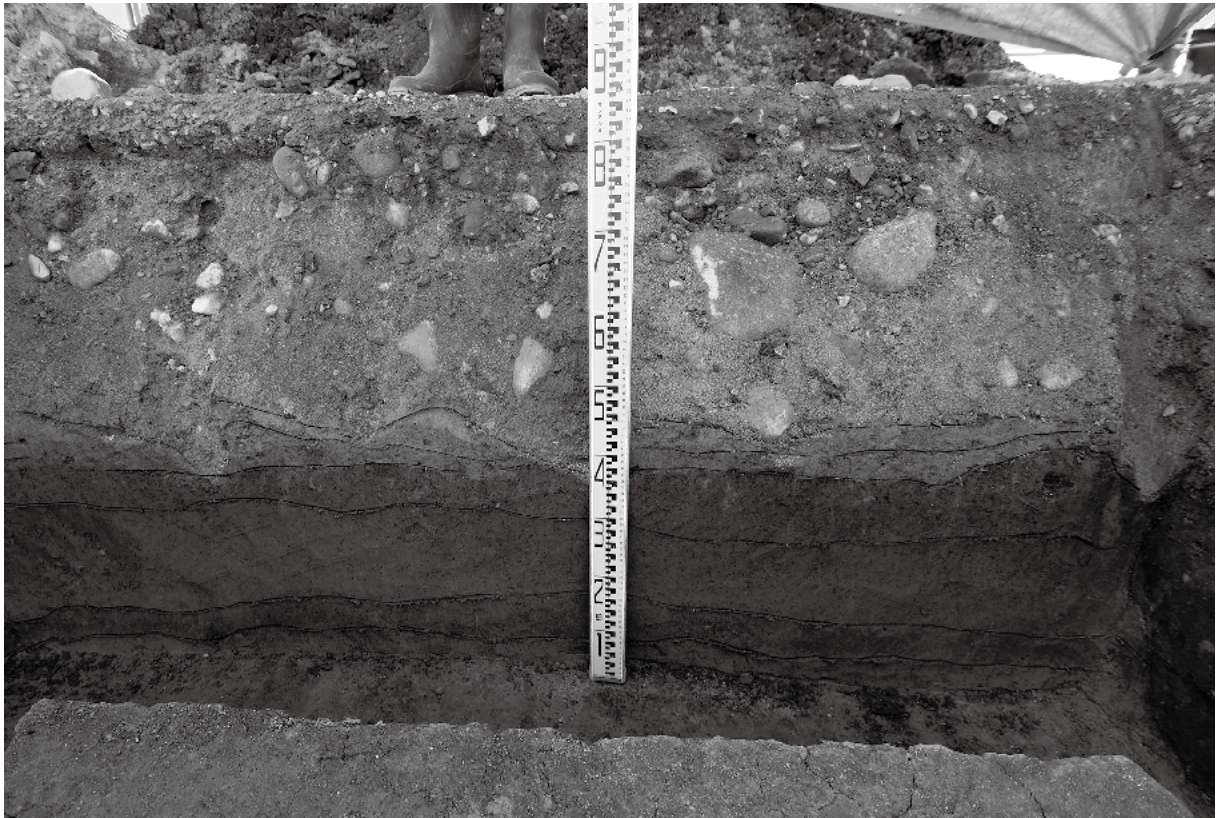


B1～3区遺構検出（上が東）



B1～3区完掘（上が東）

5 調査状況



B3区西壁基本層序



調査前全景（西から）



調査前近景（南から）

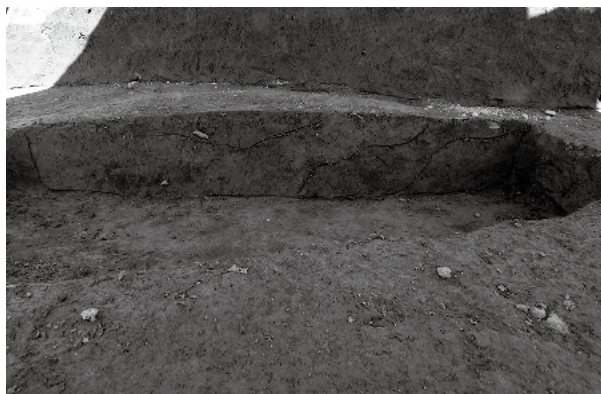


SP01 断面（西から）

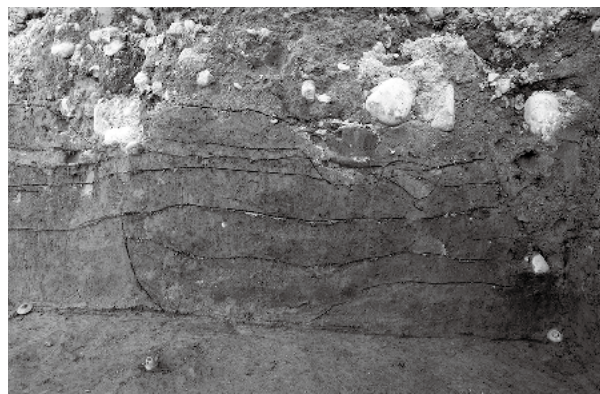


SP02 断面（西から）

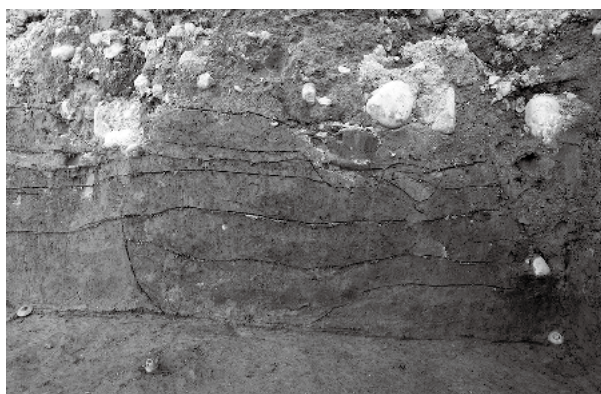
6 調査状況



SP03 断面 (南から)



SP04 断面 (西から)



SP05 断面 (西から)



SP17 完掘 (南から)



ST01 遺物出土状況 (北から)



B1 区完掘 (北から)



B1 区完掘 (西から)



B2 区完掘 (北から)

7 調査状況

写真図版



B2区完掘状況（東から）



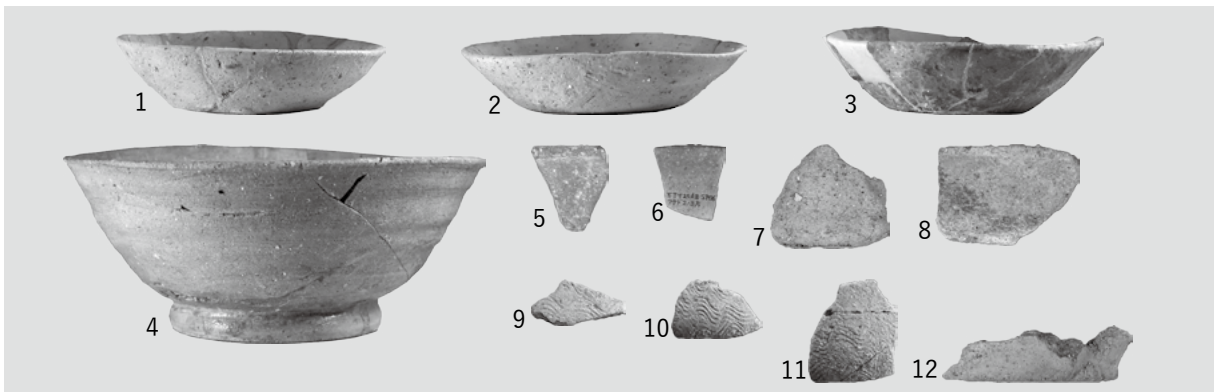
B3区完掘状況（北から）



B2区完掘状況（東から）



調査地現況（南西から）



第3次発掘調査出土遺物（S=1/3）



第1次発掘調査出土遺物追加実測（S=1/1）

8 調査状況・出土遺物

## 引用・参考文献（五十音順）

- 明科町史編纂会編 1984 『明科町史』上巻 明科町史刊行会
- 明科町教育委員会 1991 『ほうろく屋敷遺跡—川西地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第3集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2000a 『明科廃寺址—個人住宅建替えに伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第7集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2000b 『潮神明宮前遺跡—明科町総合福祉センター建設に伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第8集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2004 『上手屋敷遺跡第2次調査—町営住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第12集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2005 『潮神明宮前遺跡Ⅱ—町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第13集 明科町教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2013 『平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—明科遺跡群古殿屋敷（第1次）・明科遺跡群栄町遺跡（第3次）—』安曇野市の埋蔵文化財第6集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2014 『平成24年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—明科遺跡群栄町遺跡（第4次）—』安曇野市の埋蔵文化財第7集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2016 『平成26年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書—明科遺跡群古殿屋敷第2次発掘調査—』安曇野市の埋蔵文化財第9集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2017 『明科遺跡群明科廃寺4—個人住宅建設に伴う第4次発掘調査報告書—』安曇野市の埋蔵文化財第12集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2019 『潮遺跡群潮神明宮前遺跡3—安曇野市消防団第7分団第1部詰所新築工事に伴う第3次発掘調査報告書—』安曇野市の埋蔵文化財第18集 安曇野市教育委員会
- 太田喜幸、河西清光 1966 「長野県東筑摩郡明科町七貴緑ヶ丘遺跡調査」『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』長野県考古学会 pp.139-156
- 小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 長野県教育委員会 pp.97-158
- 茂原信生、川崎保、平林彰 2018 『長野県内遺跡出土古人骨リスト（詳細版）』  
<https://naganomaibun.or.jp/uploads/0465ab3edf7d2550abecdeb2db45aa08.pdf>（令和4年3月14日）
- 豊科町教育委員会 1990 『梶海渡遺跡—県営圃場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』豊科町教育委員会
- 長野県豊科建設事務所、穂高町教育委員会 1987 『古墳時代～中世を主とした複合遺跡 矢原遺跡群（馬場街道遺跡）—県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告—』長野県豊科建設事務所、穂高町教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 1993 『北村遺跡—中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11（明科町内）—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14 長野県埋蔵文化財センター

- 長野県埋蔵文化財センターほか 2005 『安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書—三郷村内—三角原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 76 長野県埋蔵文化財センターほか
- 原明芳 1995 「長野県の奈良・平安時代の墓制について」『第5回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制—墓制をめぐる諸問題—《第Ⅲ分冊 東海・北陸・中部・近畿の一部》』 栃木県考古学会ほか pp.137-155
- 原明芳 2009 「平安時代に出現する木棺墓からみえる信濃の在地社会」『信濃』61-4 信濃史学会 pp.57-73
- 原明芳 2013 「信濃国で発見された平安時代木棺墓の被葬者像」『一般社団法人日本考古学協会 2013年長野大会研究発表資料集 文化の十字路 信州』 日本考古学協会 2013年長野大会実行委員会 pp.598-599
- 降旗和夫 2007 「第1章明科町の自然環境 2.地形と地質」『明科町史』自然編 安曇野市教育委員会 pp.4-14
- 穂高町教育委員会ほか 1987 『穂高町矢原遺跡群（馬場街道遺跡）—県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告—』 穂高町教育委員会ほか
- 松本市教育委員会 2017 『長野県松本市 三間沢川左岸遺跡—発掘調査報告書—』松本市文化財調査報告 No.226 松本市教育委員会
- 三郷村教育委員会 2005 『三郷村埋蔵文化財Ⅱ—発掘調査・試掘調査報告書—』三郷村の埋蔵文化財第7集 三郷村教育委員会
- 宮村誠二 2017 「平安時代の信濃における横穴式石室の再利用」『信濃』69-3 pp.45-60 信濃史学会

調査報告書抄録

ふりがな	あかしないせきぐんふるとのやしき3							
書名	明科遺跡群古殿屋敷3							
副書名	安曇野市消防団第6分団第1部詰所建設に伴う第3次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第25集							
編著者名	土屋和章、中谷高志、株式会社パレオ・ラボ							
編集機関	安曇野市教育委員会							
所在地	〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地 TEL 0263-71-2000							
発行年月日	西暦2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
あかしないせきぐん 明科遺跡群 ふるとのやしき 古殿屋敷 (第3次)	ながのけんあづみのし 長野県安曇野市 あかしなながわて 明科中川手4232番1	20220	5-413	36° 21′ 25″	137° 55′ 47″	20200605 ～ 20200804	103㎡	公共施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
明科遺跡群 古殿屋敷	その他の墓	平安	土壙1、柱穴列1、 掘立柱建物跡2	土師器、軟質須恵器、 灰釉陶器		古墳時代後期～奈良時代の柱穴列、平安時代の土壙を確認した。		
要約	<p>明科遺跡群古殿屋敷は、犀川右岸の河岸段丘上に所在する。平成23年(2011)の第1次発掘調査で、平安時代の木棺墓を検出し、墓壙内から青銅製八稜鏡や灰釉陶器・土師器等の副葬品が出土した。今回の第3次発掘調査では、第1次調査区に隣接する位置を調査し、新たに平安時代の土壙1基を検出した。このことから、古殿屋敷は平安時代には複数の墓が造られ、墓域となっていたことが判明した。また、第3次調査では方形柱穴列や掘立柱建物跡も見つかっている。</p>							



安曇野市の埋蔵文化財第 25 集

## 明科遺跡群古殿屋敷 3

安曇野市消防団第 6 分団第 1 部詰所建設に伴う第 3 次発掘調査報告書

---

発行 令和 4 年 (2022) 3 月 31 日  
安曇野市教育委員会  
〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地  
電話0263-71-2000

編集 安曇野市教育委員会  
印刷 有限会社アルプス印刷

